新編中等西洋史

文學博士
時野谷常三郎著

（中學校用）

新教授要目準據

42991
教科書文庫
4
230
41-1941
20000
89531

教科書文庫
4
230
41-1941
2000089531

昭和十六年六月十二日
文部省檢定濟
中學校高等學校用

新編中等西洋史

（中學校用）

文學博士
常谷野三郎時著

新教授要目準據

広島大学
教
89531
図書

広島大学図書
2000089531

教育学科
資料室

4a
230
昭16

緒言

一、本書は昭和十二年三月文部省の公布にかかる中學校教授要目に準據し、中學校の教科書として使用し得るやう注意して編纂したのである。

二、本文の記事は極めて明確平易に、西洋諸國家成立の由來、國體、國民性等を比較考究して、その我が國と異なる所以を明らかにし、日本國民の自覺を向上せしめるやう格段の注意を拂つた。

三、西洋史の各時代に亙つて一貫せる概念を與へるに努め、特に現代文化の趨勢と世界の大勢とを明らかにし世界に於ける我が國の地位を自覺せしめるやう考慮を拂つた。

四、古今の史實の關聯するところを明かにし、史實の精神を捉へて綜合的・具體的に教授するやう特別なる注意を用ひた。

五、努めて偉人・傑士・忠良・賢哲の事績・嘉言等を引用し、生徒をして感奮

せしめ、よつて人格と國民性の培養に力を致さしめるやう注意した。

六、各時代の重要な史實に對應する國史・東洋史の緊要事實を年表に掲げ、なほ本文欄外にも摘記するやうにした。

七、挿入略地圖は一見瞭然たる如く、重要なる地名のみを記し、且つ描線を明確にした。

八、挿繪は努めて典據の正しきもののみを擧げ、且つ著者の自ら歐米に於て蒐集・撮影せるものをも加へた。

九、欄外ところどころ簡單な設問を掲げて、生徒の學習に便ならしむるやう考慮した。

十、著者は如上の方針に基づき、努めて愼重細心に編述したのであるが、なほその足らざるもの多きを惧れる。切に大方の示教を得て將來の完璧を期するものである。

昭和十二年四月

著者識

新編中等西洋史

目次

西洋史の意義

第一編　上代史

第一章　上代東方諸國……四
第二章　ギリシヤ……一〇
第三章　ギリシヤの文化……一七
第四章　ローマ……二〇
第五章　ローマの文化とキリスト教……二九

第二編　中世史

第一章　ゲルマニヤ民族の大移動とその建國……二四
第二章　中世ヨーロッパ㈠マホメット教とサラセン帝國……三八
第三章　中世ヨーロッパ㈡キリスト教會とフランク王國……四二
第四章　中世ヨーロッパ㈢神聖ローマ帝國とローマ法王……四八
第五章　中世ヨーロッパ㈣十字軍と法王權の衰微……五四
第六章　中世ヨーロッパ㈤西歐諸國の狀勢……五八

第三編　近世史

第一章　新機運の世界㈠文藝復興と新發明……六八
第二章　新機運の世界㈡新航路・新大陸の發見……七二
第三章　新機運の世界㈢宗教改革とその影響(上)……七六
第四章　新機運の世界㈣宗教改革とその影響(下)……八一
第五章　近代歐洲諸國家の發達(上)……九一
第六章　近代歐洲諸國家の發達(下)……九九
第七章　英佛兩國の植民地爭奪……一〇九
第八章　アメリカ合衆國の獨立……一一三

第九章　近世の文化……一二五

第四編　最近世史

第一章　フランス大革命……一二三
第二章　ナポレオン一世(上)……一二九
第三章　ナポレオン一世(下)……一三三
第四章　自由主義及び國民主義の發展……一四三
第一節　自由主義・國民主義と南米諸國・ギリシヤの獨立……一四三
第二節　自由主義とフランスの國力發展並にその國民性……一四七
第三節　自由主義とイギリスの國力發展並にその國民性……一五三
第四節　自由主義とアメリカ合衆國の隆運並にその國民性……一五七
第五節　自由主義・國民主義とイタリヤ王國の建設……一六〇
第六節　國民主義とドイツ帝國並にその國民性……一六三
第七節　國民主義とロシヤ帝國並にその國民性……一七〇
第五章　最近世の文化……一七五

第五編　現代史

第一章　列强の世界政策……一八一
第二章　世界大戰(上)……一八九
第三章　世界大戰(中)……一九五
第四章　世界大戰(下)……二〇一
第五章　大戰後に於ける列國の狀勢……二〇四
第六章　現代の趨勢……二一六
第七章　西洋史上より觀たる我が國の使命と國民の覺悟……二一九

大事年表
一、上代史
二、中世史
三、近世史
四、最近世史
五、現代史

目次終

新編中等西洋史

西洋史の意義

西洋史は主として白色人種(White Race)の建設せる諸國家の事蹟、換言せば各時代に亙つての歐洲及びその附近並に南北アメリカに起れる諸國家の政治の沿革、社會の發達、文化の進歩、その他諸國家相互の關係等に就いて研究の歩を進めるものである。

上代、東方諸國に白色人種たるハム民族(Hamites)並にセム民族(Semites)の文明が發生し、それが歐洲に移植せられるに及んで、アーリヤ民族(Aryans)の盛大な文明を生み、南北アメリカにも同じアーリヤ系の文明が發展した。そしてこのアーリヤ民族に依つてイギリス・フランス・ドイツ・イタリヤ・ロシヤ・アメリカ合衆國等現代最も有力なる國々が形成せられるに

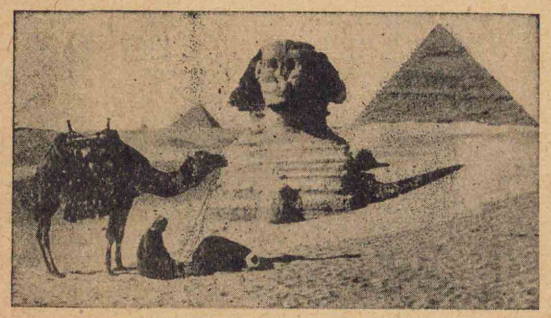
至つたのである。

中世、東洋黄色人種(Yellow Race)の勢力頻りと歐洲を脅かし、就中、ウラル=アルタイ(Ural-Altaics)民族の蒙古族(Mongols)が一路西進、歐洲を席捲し、遂にその一部が南ロシヤに留まつて一箇の王國を建設し、同じ黄色人種のオスマン=トルコ(Osman Turks)が蒙古族の壓迫を避けて小アジヤの地に移り、尋いで東ローマを侵してバルカン半島を攻略し、歐亞に跨る大帝國をうち建てるに至つたが如きは、西洋史上、黄色人種の必ずしも沒交渉に非ざるを示すものであり、換言せば東洋史と西洋史の關係を示すものである。やがて十五世紀の交、インド航路發見せられて歐人東航の氣運を促進し、最初ポルトガル人のみ東洋貿易を獨占したが、十六世紀末より、イギリス・オランダ兩國人東方に來り、爾後インド洋上に、南洋諸島間にまた支那海上に白人種相互の爭を惹起し、同時に西力東漸(ゼン)の勢昂上し、十八・九世紀を通じてイギリス人のインド侵略漸く成り、また十九世紀

に於て支那に於けるイギリスの商權確立も完成するに至つた。その他十七世紀以降特に高潮せるロシヤのシベリヤ侵略、十九世紀に大成されたフランスの安南經略の如き何れも西力東漸の勢を表明する。要するにこれらの點に於て西洋史と東洋史の相關聯するところ深きを明かにすることが出來る。最後に十六世紀の交、歐人始めてわが國に至り、通商・布教を中心に彼我の文化的交渉盛に此に國史と西洋史の相關聯するところを見る。最近世の交通の進歩は世界を擧げて一體とし、日本は東洋文化の中心として西洋諸國と相對するに至つた。世界一體の今日、日本は國民的自覺の上に立つ國際主義の態度を以て、世界文化を指導せねばならぬ。既に吾人は國史の精粹を學び、國民的自覺を得、東洋史を學び、東洋に於ける日本の地位を見た。此に西洋史を學んで、諸邦の興亡變遷の間から人文發展の眞相を究め、世界を動かす日本文化の中樞を造らねばならぬ。

第一編　上代史（紀元前三十世紀頃より紀元五世紀頃に至る）

第一章　上代東方諸國



世界最古の文化河川と文化との關係を考へ見よ

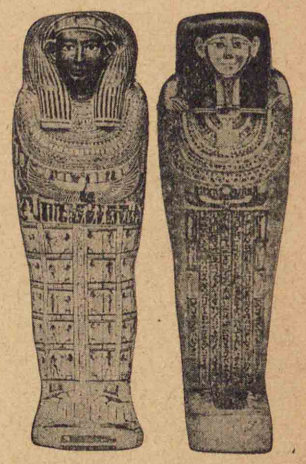
圖解　ナイル河畔のギゼーにあり。圖の正面に見ゆる大ピラミッドはいはゆるクフ王の王陵で、高さ百三十八米（スフィ）、その前なる人面獅身像（シクス）は高さ二十米自然の花崗岩に刻まれてゐる

㈠西洋文化の源流　西洋の文化はナイル河下流に起れるエジプトの文化と、チグリス・エウフラテス兩河の流域に生じたメソポタミヤ（Mesopotamia）の文化にその源を有する。即ちこれらの地方は氣候に惠まれて地味が肥え、その上水運の便が多かつた爲である。やがてこれらの文化が西方に傳つて、後世に於ける西洋文化に發達したのである。

㈡エジプト　エジプトは氣候が熱く、またナイル河の年々氾濫せることにより、農業が早く發達

エジプト王國の建設

今より約五〇〇〇年前（漢族文化の始まらんとする頃）



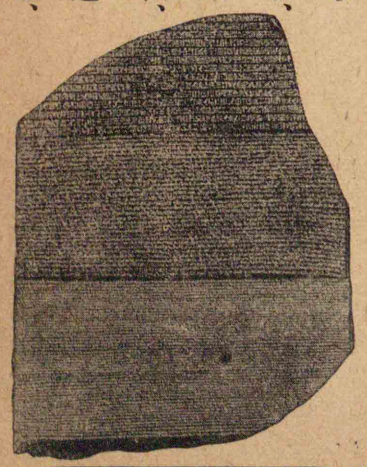
圖解　靈魂の不滅にしてもとの肉體に復歸することを信ずるエジプト人は、屍體保存の方法を考へて、ミイラを製し圖に示さるる如きミイラの容器をも造つた（英國博物館藏）

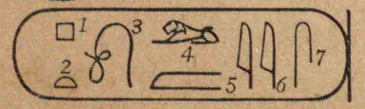
エジプトの文化

圖解　十九世紀にエジプトのロセッタで見出された石がロセッタストーンであり、これによつてエジプトの象形表音文字が讀まれるやうになつた（英國博物館藏）

して紀元前三千年の頃既に統一せる王國をなし、文明も次第に發展し、第十八王朝の頃には國勢大に盛であつた。この國に於て、王は太陽の子として敬はれ、獨裁の力を有し、人民は僧侶・武士・平民の三階級に分れ、その區別甚だ嚴重であつた。この國の宗教は多神教であつて、太陽を最高の神とし、また靈魂の不滅なるを信じて屍體をミイラとし、永く保存するの風があつた。（mummy）

工藝・學術またよく發達し、學術に於ては天文・幾何に長じ、太陽曆及び象形文字の發明があり、工藝に於てはガラス・陶器の製造が盛に、建築・彫刻の術も亦進歩し、





(1)P (2)T (3)O (4)L (5)M (6)A I (7)S

ピラミッド・オベリスク・スフィンクス等壯大なるものを營み、パピルス紙も製せられて、これに象形表音文字を記すことが始つた。

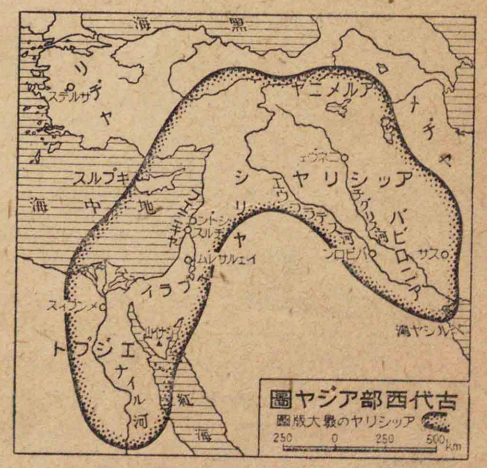
パピルス紙の製出（支那で始めて紙を造つたのは東漢の蔡倫である）

㊂ バビロニヤとアッシリヤ

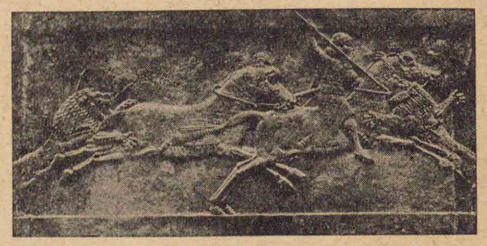
チグリス・エウフラテス兩河の間をメソポタミヤと云ひ、その南方下流の地方は氣候が暖かに、土地がよく肥え、エジプトと同じ頃、バビロニヤ王國がここに起り、バビロンを首府として獨裁の政治を行ひ、農耕の業進み、天文・數學も發達し、楔形文字の發明もまた起つた。

バビロニヤの建國とその文化の特色

圖解ハムラビ法典。バビロニヤ王ハムラビの出した法典を石に刻んで立てたもの、ハムラビ（左）が太陽神（右）より法典を受けるところ（ルーヴル博物館藏）



地であつて、チグリス河の上流地方に起つたが、バビロニヤを滅ぼしてニネヴェに都し、次第に四方を平定して大帝國を造るに至つた。しかし內亂の爲、國力が衰へ、遂に紀元前六〇六年新バビロニヤに滅ぼされた。アッシリヤ人は勇猛にして戰を好んだが、その文化は概ねエジプト及びバビロニヤの模倣に過ぎなかつた。

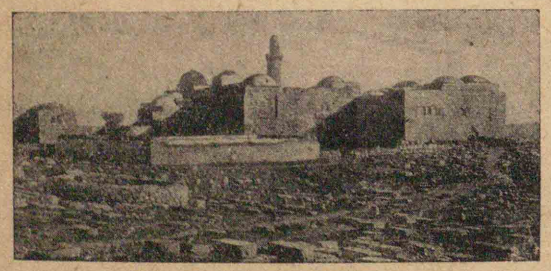


圖解アッシリヤ王アッスルバニパルの王宮に刻まれた彫刻

アッシリヤの國民性とその文化

㊃ ヘブライ

ヘブライ人はもと遊牧の民であつたが、紀元前一三〇〇年頃パレスチナの地に國を建て、多神教徒の間にあつて、ただイヒホヴァ神のみを崇むる一神教を奉じ、自ら神の選民たることを信じてゐた。紀元前十一世紀に至つて王政が起り、ソロモン



圖解ソロモンの父王ダヴィッドはイニルサレムに首府を造つたが該市府の中に聳ゆる丘がチオンであり、この丘上にダヴィッドの墓がある

（ブライ人の信仰エジプト人の信仰と比較せよ）

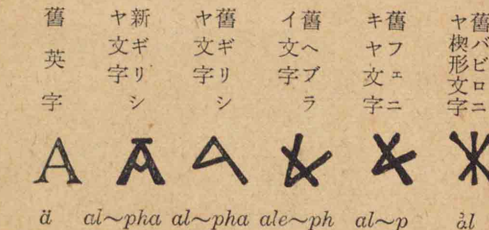
圖解 ヘブライの文化

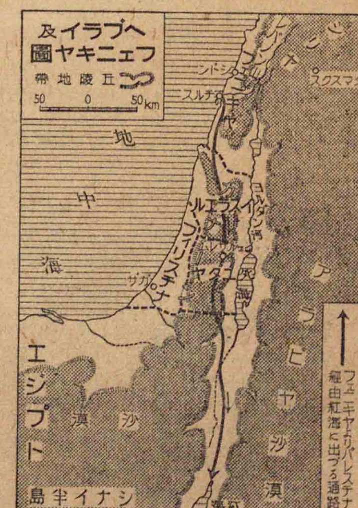
圖解 古代楔形文字の變化

フェニキヤの國民性

圖解 フェニキヤの船舶 船の運轉法に注意せよ

王が出てその國富强を極めたが、彼の死するに及んで內亂が起り、その結果、イスラエル及びユダヤの二王國に分れ、相前後して滅亡するに至つた。 ヘブライの藝術に於ては見るべきもの無かつたが、宗教的文學には出色のものがある。

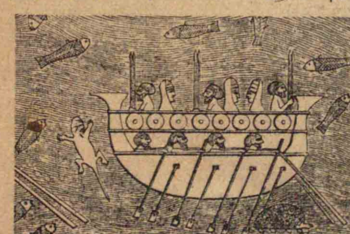




ヘブライ及フェニキヤ圖

五 フェニキヤ

フェニキヤ(Phoenicia)はレバノン(Lebanon)山脈と地中海との間にある細長き國であつて、數多の都市の聯合から成り立ち、その人民は早くより通商・航海に長じ、地中海沿岸及び島々に植民地を開き、その貿易船は東は西アジヤ、西は大西洋岸に達し、紀元前十世紀の頃、國力大

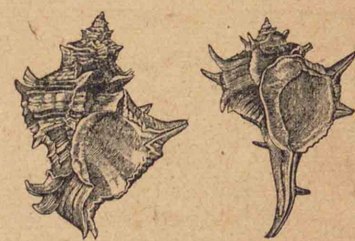


アルファベットの起源

圖解 染料の得られた惡鬼貝

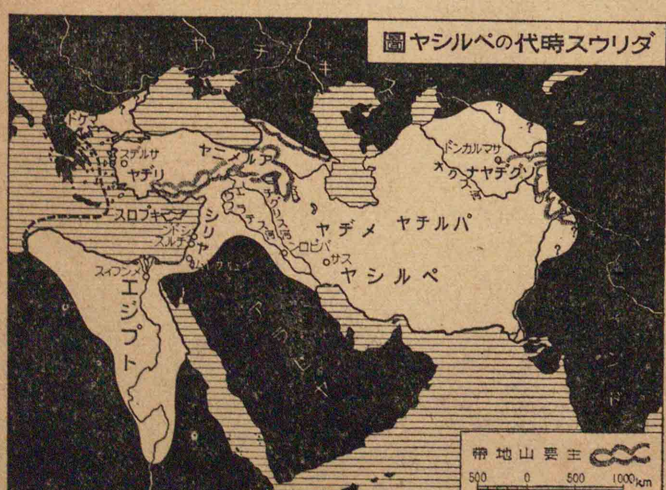
ダリウス王の大業

に振うた。 工業も亦、頗る進歩し、特に染料の製産は有名であり、その用ひた音符文字は今日の西洋文字の基となつた。



六 ペルシヤ

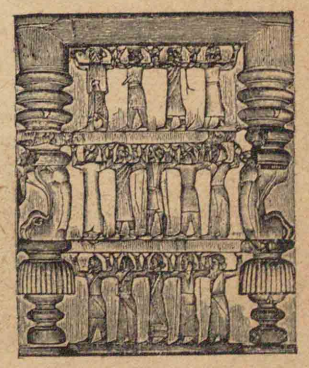
アッシリヤ滅びて後、新バビロニヤ・メヂヤ(Media)・リヂヤ(Lydia)・エジプトの四國が分立したが、紀元前六世紀の中頃、もとメヂヤの屬邦であつたペルシヤ(Persia)が獨立し、次第にこれらの諸國を滅し、紀元前五二一年ダリウス(Darius)王の即位するに及び、國力大に盛になり、アジヤ(Asia)・アフリカ(Africa)・ヨーロッパ(Europe)三大陸に跨る大帝國を建つるに至つた。 ペ



ダリウス時代のペルシヤ圖

ペルシヤの國民性

ルシヤ人は概して武を重んじ、文化の見るべきもの少なかつたが、政令はよく行はれ、交通・通商の如きも大いに發達した。



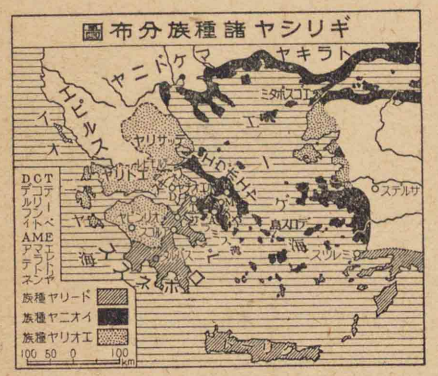
圖解　中央君權に下民の服從せることを象徴化した彫刻

第二章　ギリシヤ

㊀ギリシヤの民族

古代ギリシヤの諸種族

ギリシヤ諸種族分布圖



ギリシヤはヨーロッパで最も早く文明の進んだところである。ギリシヤ人は自ら呼んでヘレネス（Hellenes）と云ひ、更にドーリヤ（Dorians）・イオニヤ（Ionians）・エオリヤ（Aeolians）等の諸部族に分れ、その國土は海岸線の屈曲多く、島々も亦、東方海上に連つて居る爲、早くより地中海の各處に植民地を營み、また東方文明諸國とも往來して、多くその感化を蒙ることとなつた。しかして國内には山脈

統一なかりしこと

ギリシヤとイタリヤの地勢の相違を考へ、その人文に及ぼせる影響を究めよ

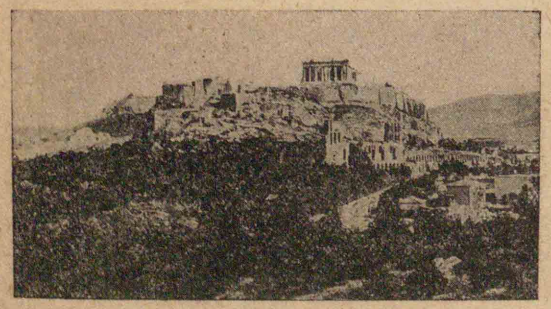
オリンピヤの國民祭典

が互に相交り、住民は各地に獨立の都市國家を營み、割據心に富んで全體の統一がなかつたが、その祖先・言語・宗教等の同一であつたことが、自ら同一民族たる自覺を與へ、その上全體でオリンピヤの國民祭典を行つたことが、益〻この傾向を助長するに至つた。

㊁スパルタとアテネ

スパルタはドーリヤ部族の國でギリシヤの南部ペロポネスス（Peloponnesus）半島にあり、一種の貴族政治を行ひ、自己の勢力を維持せん爲、男子には極端なる尚武的教育を施し、剛健質朴の風を養成し、女子も亦、身體を強くし、德操を磨くやうに仕向けられ、國勢愈〻盛にして、紀元前六世紀頃には半島の大部に勢を振うた。アテネ（Athens）はイオニヤ種族の國で、ギリシヤの中部アッチカ（Attica）半島に起つた。初は王政であつて、後、貴族政治となつたが、

スパルタの教育

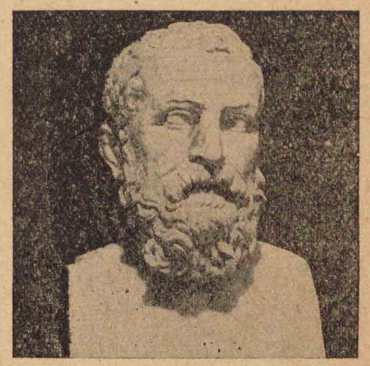


圖解　アテネの中央アクロポリスの丘上にあるパルテノン神殿

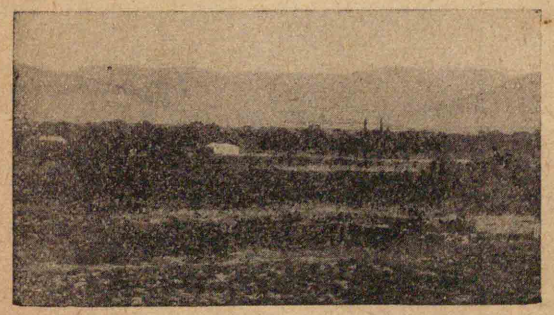
アテネの政治組織

圖解ソロン　前六三八—前五五八、アテネの改革者

紀元前六世紀の頃ソロン及びクリステネス出でて平民にも政權を分ち、民主政治はここに完成するに至つた。



㊂ペルシヤ戰役　小アジヤ沿岸にあるイオニヤ人の植民地がアテネの援を得て、ペルシヤの支配を脫せんと計り、ペルシヤ王ダリウス一世がこの亂を鎭め、更にこれを機として全ギリシヤを併呑せんと企てた。（前四九二年）　しかしこの遠征は失敗に終つたので、ダリウスは更に第二回の遠征軍を起したが、（前四九〇年）アテネ軍の爲にマラトン（Marathon）で敗北した。そこで次の王クセルクセス（Xerxes）は父の志を繼ぎ、自ら海陸軍を率ゐてギリシヤに侵入し、（前四八〇年）スパルタ王レオニダス（Leonidas）の



ペルシヤ戰役の起因

圖解マラトン古戰場　前四九〇年アテネの將ミルチヤデス、ペルシヤ軍をマラトンに破つた

テルモピレーの戰（前五世紀）

圖解スパルタ王レオニダス　前四九一—前四八〇年、スパルタ王であつた

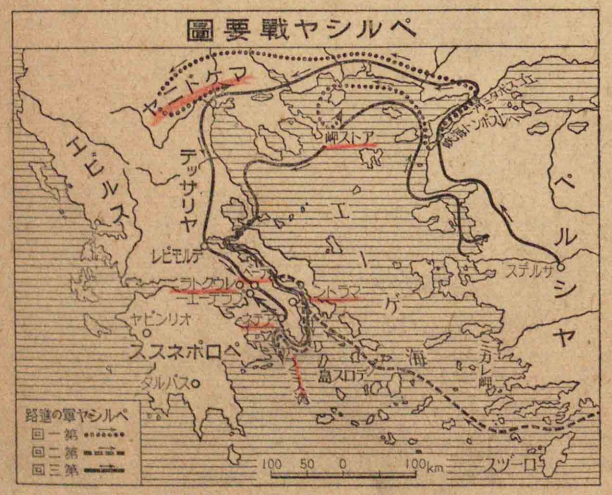
率ゐるギリシヤの海軍は、ペルシヤの艦隊をサラミス（Salamis）灣内に破り、その後、戰はなほ續いたが、ペルシヤは遂に屈して和を講ずるに至つた。（前四四九年）

サラミスの海戰

㊃ペリクレス時代　ペルシヤ戰役の始めに大功を立てたアテネはデロス（Delos）同盟をつくり、その盟主となり大に勢を振つた。時にペリクレス（Pericles）といふ兵がこれをテルモピレー（Thermopylae）の險に邀（ムカ）へ、奮戰して皆斃れ、ペルシヤ軍は進んでアテネを燒き拂つた。されどアテネの勇將テミストクレス（Themistocles）の

デロス同盟

ペルシヤ戰要圖



大政治家が出で民權を重んじ、國威を輝かし、學問・藝術も亦、大に進んだ。これが所謂ペリクレス時代であつて、ギリシヤ文化の全盛時代である。

圖解　ペリクレス　アテネの大政治家。前四九三に生れ前四二九に死す

㊄ペロポネスス戰役とスパルタの全盛　アテネの隆盛なると共にスパルタは大にこれを嫉み、やがて兩國各〻その同盟國を率ゐて戰を開き、交戰すること二十七年、その間アテネに於てはペリクレスが疫病に斃れ、加ふるに內部の黨爭激しく行はれて國力を弱め、アテネは遂に屈して和を請ひ、全くスパルタの覇權に從ふに至つた。

ペロポネスス戰役

㊅テーベの覇業　その後スパルタの勢盛にして、頻りに武力を以てギリシヤの諸市を壓迫したが、中部ギリシヤのテーベ（Thebes）にエパミノンダス（Epaminondas）・ペロピダス（Pelopidas）といふ二名士が出で、スパルタに抗して民主政治を再興し、スパルタ軍とレウクトラ（Leuctra）に戰つて大にこれを破り（前三七一年）一時ギリシヤの覇者となつたが、後、幾もなくして衰ふるに至つた。

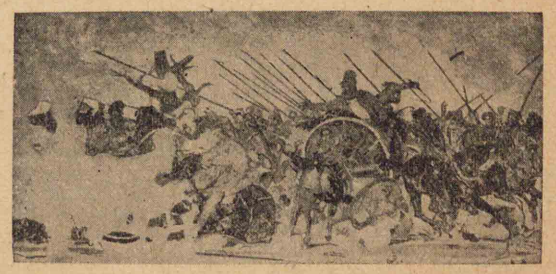
㊆マケドニヤの勃興とアレクサンドル大王　この時ギリシヤの北方マケドニヤ（Macedonia）に英主フィリップ（Philip）王が出で、頻りにギリシヤの文物を入れて國力を充實し、ギリシヤ諸國の內政に干涉した。ここに於てアテネの雄辯家デモステネス（Demosthenes）は、諸國に遊說して對マケドニヤ同盟を造つたが、紀元前三三八年ケーロネヤ（Chaeronea）の戰に敗れ、フィリップをしてギリシヤの覇權を握らしめるに至つた。やがて、フィリップは、更にペルシヤ遠征の軍を出さんと圖つたが果さずして死んだ。

レウクトラの戰

デモステネス、マケドニヤに對抗す

圖解　貨幣に刻まれたアレクサンドル大王肖像（向つて左）裏面（向つて右）のギリシヤ字は「王リシマコス」なる意を示し、同王の鑄たる貨幣なることがわかる（ナポリ博物館藏）

フィリップの子はアレクサンドル（Alexander the Great）大王であり、年僅かに二十歲にして王位に上り、父の志を繼いでペルシヤ征討の軍を起した。彼は紀元前三三四年自ら軍

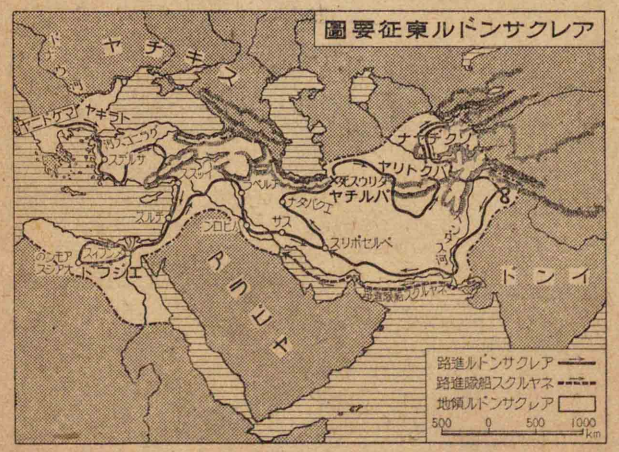


アレクサンドル大王の東征（今より二千二百有餘年前）

圖解　前三三三、大王ペルシヤ軍をイッススに破る、圖はポンペー廢墟で發見されたイッスス戰のモザイク

を率ゐて小アジヤに入り、次いでシリヤ(Syria)を征服し、エジプトを取り、更に東方に路を轉じて、ペルシヤ王ダリウス三世の軍をアルベラ(Arbela)に擊破し、遂にペルシヤを滅ぼしてインドの西北部を侵し、後、バビロンに凱旋してここに都し、これより東西の文化を融合せんと企てたが、未だその完成を見ずして、紀元前三二三年に死んだ。（前三三一年）

㈥ 大帝國の分裂　大王の死後、部下の諸將が相爭ひ、その大帝國は數多の獨立國に分裂したが、中にもマケドニヤ・シリヤ・エジプトの三國が強大であり、共にギリシヤ文化の普及に力を致し、ギリシヤ文明に彩られた東方文化が東に榮え、所謂ヘレニズム(Hellenism)文化を成し、中央アジヤ・インド等東洋にもこの風が行はれた。



ヘレニズムの文化

ギリシヤ文明

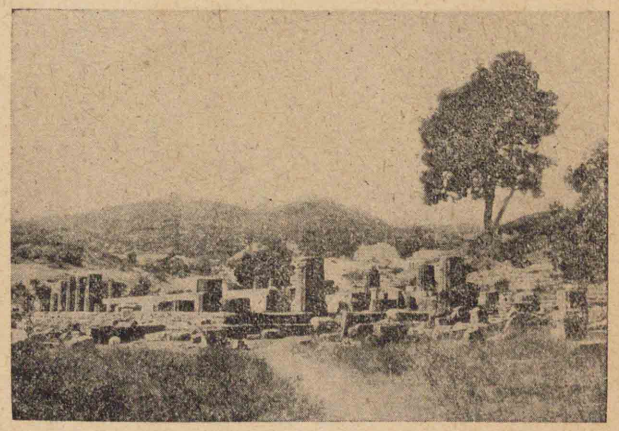
圖解　ゼウス神像　ゼウスは神々及び人類の父と云はれてゐる

ギリシヤの宗教

第三章　ギリシヤの文化

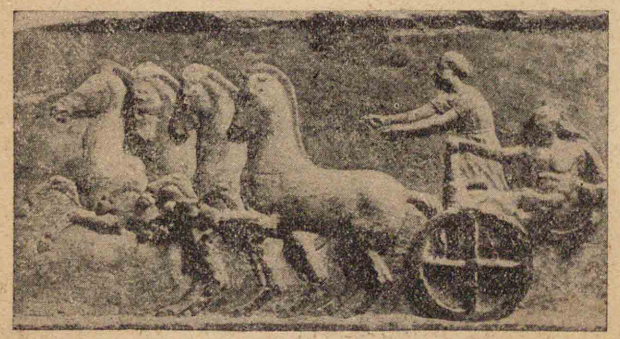
㈠ ギリシヤ文化の發達　ギリシヤ人は高尚優美なる天分を有したのみならず、美はしき自然の影響を受け、早く東方の文明を採り入れ、更に勞働を奴隸に任せて、學藝・政治に力を用ひたところから、その文明は比ひ稀れなる發達を示し、後世西洋文化の基礎をなすに至つた。

㈡ 宗教及び哲學　ギリシヤの宗教は自然力の崇拜に起れる多神教であり、主要なる十二神の中最高の神をゼウス(Zeus)と云ひ、こ



圖解　オリンピヤの遺跡　久しく土中に埋もれてゐたのを近代に至つて發掘した

の神を祀れるオリンピヤ(Olympia)では四年に一回の大祭を行ひ、この時開催される大競技會にはギリシヤ各市より選手を出して各種の技を競はせた。哲學に於ては自然界の説明に始まつて人生問題の解決をめざし、ペリクレス時代にソクラテス(Socrates)が出で、その高弟プラトー(Plato)・アリストトル(Aristotle)と相並んでギリシヤ哲學を大成するに至つた。

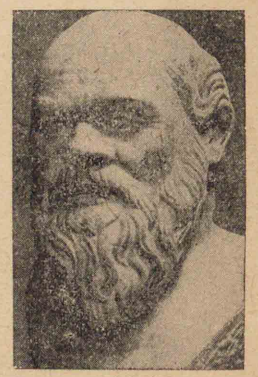


圖解　オリンピヤ競技に於ける駟馬兩輪の競爭車（奉獻額に刻せられたもの。プロピレーン世界史所收）

ギリシヤの哲學

ソクラテス　ソクラテスは「明瞭な智識こそ德行の基なり」と說いた

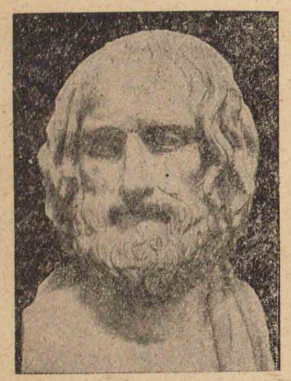
㊂ 史學及び科學　史學にはヘロドツス(Herodotus)が出



圖解　ソクラテス（向つて右）とヘロドツス（左）

圖解　ソフォクレス　前四九五—前四〇六年（下）（ローマ・ラテラン博物館所收）

ギリシヤ文學



圖解　エウリピデス　前四八〇—前四〇六年（上、左端）

でて「歴史の父」(Father of History)と仰がれ、科學では數學のエウクリド(Euclid)・アルキメデス(Archimedes)の如きが特に著はれてゐる。

㊃ 文學及び美術　ギリシヤ人には夙に文學思想が發達し、古くは詩聖ホーマー(Homer)を出し、紀元前六世紀にはピンダルス(Pindar)出でて敍情詩に長じ、ペリクレス時代には悲劇作家のエスキルス(Aeschylus)・ソフォクレス(Sophocles)・エウリピデス(Euripides)、喜劇作家のアリストファネス(Aristophanes)の如き特に有名である。ギリシヤ美術は建築及び彫刻を以て古今に勝れ、莊嚴にして優美なるも

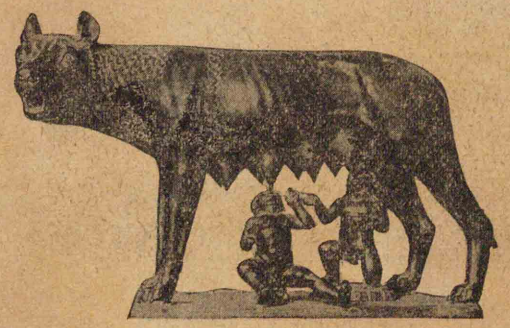
ギリシヤ美術
圖解向つて右よりドーリヤ式の大斗、イオニヤ式の大斗、コリント式の大斗

のを多く今日に止むる。建築ではイクチヌス（パルテノン）、彫刻ではフィヂヤス・プラクシテレス殊に著はれ、有名なるパルテノン神殿はギリシヤ藝術の盛觀を今日に傳へてゐる。

第四章　ローマ

一　ローマの勃興とその政治

ローマはギリシヤの後を承け、イタリヤ半島に起り、最初、主に西方に向つて伸展した。もとローマは半島中部に居住せるイタリヤ民族がチベル河畔に建てた都市國家で、王政に依つて治められたが、紀元前六世紀末に共和政を行ひ、年々二人の統領を選んで政務を統べさせ、元老院をしてこれを支持せしめ



圖解ローマの建設者ロムルス兄弟を育てた狼の銅像（ローマ、カピトリノ博物館藏）

古代ローマの政體

①フヂヤスのアテナ像（ギリシヤ彫刻模作、ローマ時代）
②プラクシテレスのヘルメス像（ギリシヤ彫刻）
③ラオコーン（ギリシヤ彫刻）
④セオーテン（ギリシヤ建築）

①フィヂヤスのアテナ像（アテネ國民考古博物館藏）

フィヂヤス（前四九〇—前四三二頃）は古代ギリシヤに於ける彫刻の名手。その傑作の中特に著はれたのはパルテノン神殿に安じたアテナの神像であるが、惜しいかな後年トルコ人に奪ばはれてコンスタンチノープルに運ばれ、火災の爲に燒け失せた。ここに掲げたのは原作の最も忠實な模作であつて、ローマのハドリヤヌス帝の時に出來たもの、一八八〇年アテネに於て發見された。原作は象牙、寶石、金の三材料から出來てゐたが、この模作は高さ三呎餘の大理石像であつて、頭上に戴く甲の中央にスフィンクスを置き、羽毛飾が後へに垂れ、兩側に有翼の馬を置く、左手を楯に觸れ右手を柱上に置き、掌上にニケ(Nike)の小像を支へてゐる。

②プラクシテレスのヘルメス像（オリンピヤ博物館藏）

プラクシテレス（前四〇〇—前三三〇頃）も古代ギリシヤに於ける彫刻界の巨匠、ここに掲ぐるはその最大傑作といはるるヘルメス(Hermes)の大理石像である。もとオリンピヤのヘラ(Hera)の神殿に飾られたものである。脚部と右手は缺損すれども、左手に幼兒としてのヂオニソス(Dionysos)の神を抱いてゐる。流石に典麗にして莊嚴の趣を備へてゐる。

③ラオコーン（ヴァチカン博物館藏）

前五〇年頃ロードス(Rhodes)派の巨匠ポリドロス(Polydros)等三人の作と傳ふる。ギリシヤ軍がアテナの神に捧げた木馬に對し、トロイの祭司ラオコーン(Laocoon)が槍を抛つたので、二疋の大蛇が現はれてラオコーンとその二子を卷き殺したといふ傳說を現はしたのであるが、刹那の苦痛や恐怖の情をいと雄辯に物語つてゐる。

④テセーオン(Theseion)（ギリシヤ建築、アテネ在）

前四二一年頃、勇者テセウス(Theseus)に捧げられた神殿と言はれてゐる。平面設計は長方形であつて、二層の石壇上に立てられてある。豪壯なるドリック式の大理石柱、典雅なる軒下の彫刻、觀る人をして雄渾壯大の感を懷かする。

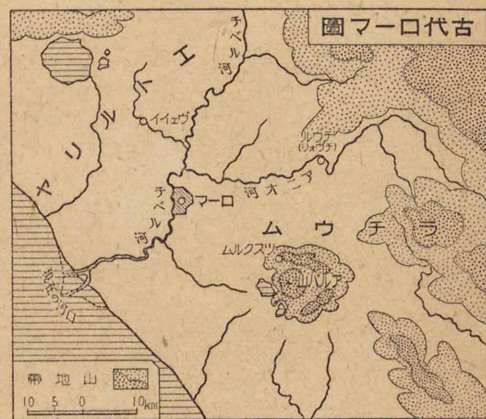
貴族と平民

ギリシヤ人とローマ人の性格を比較せよ

ローマ人の奉公心

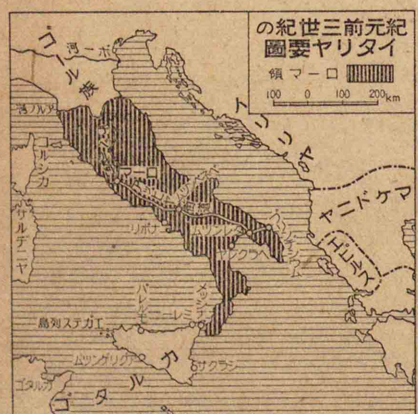
因に云ふ始めピルス王のローマ軍に勝つや、使

た。然るに社會上、人民は貴族・平民の兩階級に分れ、貴族は常に權力をたのんで平民を壓迫し、平民はまた協力してこれに反抗し、爭久しく絶ゆること無かつたが、貴族は次第に讓歩し、紀元前四世紀の中頃リキニウス(Licinius)法の公布せらるるに至つて、兩階級の差別は殆ど廢せられた。



(二)ローマの擴張

ローマ人は國家社會に對する協同一致の觀念強く、奉公犧牲の精神もまた厚かつた爲、よく外敵を退け、中部イタリヤを併有し、更に紀元前三世紀の前半、イタリヤを侵せるギリシヤのエピル(Epirus)



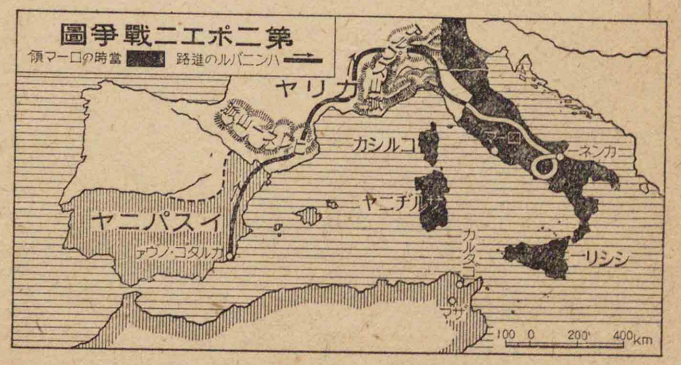
ス王ピルスを撃退し、同世紀の中頃には殆どイタリヤ(Pyrrhus)の大部を支配することが出來た。

この頃アフリカ北岸に勢を有せる、フェニキヤ植民地のカルタゴ(Carthage)は大なる富と強力な海軍を以てローマに對抗し兩國共にシシリー島(Sicily)に勢を伸さうとして相衝突し、ここに有名なるポエニ戰役(Punic War)が始まつた。(前二六四年)この戰にローマは堅忍よく戰ひ、遂にカルタゴをしてシシリー島を割き償金を支拂ひて和を講ぜしめた。(前二四一年)やがてカルタゴには英傑ハンニバル(Hannibal)が出でて報復を企て、紀元前二一八年イスパニヤ(Spain)から軍を出し、アルプス(Alps)の險を超えて

をローマに送つて和を議せしむ。ローマ元老院決せず。時に盲議員アピウス・クラウヂウス(Appius Claudius)叫んで曰ふ。「ローマは決して勝利の敵と和せず。」と。遂に戰つてピルス王の軍を斥く

第一回ポエニ戰役

圖解　ハンニバル　前二四七—前一八三年頃。ハンニバルのアルプス越に向つた時は五萬以上の軍を率ゐてゐたのが、イタリヤに着いた時は二萬足らずに減つてゐた



イタリヤに入り、連りにローマ軍を破つて南進し、カンネー(Cannae)に戰つて大勝を得た。(前二一六年)然るにローマは不屈不撓よく國難に當り、將スキピオ(Scipio)をして兵を率ゐカルタゴの本國を衝かしめ、ハンニバル還つてこれとザマ(Zama)に戰ひ大敗を招き、カルタゴ爲に屈してイスパニヤをローマに割き、多額の償金を出して和を講じた。(前二〇二年)その後ローマはカルタゴの國力の回復せんとするを嫉み、紀元前一四九年強ひて戰を開き攻め圍むこと三年、遂に全くこれを滅ぼした。(前一四六年)次いでシリヤ・マケドニヤをも併せ、ローマの領土は西、イスパニヤより東、小アジヤに伸び、地中海を中に三大陸に跨る強大なる國家となつた。

第二回ポエニ戰役とハンニバルの活躍

圖解　スキピオ　前二三四—前一八三年。ザマの戰でスキピオの軍は全勝を得、ハンニバル麾下の老練な兵は皆戰死したスキピオの雄圖

第三回ポエニ戰役

カルタゴの滅亡

㊂ 共和政の末路と武人の專制

ローマの領土の擴がると共に限りなき富は國都に流入し、奢侈遊惰の風は漸く盛となり、質實剛健の

ローマ人の奢侈

美風は次第に失はれ、のみならず屬州より輸入せられる廉價の穀物と、奴隷使用の流行とに依つて農民の生計が奪はれ、土地は富豪の兼併するところとなり、貧富兩階級の對立は日增しに甚しくなつた。

そこで紀元前二世紀の後半、グラックス兄弟(Gracchus)が出で、社會制度を革めこの弊害を救はうとしたが、富豪のために妨げられて成らず、相次いで死するに至つた。かくて貧富兩階級の爭は益〻激しく、共和政治の本質は漸く失はれるやうになつた。

共和政治が衰へて、かかる内紛をひき起し加ふるに外患も段々迫つて來たので、ここに有力なる武人の政治を獨裁する風が起つた。

貧富兩黨のそれぞれを率ゐるマリウス(Marius)・スルラ(Sulla)兩人は共に武功を

圖解　ローマの貴族夫妻　ローマで富豪の多くは貴族出であつた。彼等は元老院などの要職につき、多くの土地を各地に有し、且つ多數の奴隷を所有してゐた

グラックス兄弟の社會政策

貧富兩黨の爭

圖解　スルラ　スルラ、マリウス黨の殆ど大部を殺したが、或る人の請によつて當時十八歳の青年ケーザルを許した。計らずもこのケーザルがマリウスの志をつぎ勢力を得たのである

第一回三頭政治

ケーザルの機敏

立てて勢力があり、政治上烈しき爭をひき起すに至つたが、スルラ遂に勝つてローマの政權を專らにするに至つた。

四　第一回三頭政治とケーザル　武將にしてスルラの政見を繼げる者はポンペイウス(Pompeius)であり、マリウスの意見を承けた者はケーザルであつたが、西紀前六〇年兩雄相和し、これに富豪クラッスス(Crassus)を加へ三人協力して天下の政をなさんことを約し、ここに所謂第一回三頭政治が起つた。やがてポンペイウスは獨りローマに留まり、クラッススは東方パルチヤ(Parthia)を征し、ケーザルはガリヤ(Gallia)卽ち今日のフランス(France)地方を攻むるに至つた。

ケーザル、ガリヤにあること前後八年、武を輝かし、文明を布き、その名大に揚つたが、クラッススの戰死せる後、ポンペイウスはケーザルの功を嫉んで密にこれを除かうと計つた。ケーザル早くもこれを知り、

ケーザルの政治
ユリウス暦とグレゴリー暦の比較は如何

圖解 ケーザル
ここに掲げたケーザルの石像はローマ、カピトリノ博物館所藏である

第二回三頭政治

自ら兵を率ゐてローマに入り、ポンペイウスを追ひ、遂にこれを滅ぼしてローマの全權を掌握するに至つた。ケーザルは智勇兼ね備へた英雄であつて、種々政治の改革を行ひ、民權の擴張商工業の保護、暦法の改定植民の奬勵等その功數ふるに遑なき有様であつたが、紀元前四四年反對黨のために殺されて、その大なる計畫も遂に完成するに至らずして止んだ。

㊄第二回三頭政治　ケーザルの死後、その養子オクタヴィヤヌス(Octavianus)はケーザルの部下アントニウス(Antonius)及びレピヅス(Lepidus)と共に第二回三頭政治を行ひ、天下の權を三分して各その一を保つこととなつたが、レピヅス先づ斥けられ、次いでアントニウス及びオクタヴィヤヌスの爭となり、アントニウスはエジプトの女王クレオパトラ(Cleopatra)の爲に國家の大事

アクチウムの海戰

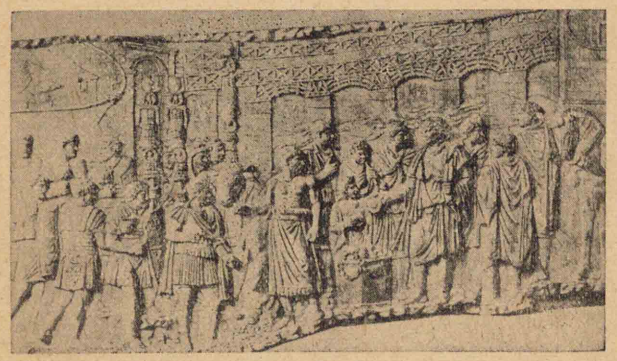
圖解 アウグスツス
アウグスツスの統治は前二七年に始まつて紀元一四年に終つた。その間國境方面に若干の騒擾はあつたが、概して平和が打つづいた。彼の戰時に開かれ平和の時閉されるといふヤヌス(Janus)の宮の扉が帝の時まで僅に二回閉ぢられたが、帝一代で三回も閉されたと言はれてゐる

を忘れ、オクタヴィヤヌスに攻められてアクチウム(Actium)に大敗し(紀元前三一年)、オクタヴィヤヌス遂にローマを統一するに至つた。

㊅アウグスツス帝の大業　オクタヴィヤヌスは、ローマを統一してアウグスツス(Augustus)(威嚴の高大なる義)の尊號を受け、次第に須要の諸官職を一身に集め、獨裁の政治を行つたので、外觀は共和政であつても、實は君主專制に外ならず、史家これより後を稱してローマ帝政の時代と呼んでゐる。當時ローマの領土は、東エウフラテス河から西は大西洋に達し、北はドナウ(Danube)・ライン(Rhine)兩河から、南は

ローマ帝政時代（アウグスツス時代は今より千九百六十餘年前）

アフリカの沙漠地方にまで擴がつた。アウグスツス時代は兵備も充實し、文學・美術も起り、交通も完備し、後世この時代をアウグスツス（Africa）の治世と云ひ、ローマ帝國の黃金時代と稱してゐる。（前二七年―紀元一四年）



トラヤヌス帝のダキヤ征伐

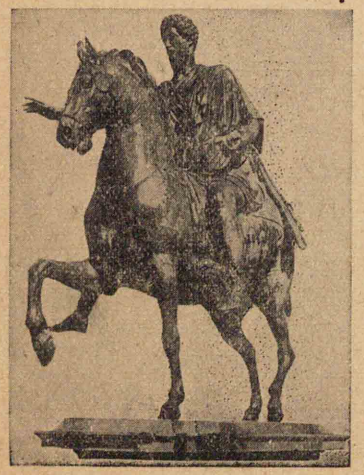
圖解　ローマ、トラヤヌス記念柱に刻したダキヤ征伐の光景

ドナウ河、橋頭堡前のトラヤヌス帝と臣下

國民の自覺進む

圖解　アウレリウス帝（ローマ・カピトリノ丘、在）東漢の桓帝の時、アウレリウス帝の使が支那に來た

七　帝國の盛衰　アウグスツスの死後、約百七十餘年間は帝國の基も固まり、領土も增し、文化も盛大であり、殊にトラヤヌス帝（Trajan（二世紀頃））の時代にドナウ河を渡つてダキヤ（Dacia）（今日のルーマニヤ方面（Roumania））を平定し、アウレリウス帝（Aurelius）時代、學問・通商進み、國民の自覺も盛であつた。其後帝國の國運次第に傾き、外、蠻人の侵入があり、內、軍隊



國民の自覺衰ふ

ゲルマニヤ人ローマの軍隊に入る

圖解　コンスタンチヌス帝の肖像ある貨幣（向つて左（表）帝の肖像）

コンスタンチヌス帝の政治

ローマ東西に分る

の跋扈が甚しく、恣に皇帝を廢立し、人民重稅に苦みて元氣衰へ、自覺心止み、ローマの國是たる兵農一致の風は次第に崩れてゲルマニヤ人（Germans）を迎へて軍隊に入れるに至つた。その後コンスタンチヌス大帝（Constantinus）が出でて再び帝國を統一し、都を東方の要地たるコンスタンチノープル（Constantinople）に移し、政治を改め、キリスト教を公許し、勢大に振うた。しかし帝の死後、內外の憂患交〻起つて國力また衰退し、三九五年テオドシウス（Theodosius）帝の帝國を二分して東西に分つに及び、世界統一のローマの理想は永遠に失はれるに至つた。」

第五章　ローマの文化とキリスト教

㊀ローマ文化の特色

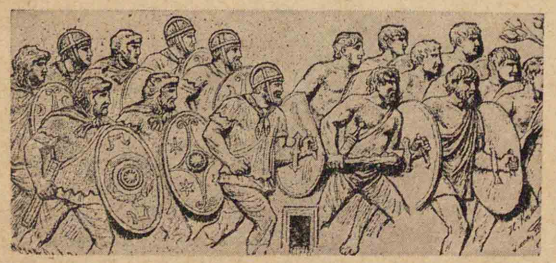
元來ローマ人はギリシヤ人と異なり、實用

ローマ文化の特色

を重んじ、理想を遠ざけた人民であつて、學問・藝術よりも政治・軍事・法律・土木等の實際方面に、その勝れたる天分を充分に發揮した。しかもその領土廣大にして世界的性質を帶びてゐたため、普ねく諸國の文明を吸收して消化し、更にこれを大帝國内に普及して、將來に於けるヨーロッパ文明の基礎を造るに至つた。

ローマの法律

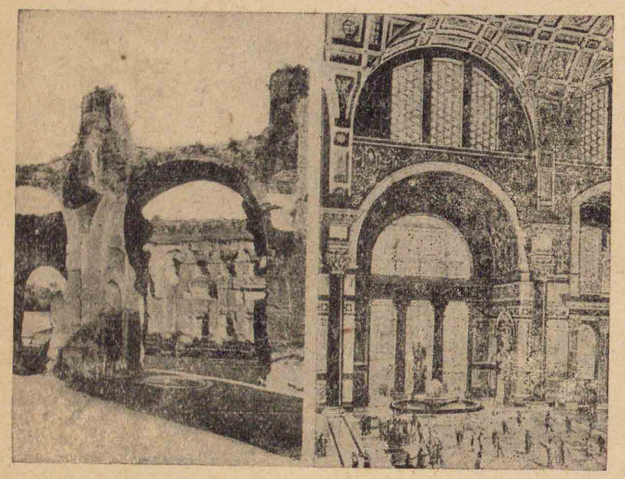
㈡ 政治・法律　ローマの平民は參政權を得ようとして貴族と相爭うた結果、實際的の必要から法律の進歩が殊に著しく、共和時代に十二銅表の成文律が出來、帝政時代に至つてはその發達いよいよ盛に、後に所謂ローマ法の集成を見、世界に於ける法典の模範となつたのである。



ローマの武器

㈢ 軍制　ローマは陸軍の編成に歩兵を以て主要なるものとし、騎兵を以てこれを助け、弓・槍・投石機を以て敵を困しめ、更に城攻めに諸種の進んだ武器を用ひて勝利を博するを常とした。

ラテン文學



圖解　カラカラ帝の營んだ壯大なる浴場の古今の比較　向つて右、復舊　向つて左、現狀

㈣ 文學　ローマの文學は美術と同じく、最初概ねギリシヤの模倣に過ぎなかつたがアウグスツス帝の時代には所謂ラテン文學が發展し、ヴァルギリウス(Vergilius)・ホラチウス(Horatius)等の有名な詩人を出した。しかし、ローマ文學の全體を通じてはギリシヤに及ばざること、尚ほ甚だ遠きものがあつた。

㈤ 土木建築　ローマ人は實際的方面の長所を有してゐた爲め、土木・建築に於て堅牢宏大なものを營み、特に帝政時代に於てはこれらに依つて皇帝の尊嚴を

圖解　競技場に於ける闘奴（グラヂヤトール）の眞劍試合（君府博物館藏モザイク）

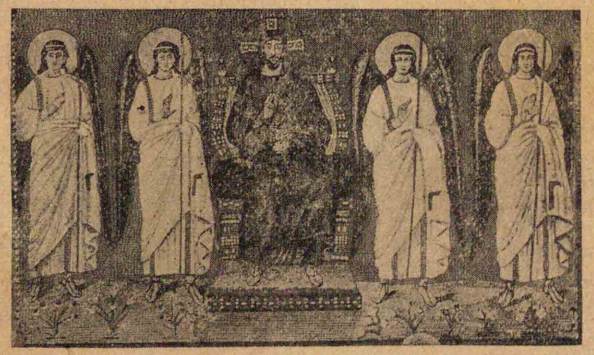
ローマの土木

現はさんと努めた。宮殿・神殿・凱旋門・城門・競技場・浴場さては道路・水道等に於て後人を驚かすに足るものが少なくない。建築に於てエトルリヤ式の「アーチ」とギリシヤ式の柱を用ひたのはローマ建築の特色と云はれる。

Etruria

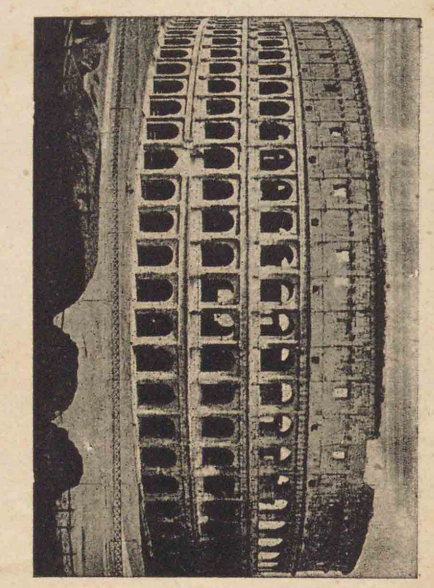
㊅ キリスト教の發達

ローマは初めギリシヤと同じく多神教を信じ、後、皇帝をも神として祀つた。なほアウグスツス皇帝の治世、紀元前四年、ユダヤにイエス=キリスト Jesus Christ が生れ、自ら神の子なる救世主と稱し、ユダヤ教に基きて一神教を說き、人類は皆兄弟にして相愛すべきものた

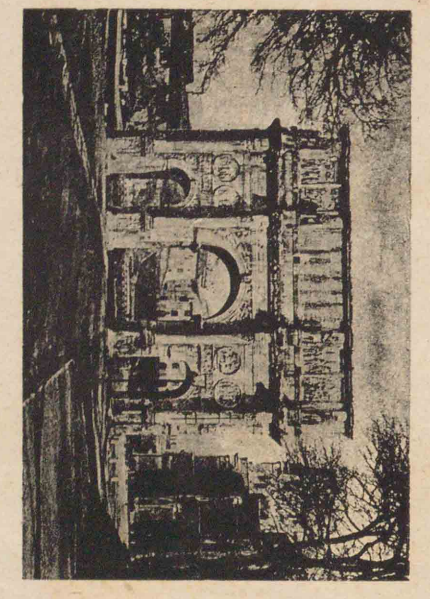


圖解　モザイクで現はされたイエス=キリスト。ラヴェンナ聖アポリナレ寺藏

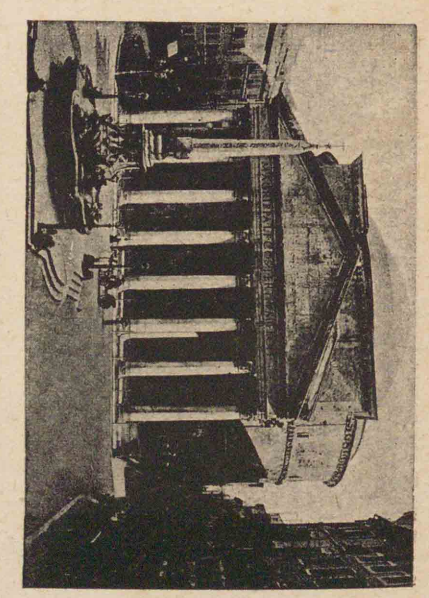
キリスト教の特色



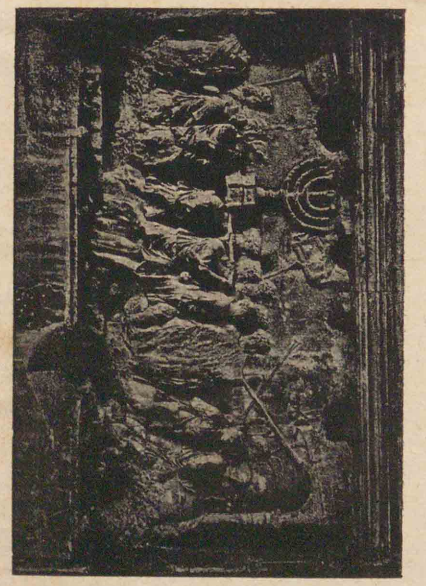
㊇ ローマのコロッセオ



㊃ ローマのスタンチン凱旋門



① ローマのベスパシアヌス



② チツス凱旋門内壁

ローマの建築

ローマ人は政治的、實際的方面に長ぜる國民なるが故に、建築の如き堅牢を旨とするは無論、同時に雄大莊嚴の觀を以て帝王權の强大を表示し、四海統御の一方便たらしめてゐる。試みにローマ市に殘る若干の遺蹟に就いて考ふるに、①パンテオン Pantheon はアウグスツス帝の創建にしてハドリヤヌス帝の改築にかゝり、圓形アーチの天井とギリシヤ式大斗を有する圓柱から成り莊大の趣に富み、②チツス凱旋門 Titus は紀元七十年チツスのユダヤ討滅を記念すべく造られたもの、内壁に刻せる彫刻は凱旋兵士の行軍を以てし、中にも、エホバの殿堂に供へた金製七枝の燭臺を奪ひてローマに歸還せんとするところは、帝國の勢威赫赫たる狀態を現じてゐる。③圓形競技場 Colosseum はヴェスパシヤヌス帝 Vespasian の設計に基づき紀元八十年チツス帝の完成せるもの、楕圓形四層無蓋の大建築にして、高さ五十米突、長徑百八十五米突、下三層は圓形アーチの廣窓とギリシヤ式大斗の半圓柱を以て裝飾し、その座席は觀衆五萬を入るるに足り、壯大無比、帝政時代の盛觀を偲ばする。④コンスタンチン凱旋門はコンスタンチン帝の戰勝後、元老院並に國民より戰勝記念として奉獻せるもの、圓形アーチによる三箇の通用門、彫刻の莊麗も帝權の絶大を思はする。

同	宣帝	一世紀	六〇	第一三頭政治成る	鄭吉西域都護となる
同	同		五八	ケーザル、ガリヤを征す(—五一)	翌年新羅建國す
同	元帝		四四	ケーザル殺さる	
同	同		四三	第二三頭政治成る	
同	成帝		三一	アクチウムの戰	
垂仁	成帝		二七	ローマ帝政となる	二年前、任那始めて我が國に入貢す
同	哀帝		四	イエス=キリスト生る	垂仁天皇朝天日槍歸化す
同	後漢光武帝	一世紀	西暦三二	イエス=キリスト磔殺さる	一年前、伊勢内宮を興さる
同	明帝		六四	ネロ帝キリスト教徒を虐殺す	三年後、佛教始めて支那に傳はる
景	章帝		七九	ヴェスヴィウス山噴火	
成	桓帝	二世紀	一六六	ローマ帝アウレリウス=アントニヌス漢と通ず	黨人を禁錮す
應	神武晉帝	三世紀	二八四	ヂオクレチヤヌス帝卽位(—三〇五)	翌年王仁來朝す
仁	東晉明帝		三二三	コンスタンチヌス帝ローマ帝國を統一す	一年前仁德天皇始めて宮室を營まる
德	成帝	四世紀	三三〇	コンスタンチノープル遷都	
同	孝武帝		三七五	ゲルマニヤ諸民族の大遷徙始まる	八年後、淝水の戰
同	同		三九五	ローマ帝國東西に分る	四年後、法顯渡天す

大事年表一、上代史

日本	支那	世紀	西紀	西洋	東洋（日本及びその他）
神代	黄帝時代	前廿一世紀及びそのもの以前	前三〇〇〇頃	エジプトの建國、古王國起る	漢族、黄河流域に建國（約五千年前）
同	顓頊、帝嚳ノ代		二七〇〇頃	エジプト王クフの治世、ピラミッドを造る	
同	夏ノ代		二二五〇頃	バビロニヤ王ハムラビ出づ	
同	同		二一〇〇頃	エジプト中王國起る	これより百餘年前帝舜即位
同	同	前十一世紀及びそのもの以前	一六〇〇頃	新王國起る	これより百餘年前、夏起る
同	同		一五五〇頃	ヘブライ人エジプトに移住す	
同	殷時代		一三〇〇頃	ヘブライ人エジプトより脱出す	
同	同		一一〇〇	チル市フェニキヤ諸市聯合の牛耳を執る	
同	同		一〇一五	ヘブライ王ソロモン即位す	
同	同		九五三	ヘブライの分裂	
同	同	前八世紀及びそのもの以前	八五〇頃	カルタゴの建國	
同	周成王		七七六	第一オリムピヤの競技行はる	
同	同		七五三	ローマの建國	
同	幽王		七二二	アッシリヤ、イスラエルを併す	
神武定王	同		五九四	ソロンの立法	四年前、楚の莊王霸業をなす
安寧景王	同	前六世紀	五二一	ペルシヤ王ダリウス即位	
懿德敬王	同		五〇九	ローマ共和政となる	孔子魯の大司寇となる
同	同		四九二	第一ペルシヤ戰役	
同	同	前五世紀	四九〇	第二ペルシヤ戰役、マラトンの戰	翌年孔子春秋を作る
同	同		四八〇	第三ペルシヤ戰役、テルモピレーの戰、サラミスの海戰	
同	同		四七七	デロス同盟の成立	
昭貞定王	同		四四四	ペリクレス時代始まる（—四二九）	
同	考王		四三一	ペロポネソス戰役起る（—四〇四）	
孝安烈王			三七一	レウクトラの戰	

同	幽王	紀前…	七二二	アッシリヤ、イスラエルを併す	
神武	定王	前六世紀	五九四	ソロンの立法	四年前、楚の莊王覇業をなす
安寧	景王		五二一	ペルシャ王ダリウス即位	
懿德	敬王		五〇九	ローマ共和政となる	孔子魯の大司寇となる
同	同	前五世紀	四九二	第一ペルシャ戰役	
同	同		四九〇	第二ペルシャ戰役、マラトンの戰	
同	同		四八〇	第三ペルシャ戰役、テルモピレーの戰、サラミスの海戰	翌年孔子春秋を作る
同	同		四七七	デロス同盟の成立	
孝昭	貞定王		四四四	ペリクレス時代始まる(—四二九)	
同	考王		四三一	ペロポネソス戰役起る(—四〇四)	
孝安	烈王	前四世紀	三七一	レウクトラの戰	
同	顯王		三六七	リキニウス法案通過	翌年商鞅秦に仕ふ
同	同		三五九	マケドニヤ王フィリップ二世即位(—三三六)	秦の商鞅法令の改革を行ふ
同	同		三三八	ケーロネヤの戰	
同	同		三三六	ペルシャ王ダリウス三世(—三三〇)即位。マケドニヤ王アレクサンドル大王即位(—三二三)	
同	同		三三四	アレクサンドル大王ペルシャ遠征の途に上る、グラニコス河畔の戰	
同	同		三三三	イッススの戰	合從策成り蘇秦六國の相となる
同	同		三三一	アルベラ(ガウガメラ)の大戰、ペルシャの滅亡	
同	同		三二三	アレクサンドル大王歿す	二年前、秦始めて王と稱す
同	赧王		三〇一	イプソスの戰	十年前、張儀六國連衡策を成す
孝靈	同	前三世紀	二八〇	エピルス王ピルス伊太利を侵す(—二七五)	
同	同		二七五	ベネヴェントの戰	
同	同		二七二	ローマ、イタリヤ半島を統一す	
同	同		二六四	第一ポエニ戰役起る(—二四一)	秦の白起韓の九城を拔く
同	秦始皇		二一八	第二ポエニ戰役起る(—二〇一)	張良始皇を狙撃す
同	同		二一六	カンネーの戰	
孝元	漢高祖		二〇二	ザマの大戰	垓下の戰。漢の高祖帝位に登る
開化	景帝	前二世紀	一四九	第三ポエニ戰役起る(—一四六)	五年前、吳楚七國の亂
同	同		一四六	カルタゴ滅亡。ローマ、マケドニヤ、ギリシャを併す	
同	武帝		一三三	チベリウス=グラックス護民官となる	
同	同		一二一	カイウス、グラックス護民官となる	一年前、張騫西域に使す
崇神	同	前一世紀	九〇	イタリヤ州の人民ローマに叛く(—八八)	一年前、垂仁天皇神器を笠縫邑に遷さる。後二年、四道將軍の派遣。輪臺の詔
同	昭帝		八二	スルラの獨裁政治(—七九)	翌年蘇武匈奴より歸る
同	宣帝		六〇	第一三頭政治成る	鄭吉西域都護となる
同	同		五八	ケーザル、ガリヤを征す(—五一)	翌年新羅建國す
同	元帝		四四	ケーザル殺さる	
同	同		四三	第二三頭政治成る	
同	成帝		三一	アクチウムの戰	二年前、任那始めて我が國に入貢す
垂仁	成帝		二七	ローマ帝政となる	垂仁天皇朝天日槍歸化す
同	哀帝		四	イエス=キリスト生る	一年前、伊勢內宮を興さる
同	後漢光武帝	一世紀	西暦三二	イエス=キリスト磔殺さる	
同	明帝		六四	ネロ帝キリスト教徒を虐殺す	三年後、佛教始めて支那に傳はる
景行	章帝		七九	ヴェスヴィウス山噴火	
成務	桓帝	二世紀	一六六	ローマ帝アウレリウス=アントニヌス漢と通ず	黨人を禁錮す
應神	晉武帝	三世紀	二八四	ヂオクレチヤヌス帝即位(—三〇五)	翌年王仁來朝す
仁德	東晉明帝	四世紀	三一三	コンスタンチヌス帝ローマ帝國を統一す	一年前仁德天皇始めて宮室を營まる
同	成帝		三三〇	コンスタンチノープル遷都	
同	孝武帝		三七五	ゲルマニヤ諸民族の大遷徙始まる	八年後、淝水の戰
同	同		三九五	ローマ帝國東西に分る	四年後、法顯渡天す

圖解　ネロ帝の貨幣表(向つて左)にはネロの肖像を表はし周圍に「ネロ＝ケーザル＝アウグスツス＝インペラトル云々」と記してゐる

キリスト教の公認

ることを敎へ、ここに所謂キリスト敎が起つた。イエスはユダヤ人に憎まれ、ローマの官吏のため、十字架上に殺されたが、その弟子が熱心に傳道に努め、遂にローマに傳はつた。しかしローマの諸帝特にネロ帝の如きは、それが帝國の國體に合せざるの故を以て甚しき迫害を加へた。しかもコンスタンチヌス帝に至りキリスト敎を公認し、テオドシウス帝に至つてはその國敎たるを許し、同敎はここに始めて帝國の統一的信仰となり政治上社會上大なる影響を及ぼすこととなつた。

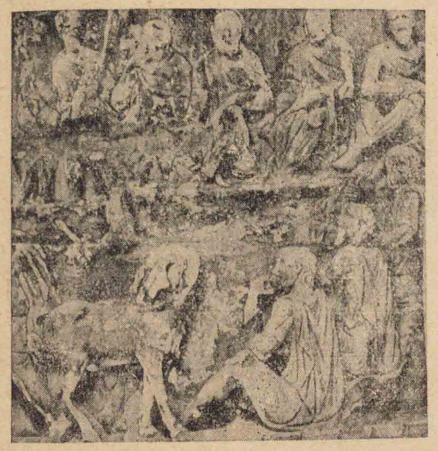
第二編　中世史（五世紀頃より十五世紀頃に至る）

第一章　ゲルマニヤ民族の大移動とその建國

一　ゲルマニヤ民族の移動

ゲルマニヤ人の特質

もとゲルマニヤ民族はローマ帝國の北方に居住し、その性質が勇猛で、戰を好んだが、農・牧・狩獵を業とし、屢ローマの邊境を騷がし、時にはその傭兵として用ひられることもあつた。



圖版　ローマ、マーカス＝アウレリウス記念柱に現はれたゲルマニヤ部族會議

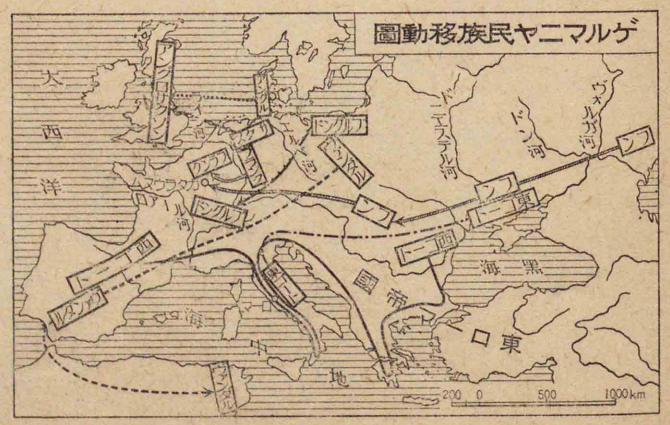
民族移動

さて紀元四世紀の後半、ヴォルガ河流域にゐたフン族（アジヤ民族）Huns が西方に動いて、ゲルマニヤ民族に屬する東ゴート族 Ostrogoths を從へ、西ゴート族 Visigoths を追ひ、西ゴート族は三七五年ドナウ河を渉つてローマ帝國領内に移住

民族大移動の混亂

した。これが卽ちゲルマニヤ人大移動の始めである。

やがて西ゴートは西に進んでイタリヤを侵し、爲に西ローマ帝はガリヤの兵を撤してローマを守らせたが、ゲルマニヤ民族内のフランク族 Franks は虛に乘じてガリヤの北部を侵し、ブルグンド族 Burgunds またライン Rhein 上流に進み、ヴァンダル族 Vandals は遠くイスパニヤの地に侵入した。この時イタリヤで奪掠を縱（ホシイマヽ）に



して西ゴートは更にイスパニヤを侵してヴァンダル族を逐ひ、これをしてアフリカに渡り、カルタゴの故地にヴァンダル王國を建設せしめるに至つた。北ドイツなるゲルマニヤ民族のアングル・サクス Angles Saxons 兩族は、ブリタニヤ島 Britannia

アッチラの西進

カタラウヌム戰の史的意義を考へよ

西ローマの滅亡（四七六年）

東ゴート王テオドリックの政治

に移つて、後代のイギリスの基を開いた。

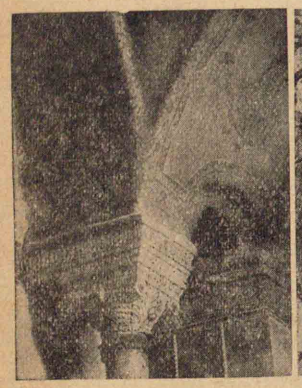
次いでフン族の王アッチラ（Attila）は中部ヨーロッパを蹂躙して、ガリヤを侵し、方に全ヨーロッパを切り從へん勢を示したが、帝國及びゲルマニヤ諸族聯合軍のためカタラウヌム（Catalaunum）に敗れ（四五一年）、その後間も無くアッチラが死んで、その領土は空しく瓦解するに至つた。

(二)西ローマの滅亡　帝國兩分後の西ローマは外人侵入の爲め國力が大に衰へ、四七六年ゲルマニヤ族の傭兵長オドアケル（Odoacer）は皇帝を廢して、イタリヤ王と稱せられ、西ローマ帝國は遂に滅亡した。オドアケル失脚後、東ゴート王、テオドリックがイタリヤを支配したが、帝國時代の盛運をとり還すことは出來なかつた。

圖解　テオドリック王　オーストリヤ、インスブルックなるマクシミリヤン帝の墳墓の側にある銅像

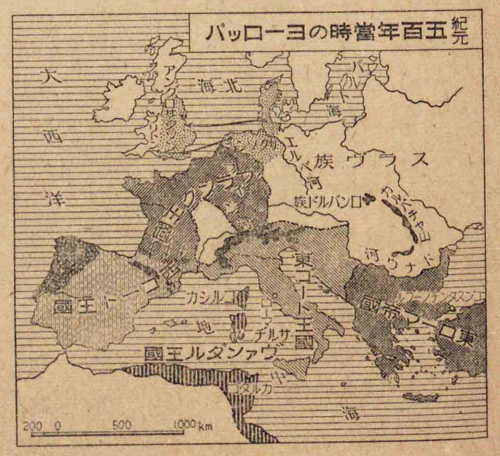
(三)東ローマ帝國　帝國分立

圖解　ユスチニヤヌス帝及その臣下（モザイク）　イタリヤ、ラヴェンナ（Ravenna）サン＝ヴィターレ（S. Vitale）寺在ユスチニヤヌス帝の內政外交



圖解　東ローマ建築の大斗　壯大の趣、見るべきものがある

の後、東ローマ帝國もまた內亂外寇に苦んだが、五二七年ユスチニヤヌス（Justinianus）帝が卽位するに及んで、內政外交共に大に振張するに至つた。帝は先づローマ法典を編修し、セント＝ソフィヤ（St. Sophia）の大會堂を起し、更に支那より蠶卵・桑苗を輸入して養蠶術を始め、また名將ベリサリウス（Belisarius）に命じてヴァンダル王國を平げ、イタリヤを從へ、勢威を海外にまで輝かしたが、帝の死

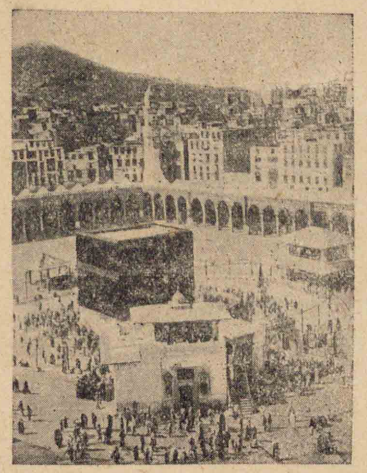


後、國運再び衰ふるに至つた。

第二章　中世ヨーロッパ(一)マホメット教とサラセン帝國

㊀アラビヤ族とマホメット

北方でゲルマニヤ人の移動が段々穩かになつた時、南方ではサラセン人の活動がめざましく現はれて來た。元來アラビヤ(Arabia)の住民はサラセンと呼ばれ、多くの部族に分れて遊牧もしくは隊商を業とし、多神教を奉ずる未開の人民であつたが、マホメット(Mohammed)が出づるに及んで、所謂マホメット教の力に依り、獨り宗教上のみならず、政治上の統一をも斷行するに至つた。マホメットはもとメッカ(Mecca)に生れ、はやく隊商に加はつてシリヤ方面に行商せる間に、ユダヤ教及びキリスト教の感化を受け、



サラセン人の國風

圖解　アラビヤ人本來の信仰中心であり今なほマホメット教徒禮拜の中心となれるメッカ、カーバの神殿

大宗教家マホメット現はる

イスラム教(Islamism)即ちマホメット教なる一神教を立てるに至つた。しかも彼はメッカの住民に迫害されて、六二二年難を北方のメヂナ(Medina)に避けたが、これはヘジラ(Hegira)と呼ばれこの年がマホメット教の紀元元年となつてゐる(ヘジラとは逃走の義である)。やがてマホメットは武力を用ひてメッカを取り、遂にアラビヤの全土を併せ、ここにその教を弘めるに至つた。マホメットの歿後、その弟子がマホメットの教訓を集めてイスラム教の經典を作つた。所謂コーラン(Koran)とはこれである。

圖解　イスラム教徒禮拜の方式

コーランの成立

㊁サラセン帝國の强盛

マホメットの繼承者をカリフ(Caliph)といひ、政教二つの全權を握り、コーラン・朝貢・劍戟の三者の一を以て頻りに諸國を征服し、東はシリヤ・ペルシヤを滅ぼして唐の西境に迫り、西はエジ

プトより北アフリカを平定し、更に北向してイスパニヤを取り、フランク王國を侵したが、フランクの宮宰チャールス=マルテル(Charles Martel)のため、七三二年ツール(Tours)の戰に擊破され、その後はただピレネー山(Pyrenees)の南に退いて、イスパニヤを保つに過ぎなかつた。

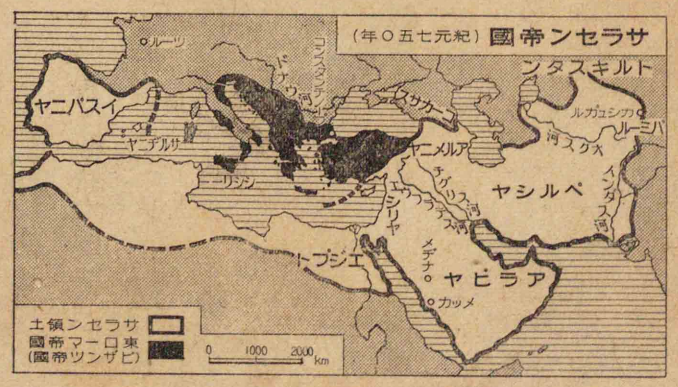
サラセン帝國軍の西歐侵入

また東方から東ローマ帝國を侵さうとしたサラセンの企も失敗に終つたので、一時東西にサラセンの武力を邀へた西歐キリスト教諸國も、ここに始めて安らかなるを得たのである。

ツールの戰の史的意義如何

やがて八世紀の中頃に至つてカリフ相續の爭から、サラセン帝國は東西に分裂し、東はバグダード(Bagdad)に、西はコルドヴァ(Cordova)に都し、何れも國運が盛んになつた。

サラセン帝國の分裂



イスパニヤ、グラナダ、アルハンブラ王宮」の獅子の庭（サラセン式建築）

イスパニヤ・セヴィリヤ、アルカサール王宮」（サラセン建築）

グラナダ「アルハンブラ王宮」獅子の庭（サラセン建築）
Granada　Alhambra　Patio de los Leones

サラセン帝國のコルドヴァ王朝がイスパニヤを支配した折、グラナダはイスパニヤのダマスクと言はれ、氣は澄み、樹は茂り、金銀は充ち足つて、實に殷富の都會であつた。しかも同地のアルハンブラ王宮は今に尙ほ當時の盛觀を傳へて「サラセン建築」の代表的のものと言はれてゐる。圖は同王宮「兩姉妹の間」の南側「獅子の庭」の光景を寫したものである。庭の中程に十二の石獅子に支へられた泉盤がある。この彫刻こそ十四世紀にマホメット五世の命にて造られたと言はれて居り、その形態の妙が遂にこの園庭に名づくるに「獅子の庭」の名を以てするに至つた所以である。なほ中庭に噴泉を造るはサラセン建築の特色にして、暑熱烈しきアラビヤに起つたが爲である。庭の周圍の柱廊の彫刻が纖細にして色彩鮮かな幾何學的紋樣を用ふるもサラセン建築の特質である。

セヴィリヤ「アルカサール」王宮（サラセン建築）
Sevilla　Alcázar

イスパニヤの西南部セヴィリヤはグァダルキヴィルの清流の左岸に位し、瀟洒たる藝術の都市である。ここに「アルカサール」宮とよぶサラセン式の典型的建築がある。十二世紀の頃「スルタン」ユズフ＝アブ＝ヤグブ（Sultan Jûsuf Abu Jakub）の造るところと言はれてゐる。圖に示すところはその王宮の正面であり、幾何學的紋樣の鮮美なる彫刻は、今に尙ほ當年の盛觀を想像さするものがある。

サラセン文化の特色

サラセン建築

圖解 コルドヴァの大伽藍裝飾には動物の形を用ひず、主に植物紋樣や幾何學紋樣を用ふる

㊂ サラセンの文化

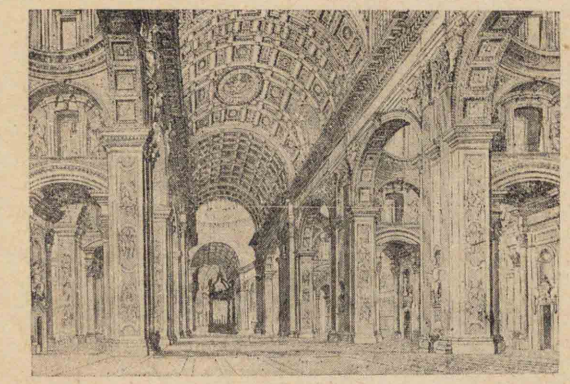
東西兩カリフの國は八・九兩世紀に跨つて文化が頗る進み、遙にキリスト教諸國を凌駕するものがあつた。卽ちその商業は海陸共に盛であつて、地中海沿岸はいふに及ばず、遠くインド・支那方面にも貿易を營むに至つた。サラセン人はギリシヤ・エジプト・インド各方面の文化を輸入し、普通アラベスク（Arabesque）と呼ばれる美はしき唐草模樣や、一種獨特の建築樣式を發達させ、工業では製紙・機織の法が大に進んだ。その他文學・哲學・天文・數學・物理・化學に至るまで、何れも長足の進歩を遂げ、今日行はれる學術上の用語並に一般の日常語に、アラビヤ語の名殘を多く止むるのを見ても、サラセン文化の普及の如何に大なりしかを想像するこ

とが出來よう。

第三章　中世ヨーロッパ(二)キリスト教會とフランク王國

(一)ローマ法王

初期のキリスト教會は單なる信者の集りに過ぎなかつたが、後には布教の便宜上、信者の間に僧侶が出來、更に僧侶にも種々なる階級を生じ、殊に五大本山の一たるローマの大長老には、歴代、英俊の人物を輩出し、且つ聖ペテロの St. Peter 法燈を繼ぐものと信ぜられたため、その勢が大に高まり、遂に法王と呼ばれて精神界の帝王たる觀を呈し、事實上、東ローマの支配を脱するに至つた。



圖解　聖ペテロの墓上に立つローマ聖ペテロ寺の内部。今のものは十六七世紀になれる復興式の建築

法王の起源

(二)東西兩正教の分立

ローマの教會に於ては蕃民教化の必要上、キリスト教の本義を離れて偶像崇拜を認むるに至つたが、東ローマ帝レオ三世 Leo III. は宗教上の革新を企て、七二六年、斷然偶像の禮拜を禁じたので、ローマ法王はその命を奉ぜず、遂に法王はフランク國と相結んで東ローマの支配を脱し、コンスタンチノープル教會より分離するに至つた。これよりキリスト教が分れて、東のギリシヤ正教 Greek Catholic と西のローマ正教 Roman Catholic との二派になつた。

偶像禮拜の禁止

(三)フランク王國とカロルス王朝

民族移動の際、ガリヤに起れるフランク王國は國力が最も發展するに至つたが、宮宰チャールス＝マルテルがサラセンを擊ち退けた功により、權力が大に高まり、その子ピピン Pipin に至つて遂に王を廢し、自ら位を奪ひ、カロルス王朝 Carolingians がここに起つた。ローマ法王は、フランクの援を仰がん爲めピピンの卽位を認めたが、ピピンはこれを德として、法王のためロンバルヂヤ人 Lombards を破り、北イタリヤの地を得て、これを法王に獻じた。

カロルス朝の起り

チャールス大帝（七六八位―八一四死）

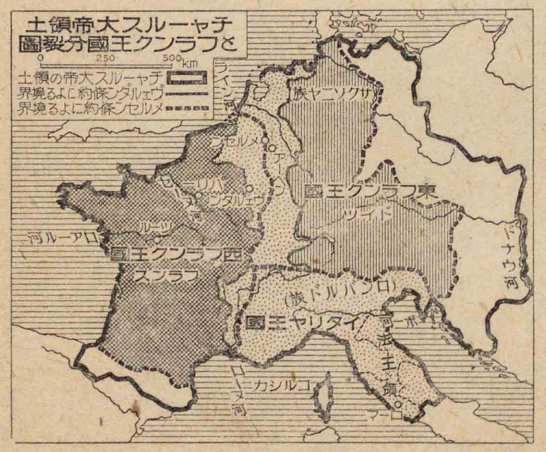
圖解ドイツの畫家デューラーの筆に成るチャールス大帝

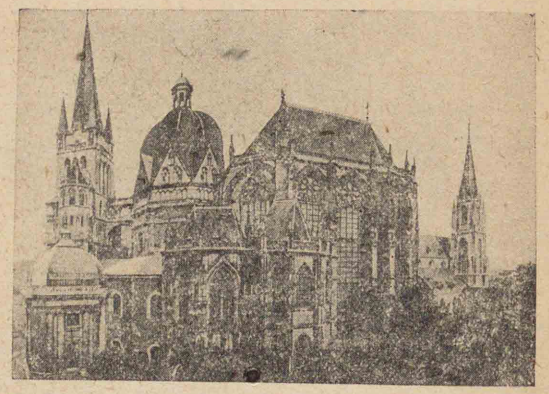
銘ラテン文。一五一四年筆チャールス大帝（ドイツ、ニュルンベルヒ國民博物館藏）

チャールス大帝の遠征

㊃ チャールス大帝

ピピンの後、その子チャールス大帝（Charles the Great）が位を繼ぎ、在位四十餘年の間、五十餘回の遠征軍を出して、ロンバルディヤ（Lombardy）をうち滅ぼし、イスパニヤのサラセンを攻め、更に屢〻ゲルマニヤ諸民族を征服し、頻りに領土を擴げて、キリスト教を弘むるに至つたので、法王レオ三世は大にこれを德とし、八〇〇年ローマに於てチャールスにローマ皇帝の帝冠を授け、西ローマ帝國はここに回復せられるに至つた。帝力を內治に致し、且つ意を敎會との融和に留め、先づアーヘン（Aachen）を都と





圖解チャールス大帝の墳墓のあるアーヘンの大伽藍

大帝國の分裂

圖解サラセンの皇帝ハルン＝アル＝ラシッドから大帝に贈つた象の刺繍ある布片

獨・佛・伊三國の起り

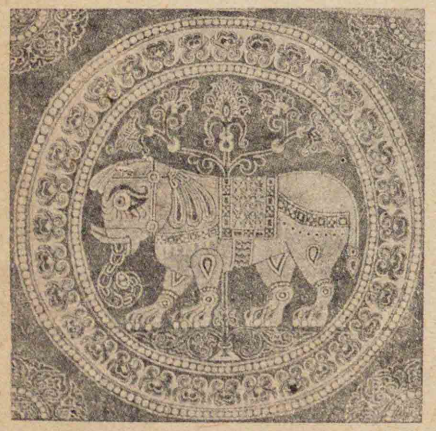
し、地方制度を刷新し、學校を起し、農工を奬勵し、西ローマ帝國滅亡後、衰へ果てた文明はここに再び復興の氣運を示した。

㊄ 帝國の分裂

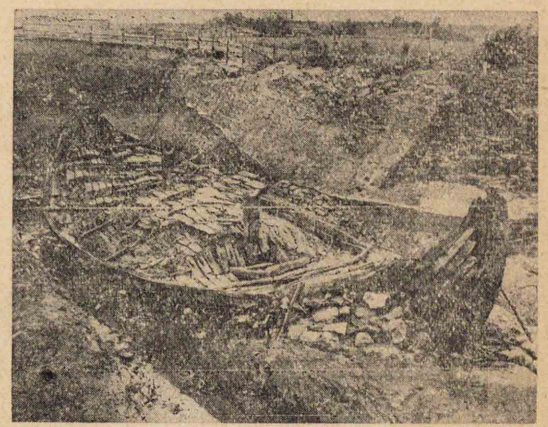
大帝の死後、その子ルイが帝位を繼いだが、施政が宜しきを得ずして諸子領土を爭ひ、紛爭久しきに亙り、遂にヴエルダン（Verdun）・メルセン（Mersen）兩條約（八四三、及び八七〇年）に依つて、帝國が分れ、東西兩フランク及びイタリヤとなり、今のドイツ（Germany）・フランス・イタリヤ三國の基をなすに至つた。

㊅ ノルマン族の活躍

今のスカンヂナ（Scandinavia）



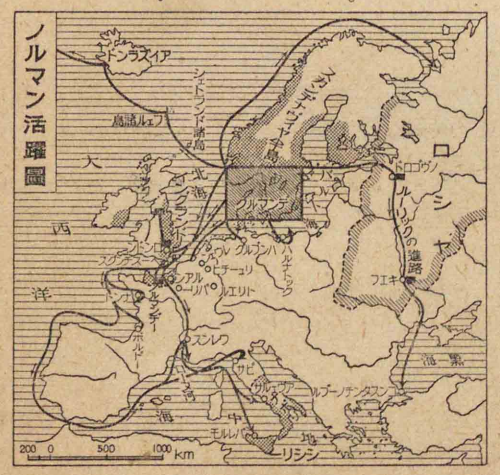
ノルマン人の特性



圖解　ノルマンはその部族の長を葬るに船の墓を以てした。圖はその一、飽まで海國民たる風がある。

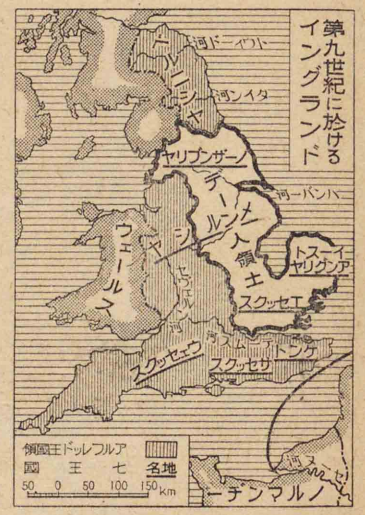
ノルマンヂーの起り

ヴィヤ半島からデンマルクにかけてゲルマニヤ民族の一派たるノルマン人が居住した（ノルマンとは北人の意である）。彼等は勇敢にして冒險を好み、奪掠を事とし、常に風波を凌いで北海沿岸の地を侵略し、進んでグリーンランドより北アメリカ方面にまで乘り出した。なほヴェルダンの條約後は盛に東西兩フランク王國を侵したが、九一一年西フランクが遂に屈し、ノルマンの酋長ロロを封じてノルマンヂー公とし、セーヌ河下流一帶の地を與へた。これより同地のノルマンはキリスト教に歸依し、言語・風俗共にフランスの感化を蒙ることになつた。

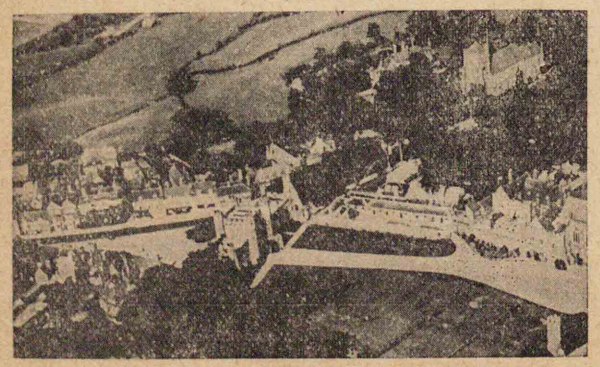


圖解　ヘースチングスの戰　實はヘースチングスの北數哩を隔つるセンラックで戰はれた圖は飛行機上より瞰寫せる古戰場

ノルマンの英國征服



グル・サクス兩種族は、海を越えてブリタニヤ島に移住し、所謂七王國を建てたが、九世紀の前半期に統一せられて、イングランド王國の基を開いた。その後、一〇六六年ノルマンヂー公ウィリヤムは兵を率ゐてこの國に攻め入り、ヘースチングスの一戰に勝つてノルマン王朝の王位を創めた。かくてノルマンの制度文物はアング



更に民族大移動の際、ゲルマニヤ民族なるアン

ル=サクスの國風と融和し、以て後のイギリス文化の基をなすに至つた。

その他ノルマンの一種はスウェーデン(Sweden)を出でて東にすすみ、そこに建國してロシヤの始をなし、同じくノルマンの一部は南、地中海に進んでシシリー島に據り、ナポリ(Naples)王國を建設するに至つた。

第四章　中世ヨーロッパ(三)
神聖ローマ帝國とローマ法王

㈠神聖ローマ帝國 東フランク卽ちドイツに於ては、十世紀の初めにチャールスの系統が絶えて、國内の諸侯伯等が國王を選擧することとなつた。英邁なるオットー(Otto I)一世が國王に選ばれるや、大統一の理想を以て國内の統合を計り、更に兵を外に出してデーン人(Danes)を征し、マ

圖解 フランスのバユー(Bayeux)に殘る十一世紀の刺繡。英國に於けるノルマン勝利の光景をあらはす圖はその一部で英國侵入用の船を造つてゐるところ

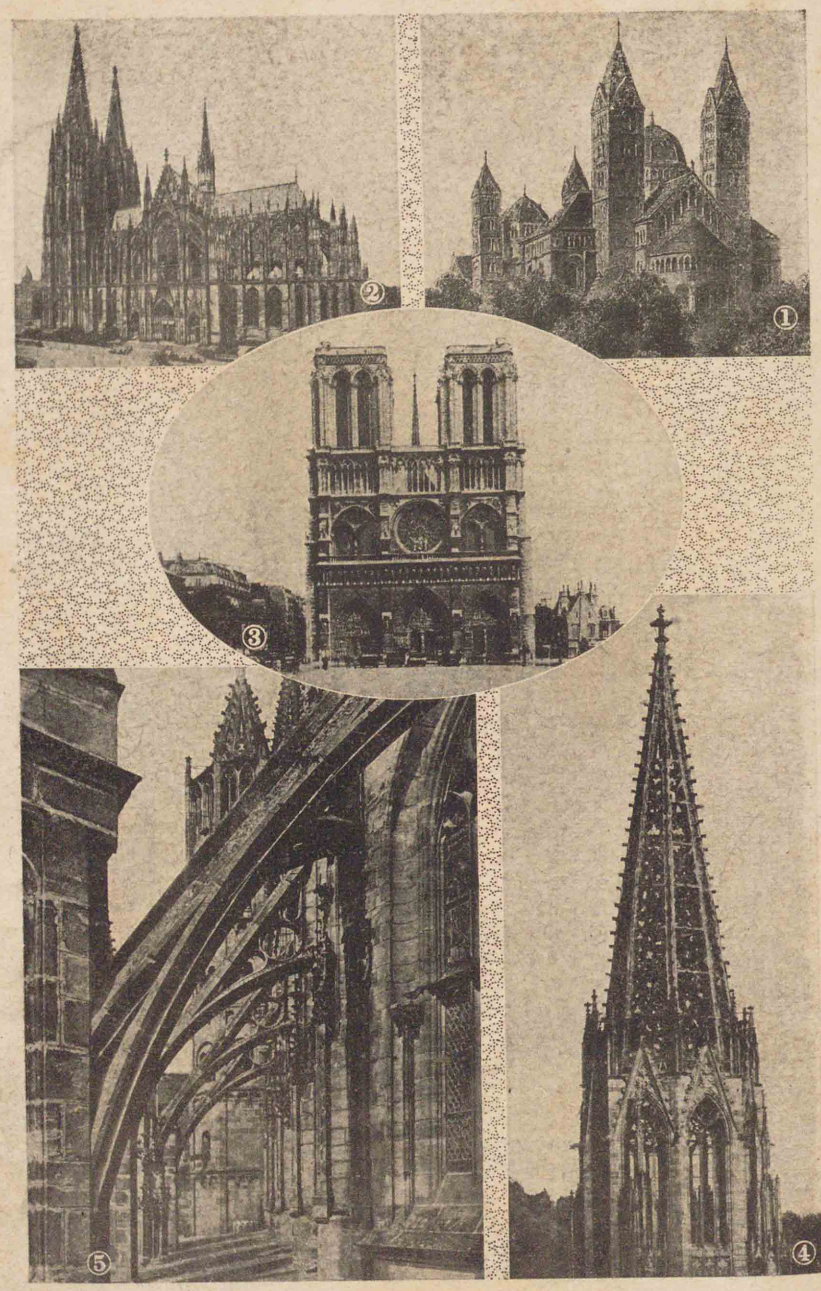
ナポリ王國の起源

オットー一世の統一理想

ジャール人(Magyars)を討ち、またローマ法王を援けて、イタリヤに入り、内亂を平定した。ためにオットーは九六二年法王より神聖ローマ皇帝(The Holy Roman Emperor)の帝冠を受け、イタリヤ王をも稱するに至つた。その後ドイツ王は概ねこの帝號(或はドイツ皇帝ともいふ)にイタリヤ王を兼ねるを例とし、常に力をイタリヤの經營に注ぎ、ドイツの内事を顧みず、爲にドイツ統一のこと漸く衰ふるに至つた。

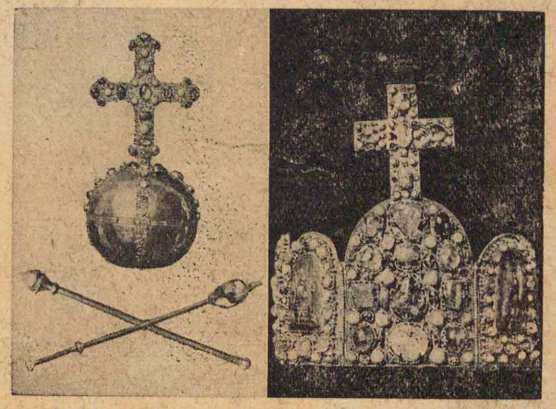
圖解 キリストの前に跪くオットー一世夫妻

㈡皇帝と法王との衝突 皇帝と法王とは永く相結んで互にその勢力を展ばすに至つたが、その結果、兩者の間に烈しき爭を生ず



①ドイツ、ライプツイグ大寺院のルネサンス式
②ドイツ、ケルン大寺院のゴシック式
③フランス、ノートルダム大寺院のゴシック式
④ドイツ、ライプツイグ大寺院尖塔のゴシック式
⑤ドイツ、ライプツイグ大寺院虹壁控柱のゴシック式

グレゴリー法王の雄志



圖解　神聖ローマ帝國の帝冠と笏並に璽（ウィーン宮廷博物館藏）

圖解　カノッサの屈辱を示す粗朴なる畫

カノッサの屈辱

ることとなつた。法王グレゴリー七世は雄略に富みて大才あり、常に法王權を展ばして世界を主宰しようと企て、先づ教會內部の大改革を行ひ、更に僧官任命權を皇帝の手より奪つた。しかも神聖ローマ皇帝ヘンリー四世がこの事に從はず、法王の廢位を宣言したので、法王もまた皇帝を破門するに至り、ここに兩者の間に大なる衝突をひき起した。しかるにドイツ諸侯の平素皇帝に不滿なるものが、この機に乘じて叛を計つたので、ヘンリー四世は已むを得ず、一〇七七年自らイタリヤ、カノッ

Gregory VII.
Henry IV.
Canossa

ロマネスク建築とゴシック建築

ロマネスク建築は中世の教會文化を代表する寺院建築である。その樣式はラテン十字形(十字形の下部の方、上部よりも長い)の平面圖に依り、中央部の天井を高くし、從來水平なりし天井を圓形アーチとし、窓の上部も同じ圓形のアーチを用ひ、數箇の塔を建てて建物全體の調和を保つよう工夫してゐ。①に掲ぐるドイツ、スパイエルの大寺院はその典型的なもの、十一世紀にドイツ帝コンラド二世(Conrad)が工を創め十二世紀にヘンリー四世が完成した。やがて十二世紀末から十三世紀にかけ同じ教會文化を代表するゴシック式が行はれた。平面プランはロマネスク同樣十字形であるが稍複雜である。尖形アーチの天井は多くの肋材に支へられ、許多の肋材は各柱頭に集中し、更にこの柱に集る壓力は外壁に設けた虹狀控壁(フライングバットレス)(Flying buttress)に支へらる。尚ほ窓は殊更大にして尖形アーチの恰好とし、厚き色硝子を施して、光の投射を少くし、堂内に於ける莊嚴の感を深からしめる。その上塔は極めて高く尖鋭に、空高くそそり立つて敬虔(クイクシ)の感を起さする　②ドイツ、ケルンの大寺院は中古期のゴシック式のものの大破せる後、十九世紀に復舊工事を施したもの、③フランス、ノートルダム大寺院は十二世紀に創立されて爾後次第に完成され、共にゴシック式建築の代表的なものと稱せられてゐる。(但し塔の構造は兩者に於て若干の相違がある)なほ④及び⑤は十三世紀に起れるドイツフライブルグの大寺院の尖塔並に虹狀控壁を示せるものであつて莊嚴の美を現じてゐる。

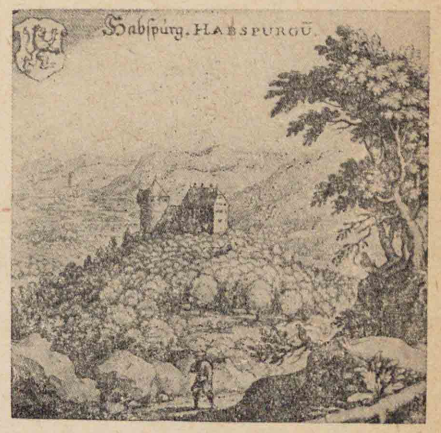
教會の文化

東洋に於ける封建制度に就て研究せよ

サに赴きて法王に謝罪し、漸く破門を許された。その後、教權と政權の爭が屢〻起り、ドイツ及びイタリヤには法王黨・皇帝黨が相對立して激しく爭ひ、法王インノセント三世(Innocent III.)の時には教權の伸張が著しく諸國の君主をしてその下風に立たしめるやうになつた。

㊂教會の勢力　ゲルマニヤ民族移動後の混亂期に、社會の秩序を維持し、蠻民の教化に努めたのは、キリスト教教會の力であるが、その後、教權の盛なるに從ひ、教會の財力はますます豐かとなり、大寺院の建立も盛に起り、ロマネスク(Romanesque)風の建築に次いで、ゴシック(Gothic)風の莊嚴なるものも大に行はれた。その他、社會萬般のこと何れも宗教の影響を蒙らざるものは無く、その極、多くの弊害をもひき起すに至つたのである。

㊃封建制度の起りとその發達　サラセン軍のヨーロッパに攻め入つた際、フランク王國の宮宰チャールス"マルテルは、王領及び寺領の一

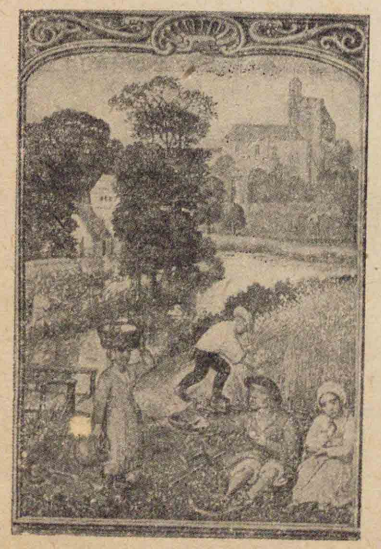


封建制度の起源

圖解封建諸侯の居城。普通山城にしてブルクといふ

して主從の連鎖的關係を生ずるに至つた。

なほ封建制度に於ては階級の區別が極めて嚴峻であつて、武士は封建社會の中樞を形づくつて社會の上位に立ち、商工農民は社會の下層部を封土(Feudum)として臣下に與へ、臣下をして平時兵馬を養ひ、國家有事の日に備へさせ、封建制度の端ここに開けた。さて封建制度に於ては國王から封土を分ち與へられた諸侯が、更に自らの領土を割いて數多の武士を養ひ、戰時彼等を率ゐて國王に奉公を致すの義務を負ひ、社會組織上、土地を媒(ナカダチ)と



封建制度の階級區別

圖解中世の農民圖はイギリスの農民の有樣を描きしものザルツマン、(Salzman)「中世の英國生活」所載

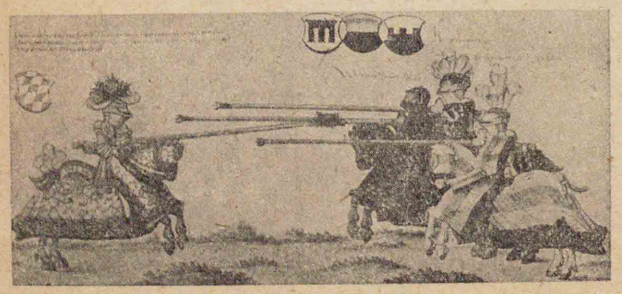
圖解中世の商人圖はイギリスの商人の有樣を描きしもの（ザルツマン所載）

騎士の修養

圖解騎士の試合武術競技會の光景。ここでは普通、一騎士と一騎士、或は騎士團と騎士團が互に武藝を比ぶるを常とする。馬上に槍を揮ひ、驅け違ひさま、相手の騎士を馬から突き落したものが勝である

に居つて、產業勞役に服さねばならなかつた。この封建制度は十世紀の頃に完備し、その後五百年の間普ねくヨーロッパ諸國に行はれた。

封建制度の中心は武士階級であつたが爲、自(オ)(Knight)に至つた。すべて武士は嚴重なる教養訓練を受け、一定の儀式を經て騎士(Chivalry)卽ち一人前の武士に取立てられるのであり、神を敬し、婦人を尊び、忠誠・勇武にして平時武藝に勵み、戰時その主君に從ひて軍陣に臨み、その馬前に討死するの覺悟がなければならなかつた。これが所謂武士道であつて、後世の紳士道なるものは卽ち武士道の發展を見るに至つた。



ちその餘風である。

第五章　中世ヨーロッパ(四)十字軍と法王權の衰微

一　十字軍の起りとその經過

十一世紀の初、カスピ海の邊に起つたセルジュック=トルコ族が、東カリフの國を侵して、遂にその首府バグダードを奪ひ、更にシリヤ・小アジヤを占領して東ローマ帝國を脅かし、東ローマ皇帝は救をローマ法王に求めた。當時またシリヤなるキリスト教聖地に巡禮したものが、西方に歸つてセルジュック=トルコの暴狀を訴へたので、西歐キリスト教徒の間に憤慨の聲が頻りにたかまつた。そこで法王ウルバン二世は、一〇九五年諸國の僧

セルジュック=トルコの横暴

圖解　十字軍士の出征　船にて聖地に向ふところ

侶・武士をクレルモンに集めて、聖地恢復の軍を起すべきことを勸め、群集みな熱狂して從軍を誓ひ、所謂十字軍がここに起つた。軍に從ふものは何れも十字の記章を身に着けたので、この名を以て呼ばれてゐる。

クレルモンの會議（我が國では今から八百三十九年前白河上皇院政時代。佛教全盛のころである）

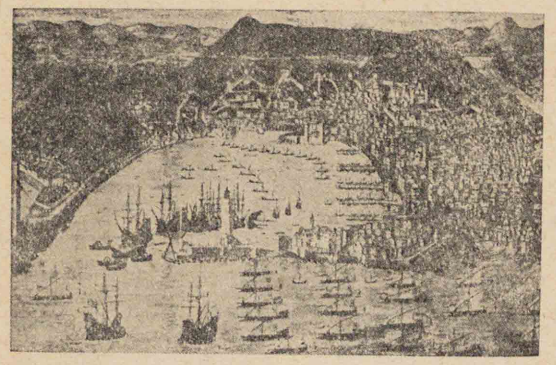
第一回十字軍は大なる困難にも屈せず、聖地イェルサレム（一〇九六―一〇九九年）を取り、ここにイェルサレム王國を起したが、またトルコ人に脅かされて國危く、爲に第二回十字軍の出征となり、しかも軍敗れて遂に王國の滅亡となつた。その後、各種の十字軍が引次いで起り、第七十字軍に及んだが、何れも聖地恢復の目的を達せず、中には東ローマの内紛にかかはり、或はアフリカに上陸してそのまま止んだものもあつた。

十字軍の不成功

第一十字軍要圖

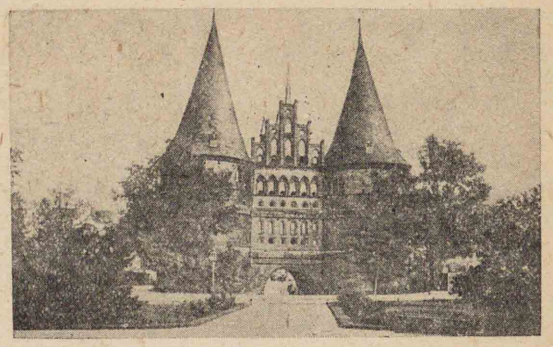
十字軍の各方面に與へた影響

㈡十字軍の結果　十字軍は前後約二百年に亙れる大遠征であつて、出征者の數は約七百萬の多きに上つたが、出征諸國の利害の衝突、さては後方連絡の不備に依り、遂に聖地恢復の目的を達しなかつた。されどこの戰の歐洲諸國に及ぼした影響は頗る大で、(一)出征目的の達せられなかつた爲、從來法王に對して有せる尊敬心が俄に衰へ、且つ信仰熱も冷却し、(二)軍に從へる諸侯・武士の戰に死し、或はその財産を失つた爲、封建制度の崩壞となり、從つて王を中心とする中央集權が諸國に起り、(三)更に十字軍の起れると共に東方交通が盛となり、通商貿易も大に進み、從つて都市の勃興を促し、イタリヤ諸市特にヴェニス(Venice)・ジェノア(Genoa)の如きは最も著はれ、尚ほ市府の安全を目的として相互同盟聯合するの



圖解　ジェノアの盛況　中世時代ジェノアとヴェニスは地中海の良港であつて東洋貨物の集中するところであつた（プロピレーン世界史所收）

市府聯合の趨勢

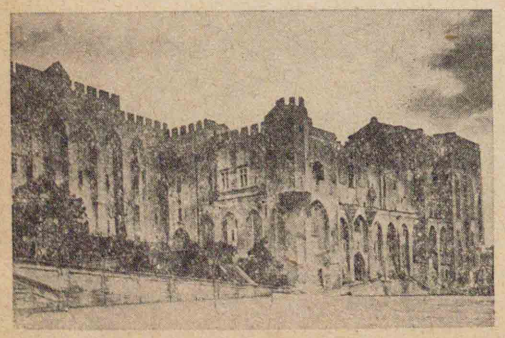


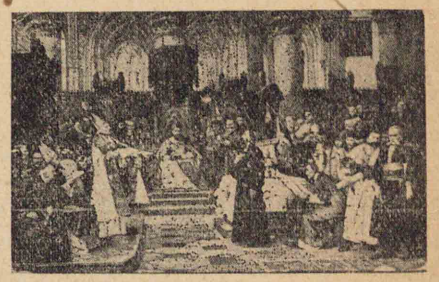
圖解　ハンザ市府リューベックの城門。ハンザ各市は何れもかかる防禦的設置を施してゐた

圖解　アヴィニョン法王廳　フランスのローン河畔にあるアヴィニョンの法王廳

風を生じ、ドイツの「ハンザ同盟(Hanseatic League)の如き最も勢力の盛んなものであつた。(四)その上、十字軍を好機として、進歩の域に達せる東方サラセン文化が西洋に傳はり、大にヨーロッパの學藝を發達せしめるに至つた。

㈢法王權の衰微　十字軍の失敗より法王權が衰へ、加ふるに教會内部の腐敗は、いよいよその衰頽を甚しからしめることとなつた。フランス王フィリップ四世(Philip IV)の立つに及び、大に法王權を壓迫し、遂に法王廳を南フランスのアヴィニョン(Avignon)に移し、(一三〇九年)その後六十餘年七代の法王は、何れもフランス王





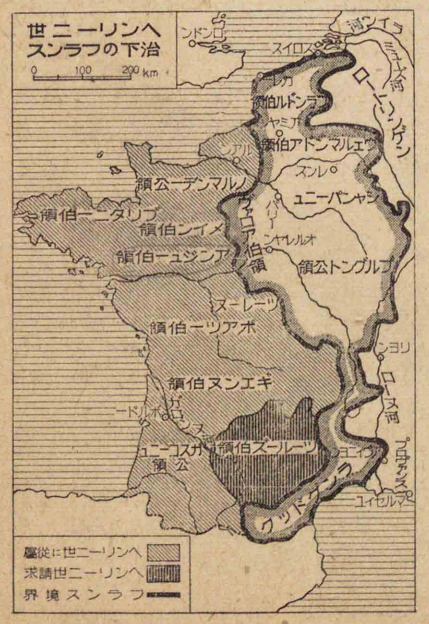
圖解　コンスタンスで罪の宣告をうけるフス。フス宗教改革の先驅となり、一四一五年コンスタンス宗教會議で有罪の宣告をうけ、焚殺さる（チェッコ＝スロヴァキヤ、プラーグ市廳壁畫）

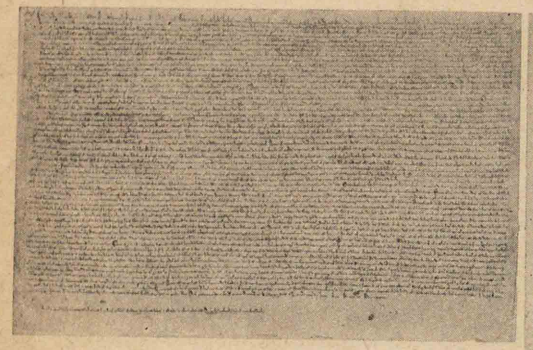
の支配下に立ち、十四・五世紀の頃、イングランドのウィクリフ（Wycliffe）、ボヘミヤ（Bohemia）のフス（Huss）等が出で、教會の腐敗を責め教制の改革を唱へ、所謂宗教改革の先驅者となつた。

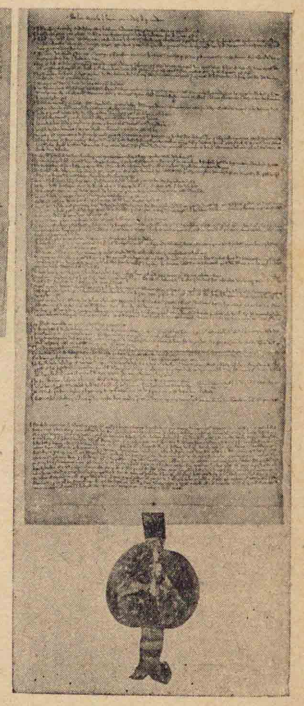
第六章　中世ヨーロッパ(五)西歐諸國の狀勢

一　英佛兩國の發展

イングランドでは十二世紀マン王朝の王統絶え、その親戚たるフランスのアンジュー（Anjou）伯が入つて王位を繼ぎ、ヘンリー二世と稱し、プランタジネット（Plantagenet）朝がここに起つた。爲に英王は英本國のみならず、フランス國内の半ば頃、ノル





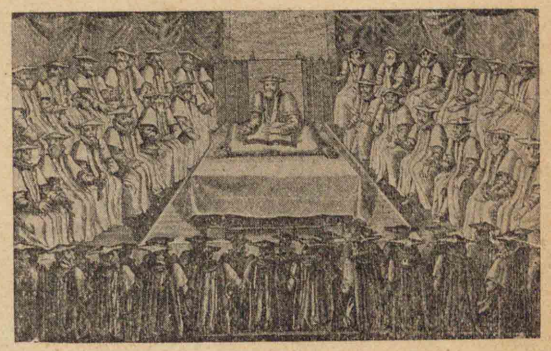


圖解　大憲章の草案（向つて右）と公布された原文書（向つて左）（英國博物館藏）

大憲章の發布

にも廣大なる領地を有ち、その勢フランス以上に盛であつたが、その子ジョン（John）王は暗愚であつて、内には民を憐まずして人望を失ひ、外はフランス國内の領土を多く失ひ、また法王と爭うて破門の宣告を受け、威信が彌〻衰ふるに至つた。そこで一二一五年貴族・僧侶等は王に迫つて、彼等の起草せる大憲章（Magna Charta）に署名を求め、民權を擁護し、王權の濫用を抑ふることとなつた。これが所謂イギリス憲法の基礎である。ついで、ヘンリー三世の時、王の專權を抑ふる爲、貴族・僧侶と州・市の代表者を集めた議會が開かれ、後（一二六五年）

英國議會の起り



圖解英國議會開始の光景　英國では王の專横に抗するため議會の開設を人民より要求し、佛國では法王に抗する手段として王の側から開設を發議した

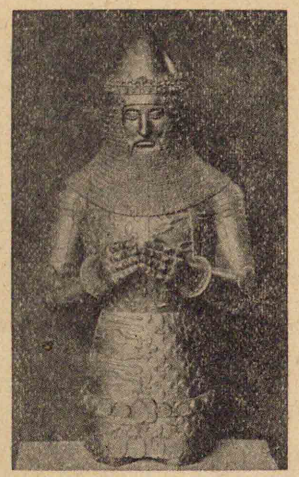
百年戰役（一三三九―一四五三年）

に分れて上下兩院となつた。これがイギリスに於ける立憲議會政治の始めである。一方フランスに於ても、カペー朝（Capet）のフィリップ四世が出で、法王との爭に國民の援を得ん爲、一三〇二年貴族・僧侶及び平民の代表者を集めて三部會を開き、その結果、法王權を抑へて王權を伸張することが出來た。

百年戰役

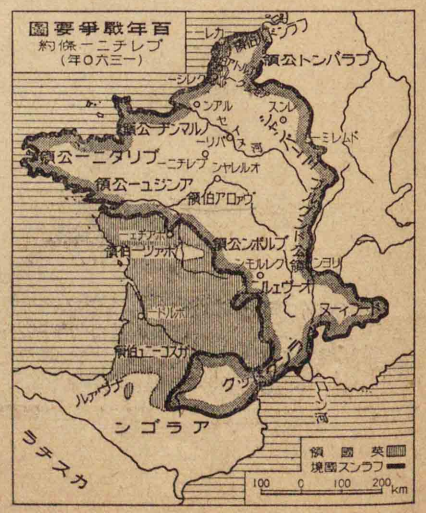
一三二八年フランスではカペー朝の正統が絶え、その支流フィリップ六世が入つて王位を嗣ぎヴァロア朝の祖となつたが、この時英王エドワード三世（Edward III.）はその母方の關係に由つて、フランスの王位を相續する權ありと唱へ、一三三九年長子黑太子を從へ、兵を率ゐてフランスに攻め込んだ。これより約百年の間、戰爭は斷續して行はれ、世に百年戰役と呼ばれてゐる。この戰にフランス軍は頻りに破られ、チャールス七世の時には國運も日に傾き、僅にオルレヤン（Orleans）附近の狹少なる土地等を保つに過ぎなかつたが、偶〻ジャンヌ＝ダルク（Jeanne Darc）といへる憂國の一少女が出で、祖國救濟の神託を受けたるものと信じ、自ら馬を陣頭に立てて全軍を勵まし、遂にイギリ

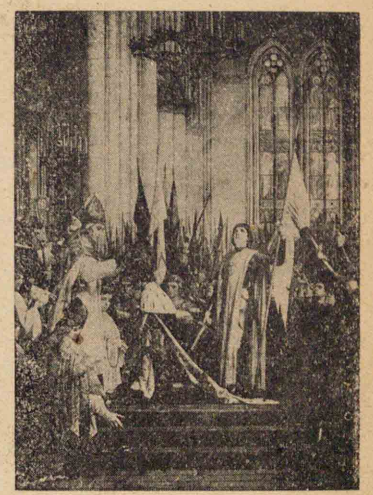
フランス（カペー朝）
- フィリップ三世
  - フィリップ四世
    - ルイ十世（フランタジネット朝）
    - エドワード二世
      - エドワード三世
        - エドワード（黑太子）
        - ランカスター公ジョン
        - ヨーク公エドモンド（チューダル朝）ヘンリー七世
    - いさべら
    - フィリップ五世
    - チャールス四世（一三二二―一三二八）
    - （ヴァロア伯）チャールス
    - （ヴァロア朝祖）フィリップ六世（一三二八―一三五〇）
    - ジョン二世
    - チャールス五世
    - チャールス六世
    - チャールス七世
    - ルイ十一世



圖解黑太子の像　カンターベリー寺院内の黑太子墓石棺上に彫刻されたものの模作

ジャンヌ＝ダルクの出現





圖解　ジャンヌ＝ダルク、レンス戴冠式の侍立

英軍全く追ひ拂はる

ス軍を退けてオルレヤンの圍を解き、王をしてレンス(Reims)に戴冠式を擧げさせたが、不幸敵軍に擒へられて殺された。これよりフランス軍の敵愾心は大に高まり、次第にイングランド軍を追拂ひて、カレー(Calais)一市を除く外、全國土を恢復することが出來た。この戰の結果フランスの諸侯・武士が衰へて中央集權の端が開かれ、ルイ十一世以降は王權が特に強固になつた。

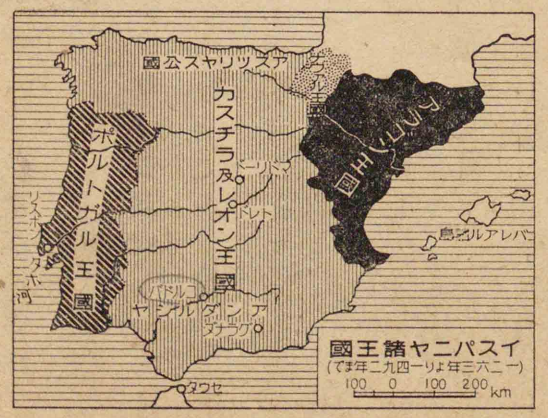
薔薇戰爭（一四五五―八五年）

やがてイングランドに於ても、ランタジネット朝の兩統たるランカスター(Lancaster)・ヨーク(York)兩家の間に、三十年に亙れる薔薇戰爭(War of Roses)が起り、諸侯・武士の多くが戰死してまた中央集權の勢を示し、チュードル(Tudor)朝のヘンリー七世(Henry VII.)が卽位するに及んで、王權は著しく強大となつた。

㊂ イスパニヤ及びポルトガルの統一　當時イスパニヤではサラセン西帝國の勢が衰へて、キリスト敎諸國の勃興を促し、中にもカスチラ・アラゴン(Aragon)等の勢が盛に、旣に婚を通ぜるカスチラ女王イサベラ(Isabella)とアラゴン王フェルヂナンド(Ferdinand)は一四七九年兩國を合同し、イスパニヤ王國の成立となつた。

イスパニヤ王國の成立

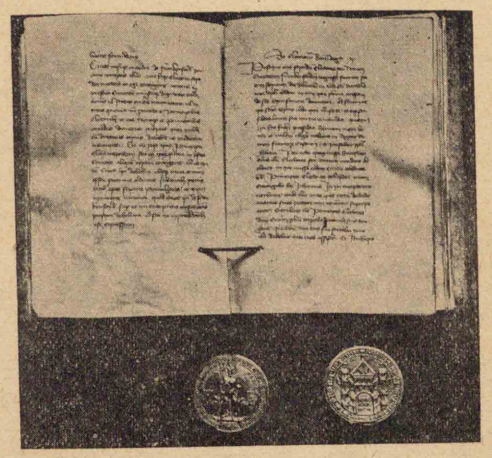
これよりイスパニヤは頻りとサラセン軍を壓迫し、一四九二年その最後の根據地たるグラナダ(Granada)を奪ひ、更に强暴なる貴族を抑へて、王權は著しく伸張さるるに至つた。ポルトガル(Portugal)はもとカスチラの屬邦であつたが、十一世紀の末獨立し、十五世紀にはジョン二世が出でて諸侯を抑へ、中央集權の業を大成するに至つた。



㊃ ドイツの狀勢とスウィスの獨立　ドイツは選擧に依つて皇帝を

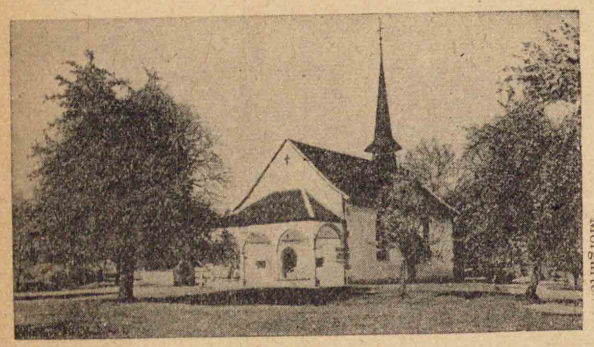
大空位時代

選ぶ國であつたから、帝權は常に弱く、これに反して諸侯の勢力が盛であり、十三世紀の中頃、大空位時代(Interregnum)とて皇帝の無い時代が十八年にも及んだ。一二七三年ハプスブルグ(Hapsburg)家のルドルフ一世(Rudolf I.)が選ばれて國王となつたが、王は帝國全體の利害を顧みず、オーストリヤ(Austria)等に自家の勢力を張るに汲々たるばかりであつたので、帝權が振はず、皇帝選擧の權は大諸侯の手に落ち、遂に一三五六年皇帝チャールス四世の時、黄金文書(Golden Bull)を出して七大選帝侯(Electors)の地位を確立し、諸侯の權はこれより益〻盛となつて皇帝の命が行はれず、容易に封建的傾向を脱することが出來なかつた。



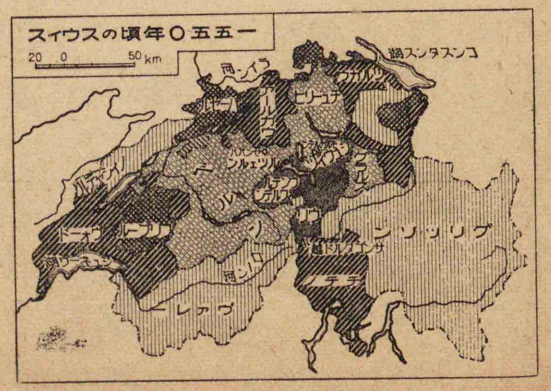
圖解　フランクフルト＝アム＝マイン市立歴史博物館に藏する黄金文書。文書に附する金印からこの名を得た黄金文書

もとスウィス(Switzerland)の地はドイツの一部であつて、ハプスブルグ家の所領であつたが、人民は勇敢で獨立心が強く、主家の壓迫に堪へずして一二九一年、ウリ(Uri)・シュウィッツ(Schwyz)・ウンテルワルデン(Unterwalden)の三州が聯合して反抗の旗を擧げ、モルガルテン(Morgarten)・センパハ(Sempach)等の戰にオーストリヤ軍を破つて、獨立の實を得るに至つた。



圖解　センパハ古戰場の現狀　挿畫の中央に立つはオーストリヤ側戰死者の靈を安んずる教會堂

㊄ 蒙古人の西征とオスマントルコの活動



蒙古軍の西侵

フン民族の西侵以來、東方民族は機に乘じて屢〻ヨーロッパの地に攻め込んだ。十三世紀の初め、アジヤの地に起れる蒙古帝國の勢が大に盛に、遂にバツ(Batu)の率ゐる大軍はまづロシヤ(Russia)各地を征

リーグニッツの戰

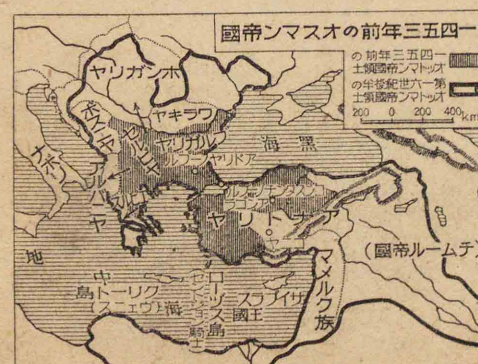
圖解 リーグニッツ激戰の古畫
この戰に聯合軍首將シレシヤ公ヘンリー二世は亂軍の中に戰死し、蒙古人のため、その首を切りとられた

服してポーランド(Poland)を侵し、ドイツに入り、一二四一年ドイツ・ポーランドの聯合軍をリーグニッツ(Liegnitz)の一戰に撃破し、ホンガリヤ(Hungary)の地をも打從へたが、やがて軍を還してその一部は南ロシヤに止まり、キプチャック(Kiptchak)汗國を立て、その後蒙古の一軍は西南アジヤを侵して、サラセンの東帝國を滅ぼし、そこにイル汗國を建設した。

オスマン=トルコの成立

これより先、カスピ海の東に居つたオスマン=トルコ(Osman Turks)は、蒙古人の壓迫を避けて小アジヤの地に移り、部長オスマンの時、東ローマ帝國の衰運に乘じて、獨立帝國を建設した。その後オスマン=トルコはチムール(Timur)との

一四五三年前のオスマン帝國



龜山	度宗	紀	一二六五	イングランド國會下院の起り	北條時宗連署となる
伏見	元世祖		一二八八	オスマン=トルコの建國	弘安の役、後七年
花園	武宗	十四世紀	一三〇九	法王アヴィニョンに幽囚さる(—一三七六)	延暦寺の僧徒入京强訴す
同	仁宗		一三一五	モルガルテンの戰	翌年北條高時執權となる
後醍醐	順宗		一三三七	百年戰役起る(—一四五三)	金崎城陷落。湊川の戰の翌年
後村上	同		一三四六	クレシーの戰	二年後、四條畷の戰
同	同		一三五六	ポアチエーの戰。黃金文書の發布	
長慶	明太祖		一三七八	ウィクリフ宗教改革を唱ふ	二年前、懐良親王明と好を通ず
同	同		一三八六	センパハの戰	
後小松	惠帝	十五世紀	一四〇二	アンゴラの戰	足利義滿邊民の明を侵すを禁ず。翌年明の成祖即位す
同	成祖		一四一二	フス宗教改革を唱ふ	
後花園	宣宗		一四二九	ジャンヌ=ダルク、オルレヤン城の圍を解く	一年前足利義教將軍となる
同	英宗		一四三八	活字活版術の發明	二年後、永享の亂
同	景宗		一四五三	東ローマ帝國の滅亡。百年戰役の終結	九年前、足利義政將軍となる。四年前、明に土木の變あり

大事年表二、中世史

日本	支那	世紀	西紀	西洋	東洋(日本及びその他)
允恭	宋文帝	五世紀	四五一	カタラウヌムの戰	
雄略	後廢帝		四七六	西ローマ帝國の滅亡	
顯宗	齊武帝		四八六	フランク王國の建設	
仁賢	同		四九三	東ゴート王國の建設	
繼體	梁武帝		五二七	ユスチニヤヌス帝の即位(—五六五)	
同	同		五二九	ローマ法典出づ	
安閑	同	六世紀	五三四	ベリサリウス、ヴァンダル王國を滅ぼす	
欽明	敎帝		五五五	養蠶支那よりヨーロッパに傳はる	
同	陳宣帝		五七一	マホメット生る	
推古	唐高祖		六二二	ヘジラ紀元	
皇極	太宗	七世紀	六四二	サラセン人ペルシャを滅ぼす	
聖武	玄宗		七二六	東ローマ偶像禁止令を發す	
同	同		七三二	ツールの戰	
孝謙	肅宗	八世紀	七五六	サラセン國東西に分裂す	
桓武	德宗		八〇〇	チャールス大帝西ローマ皇帝となる	
淳和	文宗		八二八	イングランドの統一成る	
仁明	武宗	九世紀	八四三	ヴェルダン條約結ばる	
清和	懿宗		八六一	ノルマン、イスランドを發見す	
同	同		八六二	ロシヤの建國	
同	同		八七〇	メルセン條約結ばる	翌年坂上田村麿蝦夷を平ぐ
宇多	昭宗		八九〇	ノルマン、グリーンランドを發見す	
醍醐	後梁太祖		九〇九	エジプトのファチマ朝起る	四年前、古今集成る
同	同	十世紀	九一一	ノルマンヂー公國の起原	三年後、三善清行封事を上る
村上	宋太祖		九六二	ドイツのカロルス朝斷絕す	
一條	太宗		九八七	神聖ローマ帝國起る	
同	眞宗		一〇〇一	フランス王國(カペー朝起る)	三年後、澶淵の盟
				ノルマン新大陸を發見す	翌年西夏建國す

小アジヤの地に移り、部長オスマンの時、東ローマ帝國の衰運に乘じて、獨立帝國を建設した。その後オスマン=トルコはチムール(Timur)との

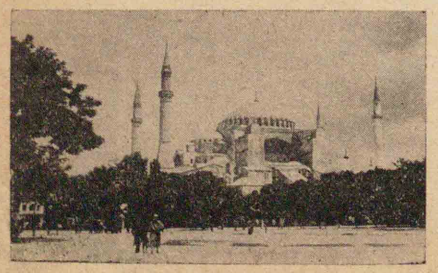
允恭	宋文帝	五世紀	四五一	カタラウヌムの戰
雄略	後廢帝		四七六	西ローマ帝國の滅亡
顯宗	齊武帝		四八六	フランク王國の建設
仁賢	同		四九三	東ゴート王國の建設
繼體	梁武帝		五二七	ユスチニヤヌス帝の卽位(—五六五)
同	同	六世紀	五二九	ローマ法典出づ
安閑	同		五三四	ベリサリウス、ヴァンダル王國を滅ぼす
欽明	陳宣帝		五五五	養蠶支那よりヨーロッパに傳はる
同	唐高祖		五七一	マホメット生る
推古	同		六二二	ヘジラ紀元
皇極	太宗	七世紀	六四二	サラセン人ペルシャを滅ぼす
聖武	玄宗		七二六	東ローマ偶像禁止令を發す
同	同		七三二	ツールの戰
孝謙	肅宗	八世紀	七五六	サラセン國東西に分裂す
桓武	德宗		八〇〇	チャールス大帝西ローマ皇帝となる
淳和	文宗		八二八	イングランドの統一成る
仁明	武宗	九世紀	八四三	ヴェルダン條約結ばる
清和	懿宗		八六一	ノルマン、イスランドを發見す
同	同		八六二	ロシヤの建國
同	同		八七〇	メルセン條約結ばる
宇多	昭宗		八九〇	ノルマン、グリーンランドを發見す
醍醐	後梁太祖	十世紀	九〇九	エジプトのファチマ朝起る
同	同		九一一	ノルマンヂー公國の起原
村上	宋太祖		九六二	ドイツのカロルス朝斷絕す
一條	太宗		九八七	神聖ローマ帝國起る
同	眞宗		一〇〇一	フランス王國(カペー朝起る)
後朱雀	仁宗	十一世紀	一〇三七	ノルマン新大陸を發見す
後冷泉	英宗		一〇六六	セルジュック=トルコの建國
白河	神宗		一〇七三	ノルマンヂー、イングランドを征服す
同	同		一〇七七	グレゴリー七世法王となる
堀河	哲宗		一〇九六	カノッサの屈辱
同	同		一〇九九	第一十字軍發す(—一〇九九)
近衞	南宋高宗	十二世紀	一一四七	イエルサレム王國建設
同	同		一一五四	第二十字軍發す(—一一四九)
後鳥羽	孝宗		一一八七	イングランド、プランタジェネット朝始まる
同	同		一一八九	イエルサレム王國滅亡
順德	寧宗		一一一五	第三十字軍發す(—一一九二)
四條	理宗	十三世紀	一二四一	大憲章(マグナカルタ)發布
後深草	同		一二五〇	リーグニッツの戰。ハンザ同盟成る
龜山	度宗		一二六五	ドイツに大空位時代始まる(—一二七三)
後見	元世祖		一二八八	イングランド國會下院の起り
同	仁宗		一三一五	オスマン=トルコの建國
花園	武宗		一三〇九	法王アヴィニヨンに幽囚さる(—一三七六)
後醍醐	順宗	十四世紀	一三三七	モルガルテンの戰
後村上	同		一三四六	百年戰役起る(—一四五三)
同	同		一三五六	クレシーの戰
慶	明太祖		一三七八	ポアチエーの戰。黃金文書の發布
長	同		一三八六	ウィクリフ宗教改革を唱ふ
後小松	惠帝		一四〇二	センパハの戰
同	成祖	十五世紀	一四一二	アンゴラの戰
後花園	宣宗		一四二九	フス宗教改革を唱ふ
同	英宗		一四三八	ジャンヌ=ダルク、オルレヤン城の圍を解く
同	景宗		一四五三	活字活版術の發明
				東ローマ帝國の滅亡。百年戰役の終結

後魏東西に分る
三年前佛教日本に傳はる
一年前、厩戸皇子薨ず
後四年大化改新の詔宣せらる
翌年坂上田村麿蝦夷を平ぐ
二年後、唐諸外教を禁ず
四年後、遣唐使を停む
四年前、古今集成る
三年後、三善清行封事を上る
三年後、澶淵の盟
翌年西夏建國す
契丹國號を遼と改む
此頃宋の新法・舊法兩黨相爭ふ
三年前、源頼朝幕府を創立す
源義經殺さる、奥羽平定す
北條時政卒す
蒙古の太宗歿す
北條時頼執權時代
北條時宗連署となる
弘安の役、後七年
延曆寺の僧徒入京强訴す
翌年北條高時執權となる
金崎城陷落。湊川の戰の翌年
二年後、四條畷の戰
二年前、懐良親王明と好を通ず
足利義滿邊民の明を侵すを禁ず。翌年明の成祖卽位す
一年前足利義教將軍となる
二年後、永享の亂
九年前、足利義政將軍となる。四年前、明に土木の變あり

東ローマ帝國の滅亡

戰に敗れたが、彼の死後再び盛となり、頻りに東ローマを侵してバルカン半島に威力を展べ、遂に一四五三年トルコ帝マホメット二世は大軍を以てコンスタンチノープルを陷れ、東ローマ帝國はここに全く滅亡した。これよりトルコの勢は愈〻盛に、三大陸に跨る大帝國となりマホメット教の雄邦として、ヨーロッパ諸國を恐れしめた。

圖解 マホメット二世　マホメット二世のコンスタンチノープルを攻めた時、口徑三呎これを運ぶに牛六十頭を用ふる大砲を使用したといはれる

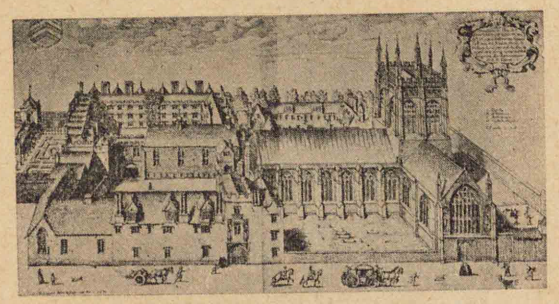


圖解 コンスタンチノープルのセントソフィヤ寺。もとコンスタンチン大帝の創立ユスチニヤヌス帝これを改修。トルコのこれを奪つた時、今見るやうな回教寺院となつた

東ローマの亡んだ時、ロシヤのモスコー太公イヴァン三世は、皇帝コンスタンチヌス十三世の皇姪を娶つて、東ローマの繼承者であると自任し、後頻りにギリシヤ文化を輸入して國力を進め、蒙古の支配を離れ、その孫イヴァン四世に至つて遂に帝號を稱した

Moscow
Ivan III.
Balkan

ロシヤのギリシヤ文化輸入



圖解　中古のオックスフォード大學　ザルツマン「中世の英國生活」より採收

第三編　近世史（十五世紀頃より十八世紀に至る）

第一章　新機運の世界

㈠文藝復興と新發明

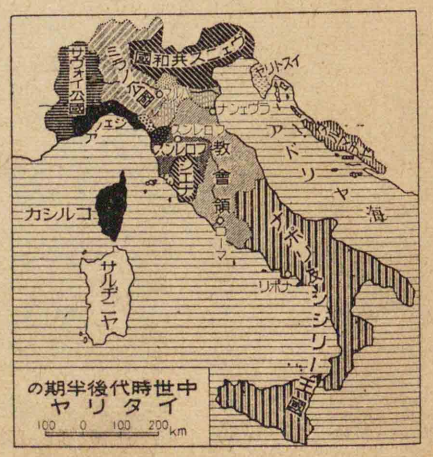
㈠復興氣運の動き　中世の大半には凡ゆるものが宗教の束縛を受け、學問の研究も自由で無く、從つて人智の開發も遲れたのであるが、十字軍以來東西の交通が盛となつて、西歐諸國民の見聞が廣まり、諸國に勃興せる大學は好學の精神を煽り、加ふるに東ローマの滅亡前後、彼の地の學者の古典を抱いて難をイタリヤに避くるものが多く、文藝復興（Renaissance）の氣運はまづイタリヤに動いた。

㈡古學の復興　かくて十三・四世紀以來、富强を

誇るイタリヤの各市には宗教の束縛を離れて、極めて自由に、ギリシヤ・ローマ等の古典を研究する風が盛になり、いはゆる人文主義（Humanism）の風潮を呼び醒まし、先づ詩聖ダンテ（Dante）を始めとしてペトラルカ（Petrarca）・ボッカチオ（Boccaccio）等の人々が現れ出で、かかる傾向を唱道して清新の氣を漲らすに至つた。

人文主義の巨擘

圖解　イタリヤ、フロレンスなるサンタクローチェ寺院にあるダンテの記念碑、誌に云ふ、「詩聖に光榮あれ、先人によつて三度企てられて果さなかつた名譽の墓は一八二九年幸にも建てられた。因にダンテの眞の墓はラヴェンナにある」

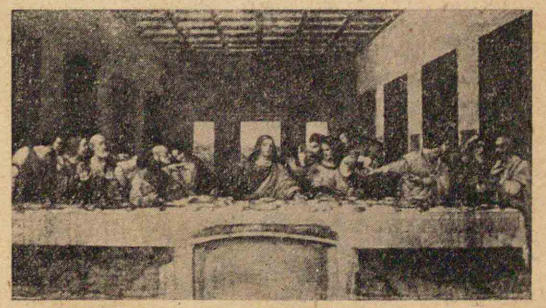


やがてこの風潮はドイツ・フランス・イギリスの各國にも及び、數多の人才を輩出させて學問の進歩を促し、信仰の力を削ぐことになつた。

㈢藝術の發展　中世の建築・繪畫・彫刻等藝術の方面に於ては、宗教的精神の束

『聖母のオニリヴフ』筆ルエァラ

圖解 ラファエル自畫像（フロレンス、ウフィジピッチ畫廊）



圖解 ダ＝ヴィンチ筆最後の晩餐 イタリヤ、ミラノ、聖マリヤ寺院内の壁畫

圖解 ルネッサンス建築 フロレンスのパラツォ＝ベッキオ

縛を離れることが出來なかつたが、人文主義の流行は自づとこの方面にも革新を促し、從來の様式を離れて眞美の表現につとめ、清新自由の氣を發揚することとなつた。繪畫のレオナルド＝ダ＝ヴィンチ・ラファエル＝サンチ、Raphael Santi 彫刻のミケランジェロ、Michelangelo 建築のブラマンテ Bramante の如き、何れもこの時代を飾る有名な大家として知られてゐる。

四 諸種の發明　自由なる學問の研究は自づから諸種の發明を促し、社會生活

ミケランジェロの傑作モーゼ

ラファエル筆「フォリニオの聖母」

（聖母はキリストの母サンタ・マリヤである）（ローマ、ヴァチカン宮繪畫館藏）

ラファエル＝サンチ（一四八三―一五二〇）は文藝復興期のイタリヤに於ける畫界の巨匠、法王ユリウス二世の殊遇を受け、幾多の名品大作を世に留めたが、中にも聖母を畫けるものが有名である。蓋しラファエルは天使の如き無邪氣さと、優雅な感情に富んでゐた爲め、母性愛を描くに獨特の才筆を備へてゐた。さてここに掲ぐる「フォリニオの聖母」は一時カピトリノ丘のアラ＝コエリの祭壇に飾られ後にフォリニオに移されたのを以てこの名がある。天の幻影卽ち天使の波に取卷かれた赫灼たる光の中、雲の座に聖母が立ち、膝に子たるキリストを抱いてゐる。母子共に慈愛と同情の眼に充ちみちてゐる。雲下の前面向つて左端に立つは使徒ヨハネであり、左手に十字架を捧げ右手に雲上の聖母子を指してゐる。その右に地に跪けるは聖僧フランシス、天を仰いで敬信の意を表してゐる。右端を見れば跪く法王の侍從を擁して、信心の眼を聖母に注げる聖ヒイロニムスが立つてゐる。そして聖母子の直下、空を仰いで立つ一天使が兩手に奉納額を支へてゐる。しかも雲際浮動の間、聖母子の態樣に一脈の動の氣の漲るは、常に靜の聖母子のみを描けるラファエルとしては特例である。

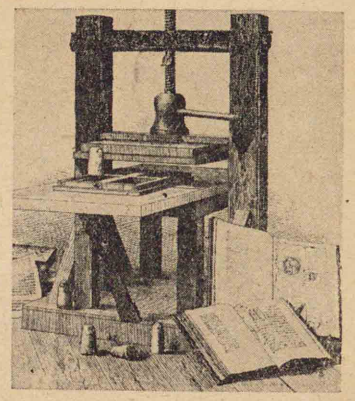
ミケランジェロの傑作モーゼ

ミケランジェロ(一四七五—一五六四)はイタリヤ文藝復興期に現はれた彫刻の大家、しかも繪畫に長じ、詩人であり、建築家でもあつた。彫刻の傑作として後世に傳はれるものも中々多いが、このモーゼの大理石像も稀世の逸品として知られてゐる。この像はローマ、ヴィンコリの聖ピエトロ寺院の、法王ユリウス二世の墳墓の前に立てられたものであつて、几に倚るモーゼは右手に法典を支へ、左手に長髯を撫して前面を睥睨し、斷乎たる意志の力を表明して、ユリウス二世その人の人格を理想化したものであると言はれてゐる。

Michaelangelo
Moses
S. Pietro in Vincoli
Julius II.

三大發明
(活版術・火藥・磁針盤)

圖解 グーテンベルヒの印刷機具(ドイツ、マインツ、グーテンベルヒ博物館藏)



圖解 グーテンベルヒ印刷所 右端の人物はグーテンベルヒ。(ドイツ、マインツ、グーテンベルヒ博物館藏)

重の書物を極めて廉價に普及せしめることになり、社會文化の發展に貢獻することが少くなかつた。次に火藥は十四世紀の中頃に發明され、火器に應用されて戰術の變化を促し封建制度の崩壞に大なる關係を有することになつた。更に磁針盤の使用は航海の發達を助け、新大陸や新航路の發見に大なる便を向上させ、中に活版術・磁針盤及び火藥の發明は、政治上・社會上・經濟上著大な影響を與ふるに至つた。活版術は十五世紀中頃、ドイツ人グーテンベルヒの金屬活字を發明せしことに始まり、さきに東方から傳來せる製紙法の流行と相俟つて、貴

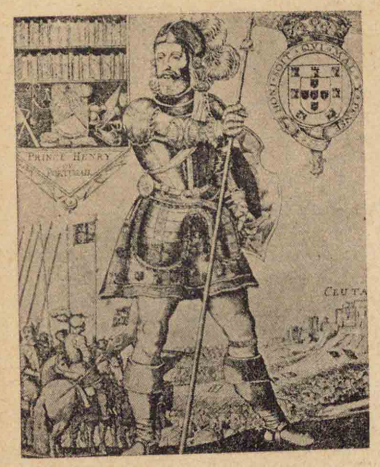
Gutenberg

宜を與へた。

第二章　新機運の世界(二)新航路・新大陸の發見

(一)新航路の發見　十字軍が起つて後、東西の交通が盛となり、更に蒙古の領土が西に展び、しかも道路の安全の加はつた爲、西歐人にして東方に至るものが頻繁となり、中にもヴェニス人マルコ=ポーロ(Marco Polo)の如きは、元に至つて樞要の任を奉じ本國に還つて旅行記を著はし、大に東洋の富有を說いて西歐人の遠征心をそそつた。然るにオスマン=トルコは東方への商路を抑へて、彼我の通商を妨げたから、意氣壯んなるポルトガル人の如きは、新に航路を發見して東方に通ぜんと考ふるに至つた。十五世紀の初めポ

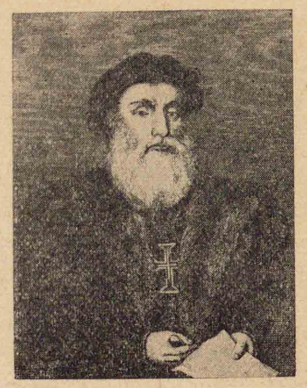
西歐人にして東洋を紹介せる有名なる人を考察せよ。
マルコ=ポーロ



圖解　ヘンリー航海王
探檢に先だち北アフリカ、セウタ Ceuta の異教徒を降した當時の武裝姿。葡人の探檢に異教征服の意義をも含んだことがわかる

ルトガルの王子ヘンリー航海王は、磁針を利用して屢〻アフリカ西南海岸を探檢し、バーソロミュー=ヂヤズ(Bartholomew Diaz)は一四八六年、アフリカの南端喜望峯(Cape of Good Hope)に達し、有名なるヴァスコ=ダ=ガマ(Vasco da Gama)は一四九八年、遂に喜望峯を廻つてインドのカリカット(Calicut)に至り、インド航路は初めてここに開かれた。

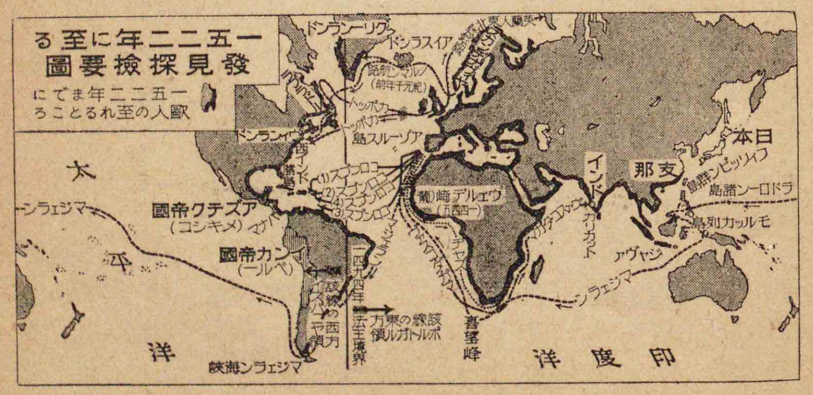
ヘンリー航海王

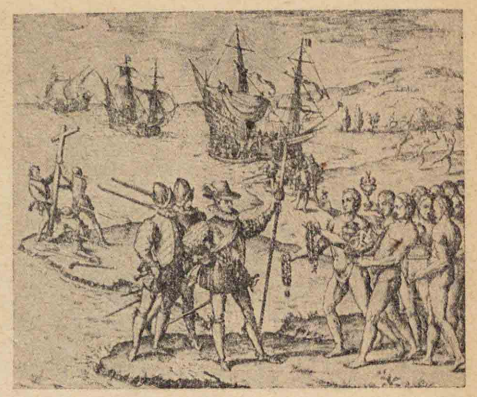


圖解　ヴァスコ=ダ=ガマ
インド航海にガマの用ひた旗艦サン=ガブリエル(San Gabriel)は僅に百二十噸に過ぎなかつたと言はれてゐる

(二)新大陸の發見　この頃ジェノアの人コロンブス(Columbus)は、地球球形の理により、大西洋を西航せば、必ずインドに達するものと信じ、遂にイスパニヤ王后イサベラの援助を得、一四九二

新航路の發見





コロンブスの新大陸發見（我が國では足利時代末期の爭亂時代）

圖解　コロンブス、サン＝サルヴァドル上陸　一四九二年十月十二日コロンブス、綠十字を描ける旗を捧げ一行を連れて上陸す。一行は土人にガラス玉の頸飾等を與へしに、彼等は大に喜び、弓矢とか鸚鵡とか珍らしきものを持ち來つて一行に與へた

年大西洋を横斷して、圖らずも今の西インド諸島の一、サン＝サルヴァドル（San Salvador）島に達した。コロンブスはその後、引續いて西インド及び中・南アメリカの探檢に從事し、新大陸の有樣が次第に明かになつたが、十六世紀の初めフロレンス（Florence）人アメリゴ＝ヴェスプッチ（Amerigo Vespucci）が、詳しく南アメリカ方面を取り調べてから、彼の名に因んで新大陸をアメリカと呼ぶやうになつた。

㊂世界の一周　これよりポルトガル・イスパニヤ兩國人は夫々東西に分れて、商路を擴張するに努め、ポルトガルの人マジェラン（Magellan）はイスパニヤ王の命により、一五一九年南アメリカの南端を航して太平洋に出で、遂にフィリッピン（Philippine）群島を發見したが、不幸にして土人に殺され、彼の部下がその船を以てアフリカを廻り、出發以來四年にして本國に

世界一周の始め

圖解　コルテスの記念牌　周圍の銘はラテン文で「ドン＝フェルヂナンド＝コルテス一五二九年四十二歳の時」とある。卽ちメキシコ征服後十年の作たることがわかる

イスパニヤ人の新大陸經營

ポルトガル人の日本渡來

歸り、ここに始めて世界一周の業を終へた。

㊃ポルトガル・イスパニヤ兩國民の活動　コロンブスが新大陸を發見してより、イスパニヤは西インド及びアメリカ方面の植民に從事し、第十六世紀の前半コルテス（Cortes）はメキシコ（Mexico）を占領し、ピザロ（Pizarro）はペルー（Peru）を征服し、盛に鑛山を掘つてその富を殖やし、東洋方面にも力を注いだ。一方またポルトガル人も新航路發見の勢に乘じて、インドに植民地を開き、更に支那に至つてマカオ（Macao）の永代租借權を得、また我が國とも通商を開くに至つた。

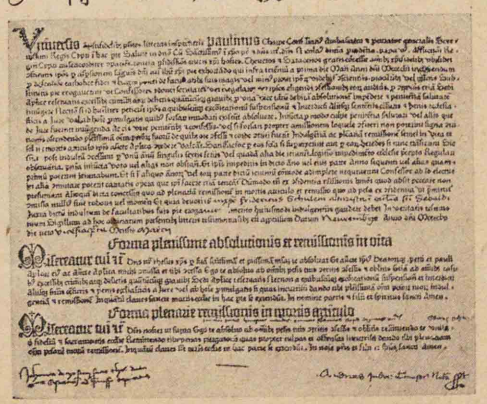
かくて西歐に於ける貿易の中心はイスパニヤ・ポルトガル兩國に移り、十字軍以來盛となつたヴェニス・ジェノアの通商權は忽ち衰へ、インドの香料、新大陸の金銀が、自づからイスパニヤ・ポルトガルの富を世界に冠たらしめるやうになつた。

第三章　新機運の世界(三)宗教改革とその影響(上)

㊀宗教改革の起り

中世の末、ローマ教の腐敗を攻撃するものが現はれたが、機の熟しなかつたため、何れも失敗に終つた。しかも文藝復興に依つて人智の高められた結果、教會改革の氣運が次第に盛となつた。偶〻十六世紀の初め、法王レオ十世が、聖ペートル寺の改築費を得るを名として、免罪符(Indulgence)をドイツ各地に賣らせたが、その弊害少くないので、サクソニヤ(Saxony)、ウィッテンベルヒ(Wittenberg)の神學教授マルチン＝ルーテル(Martin Luther)は、一五一七年憤然免罪符賣買の非理を攻撃し、ために法王から破門の宣告を受けたが、ルーテルは破門狀を焼いて斷然反抗の態度を示し、宗教改革の爭はここに起つた。

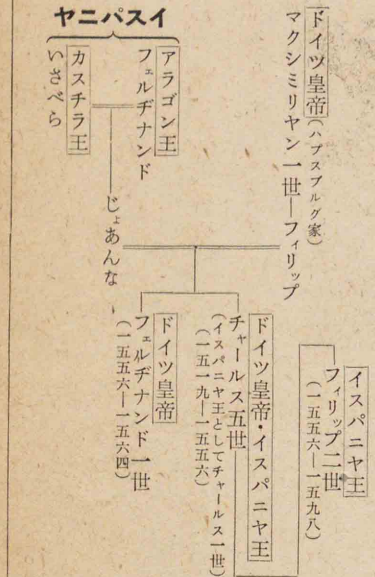
圖解　クラナハ筆マルチン＝ルーテル（シウェリン博物館藏）銘ラテン文「六十三歲の時。」とあれば老年の時代のルーテルを見ることが出來る

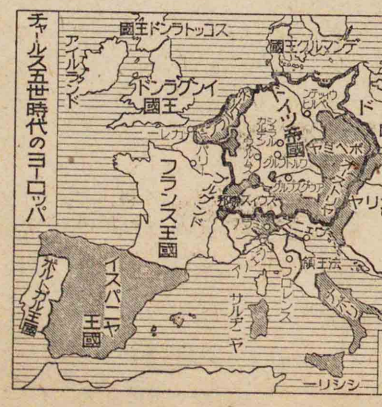


圖解　免罪符　一四五五年グーテンベルヒの活字を以て印刷したもの、全部ラテン文から成る免罪符の賣買

㊁チャールス五世の壓迫とルーテル

十三世紀の末以來、オーストリヤのハプスブルグ家は、概ね神聖ローマ皇帝に選ばれて、その勢頗る盛になり、チャールス五世に至つては、血緣の關係より、ドイツ皇帝であつてイスパニヤ王を兼



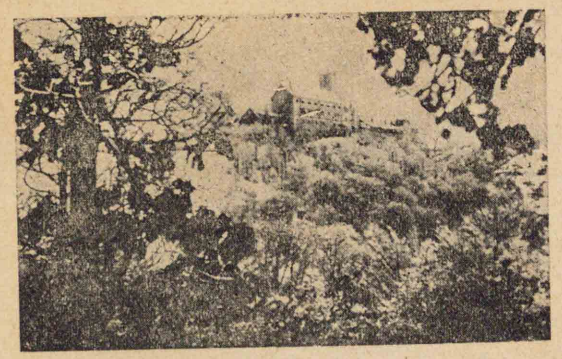


チャールス五世帝の勢力

ウォルムス國會

ワルトブルグ潛伏

ね、廣大なる領土を有して威勢ヨーロッパに並ぶもの無かつたが、フランスに對抗する必要上、法王の意を迎ふるを有利と考へ、一五二一年ルーテルをウォルムス(Worms)の國會に招いて、その說を改めさせようとした。しかもルーテルは從はなかつたので、帝は彼に對する法律の保護を止めた。これよりルーテルの身は甚しく危險となつたが、幸ひサクソニヤ公フレデリック(Frederick)の保護を受け、ワルトブルグ(Wartburg)の城內に隱れて、新約全書をドイツ語に飜譯し、己(オノ)が信仰の普及に便利を與へた。



圖解　ワルトブルグ全景　山上の建物の中にルーテル潛伏の間あり。そこに聖書獨譯の際彼の用ひたといふ木製の机がある

㊂ 新教の弘布とアウグスブルグの和議

この頃チャールス五世は、フランス王フランシス一世(Francis I.)とイタリヤに戰ひ國內ではルーテル派と相爭うたが、オーストリヤに侵入せるトルコの勢

ミュールベルヒの戰場に於けるチャールス五世

チチアン筆ミュールベルヒの戰場に於けるチャールス五世

（イスパニヤ、マドリード、プラド Prado 繪畫館藏）

一身にしてオーストリヤ・イスパニヤ・ネーデルランド・シシリー・ナポリ將た新大陸の諸領土を統治し、しかも帶ぶるに神聖ローマ皇帝の帝冠を以てせるチャールス五世皇帝、一五一九―一五五六）こそ實に歐洲の大半に君臨し凡ゆる幸福を併有せる一代の果報者とも言はれよう。出でては屢〻イタリヤ方面に武を用ひてフランス王フランシス一世と覇を爭ひ、入りてはドイツ國内に新教徒を壓して、舊教の擁護に全力を傾倒した。しかも晩年事漸く志に違ひ、イスパニヤのサン＝ユストの僧院に退隱して、一五五八年寂しくもこの世を去つたものである。

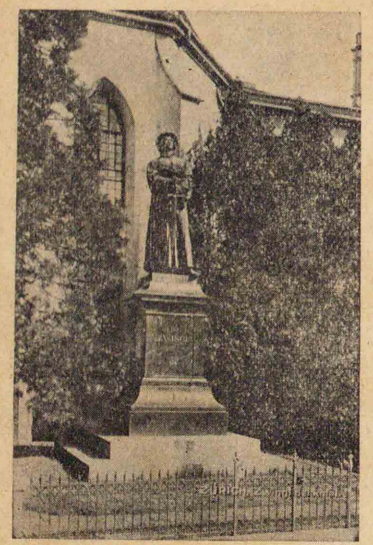
圖はチチアン Titian の名筆、一五四七年帝親ら軍を率ゐてサクソニヤのミュールベルヒ Mühlberg に進擊し、一舉新教軍を打破れる折の颯爽たる武者振を現はしてゐる。チチアンはイタリヤ、ヴェニス派の巨匠チャールス五世の恩遇を受くること深く、帝はチチアンならでは他の如何なる畫家にも自己の肖像を描かせなかつたと言はれてゐる。實にチチアンは帝のありしが如き容貌を描きしに止まらず、帝の描かれんと欲した如く描いたので、始終帝の恩顧を蒙ることが出來たのである。

斷乎たる決意と傲然たる自尊心のうち一抹の寂しさの漂ふものあるは、廣大なる領土の統治に惱む皇帝の苦心の程を表出せるものにて、チチアンならでは容易に描き出すことが出來なかつたところであると言はれてゐる。

シュマルカルデン同盟

アウグスブルグ講和

力に當るため、先づルーテル派との爭を止めたので、ドイツに於ける同派の勢は益〻盛になり、次第に着實なる教會組織を定め、新教の根柢を固むるに至つた。一五三〇年帝はアウグスブルグ Augusburg に國會を開いて、新舊兩教の爭を調和させようと計つたが成功せず、やがて新教徒は自衞の必要からシュマルカルデン Schmalkaldic League 同盟を組織し、舊教徒に當つた。そこで帝は新教壓迫の計畫を捨て、一五五五年アウグスブルグの和議を結んで、諸侯及び都市に信教選擇の自由を與へ、改革の紛爭漸く止むことになつた。



圖解 ウルリヒ＝ツウィングリ銅像 スウィス、チューリヒ、ワッサー寺院の前庭に立つてゐる

ツウィングリの信仰

四 ツウィングリ・カルヴィンの二大派

ルーテルの宗教改革を唱へた翌年、スウィスにウルリヒ＝ツウィングリ Ulrich Zwingli が出で、免罪符を賣買するの不當なるを責め、聖書によつてのみ眞の信仰を

ジョン＝カルヴィンの新説

圖解カルヴィン（一五〇九―六四年）フランスのピカルヂー（Picardy）の人

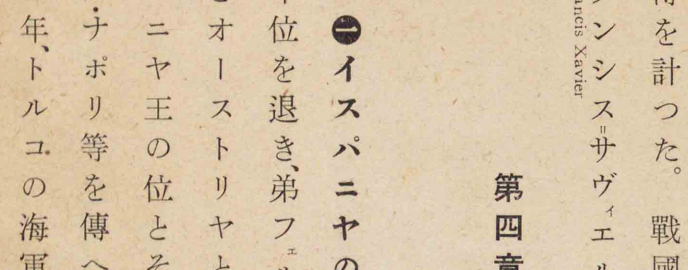
得べきことを說き、遂に舊教徒との戰に敗れて死んだが、その敎は亡ぶることがなかつた。やがてフランスにジョン＝カルヴィン（John Calvin）が出で、スウィスに入つて新說を述べ、共和組織の寺院制を以て舊敎の弊害を改めようとし、遂にその說が西に廣がつて、フランスのユグノー（Huguenots）、イングランドのピューリタン（Puritanism）等の諸派をひき起すに至つた。

五　耶蘇會の起り　ルーテル・ツウィングリ・カルヴィン諸派の間には互に自說を主張して相和することが無く、しかもその儀式が簡略に過ぎて、民衆の信心を薄からしむやうな弊がある。これに乘じて舊敎の敎義に立脚し、その更生を計つたのが耶蘇會（Society of Jesus）である。初め一五四〇年イスパニヤの

耶蘇會の起り

圖解サヴィエルミシェルの「聖フランシス＝ザヴィエル傳」より採收

人イグナチウス＝ロヨラ（Ignatius Loyola）は、同志を集めてこの宗派を造り、軍隊的規律によつて法王に絕對服從を誓ひ、熱烈な殉敎精神によつて海外に宣傳を計つた。戰國時代我が國に天主敎を傳へたフランシス＝サヴィエル（Francis Xavier）は、耶蘇會の有名な傳道師である。

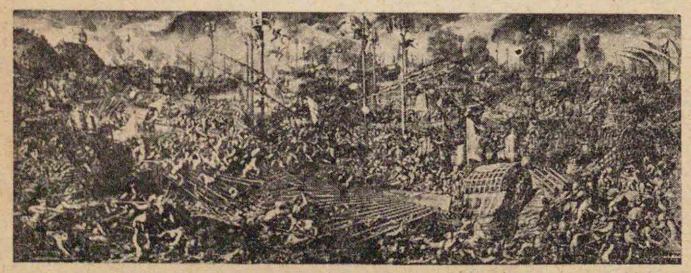


フランシス＝サヴィエル

第四章　新機運の世界(四)

宗教改革とその影響(下)

一　イスパニヤの强盛　チャールス五世は一五五六年位を退き、弟フェルヂナンド一世にドイツ皇帝の位とオーストリヤとを與へ、長子フィリップ二世にはイスパニヤ王の位とその領土並にネーデルランド（Netherlands）・ミラノ（Milan）・ナポリ等を傳へた。やがてフィリップ二世は一五七一年、トルコの海軍をレパント（Lepanto）に破つて地中海の海



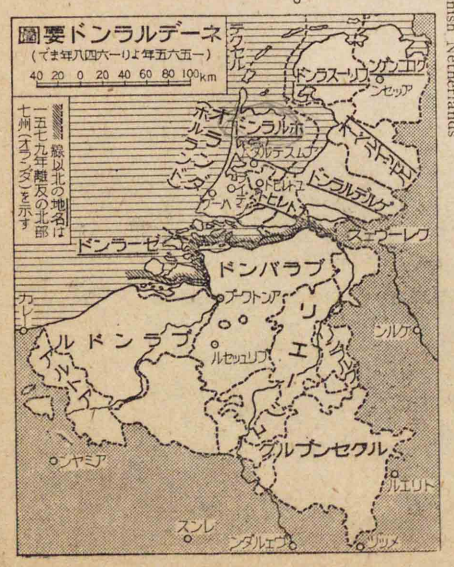
圖解レパント海戰の光景（ヴェニス總督館藏）敵味方の戰艦相接して陸戰の如き觀を呈してゐる

フィリップ二世の全盛

フィリップ二世の新教壓迫

權を制し、一五八〇年ポルトガル王家に男統絶ゆるや、母の縁故によつてその王位を兼ね、ためにヨーロッパに於ける領土の外、東はインド、西はアメリカに至るの間に廣大な植民地を有し、ドイツのハプスブルグ王家と力を併せて新教の壓迫、舊教の復興に全力を用ふることになつた。

㈡ オランダの獨立　イスパニヤ領ネーデルランド Spanish Netherlands はもと十七州から成り、各州は種々なる特權を許されて商工業が發展し、人民の多數はカルヴィン派の新教を奉じてゐた。しかるにフィリップ二世はこれら各州の特權を奪ひ、且つ新教の嚴禁を計つたので、一五七二年諸州の人民憤慨して、反を計り、オレンジ公 Orange ウィリヤ



圖解　一五七四年イスパニヤ軍、オランダのライデンを圍み、市内食盡き一民市長に迫つて、開城を求む。市長劍を市民に與へ、まづ己を刺して後降らんことを命ず。市民感憤して起ち遂に勝つ、圖はこの時の光景を描く（ライデン市立博物館藏）

オランダの獨立宣言

オランダの海外貿易

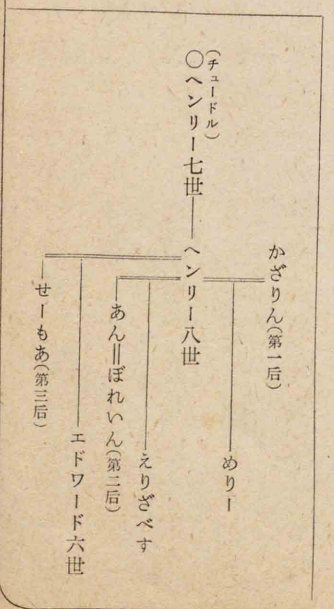
ムを仰いで總督とし、イングランドの援を仰いで勢大いに盛となつた。そこでイスパニヤは兵力を用ひてこれが鎭定につとめ、舊教徒の多い南部諸州は幸に歸順させることが出來たが、北部七州は聯合して、一五八一年獨立を宣言し、ウィリヤムをあげて世襲の統領となし、頻りにイスパニヤと戰つて獨立の實をあげ、十七世紀に至つてネーデルランド共和國 United Netherlands 即ちオランダ Holland と稱した。これからオランダは盛に海外貿易に力めて東洋に勢を張り、我が國とも通商を開いてイスパニヤ・ポルトガル兩國民を驅逐し、德川時代を通じて貿易の利を獨占するに至つた。

㈢ イングランド教會の創立　**エリザベス朝の盛運**　十六世紀の初め、イングランドではチューダル Tudor 王朝のヘンリー八世が位に即き、深

く舊教を信じてルーテルの宗教改革に反對し、ローマ法王に援を與へた。しかるに王は繼嗣なきを理由として王后カザリン(Catharine)を離婚しようとし、法王の許を請うたが、法王はその承認がカザリンの甥ドイツ帝チャールス五世の感情を害するのを惧れて許さなかつた。ここに於て王は法王との縁を絶つて別にイングランド教會を作り、自らその首長となり、遂にカザリンを離別して宮女アン=ボレーン(Anne Boleyn)を娶つた。次いで子エドワード六世(Edward VI.)立ち教義を新教主義に改めたが、その姉メリー(Mary)の立つに及んで舊教を復し法王權を認めた。やがて一五五八年妹エリザベス(Elizabeth)が立ち、またもや新教主義の教義を復して、イングランド教會の確立を見ることとなつた。ここに於て舊教徒はエリザベスの態度を怒つてこれを廢し、別にスコットランド(Scotland)の前女王メリーを迎へて擁立しようと計つたが、エリザベスはすぐメリーを捕へ、これを死刑に處した。イスパニヤ王フィリップ二世はエリザベスのオランダ獨立に援を與ふるを恨んだが、今や同じ舊教徒たるメリーの處刑を聞いて大に怒り、一五八八年有名なる無敵艦隊(Invincible Armada)を遣し、一擧にイングランドを攻め取らうと計つた。しかし英艦隊は奮戰してこれに當り、イスパニヤ艦隊は遠く北海に逃れ、颶風に遭ひて大なる損害を蒙り、イスパニヤの海權は急に衰ふるに至つた。これよりイングランドの國威は大に揚がり、通商航海は頗る進み、東インド(East India Company)

イングランド教會創立

エリザベスの教會確立

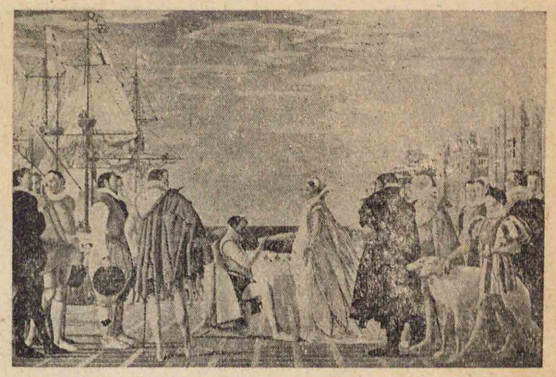


エリザベス女王、メリー女王を殺す

圖解　スコットランド女王メリー(ロンドン國民肖像畫館藏)

無敵艦隊の失敗

圖解　無敵艦隊殲滅の記念牌表(向つて左)中央エリザベスの肖像を刻し、周圍はラテン文にて「世界最上の富をもつものは女王なり」と刻す　裏(右)海島に立つ月桂樹の日光に萎まぬ有樣を描き、ラテン文で「如何なる危險もエリザベス女王を害はぬ」と記してゐる(英國博物館所藏)



圖解　エリザベス女王ローリーのアメリカ行を送る（ロンドン、英國議事堂入口壁畫）

會社が出來て東方インドとの貿易に從事し、サー＝ウォター＝ローリー Sir Walter Raleigh はアメリカに植民地を開いて本國の繁榮を助長し、內には文運頻りに興つて諸文豪が續々と現はれ、いはゆる「エリザベス朝文學 Elizabethan Age」の名を後世に留めた。The Literature of

四　フランスの政敎的內亂

フランスではヴァロア Valois 朝のフランシス一世以來、常にドイツの新敎徒を助けて、ハプスブルグ家に對抗する政策をとつたが、國內では堅く新敎を禁止した。しかしカルヴィン派の信仰は段々盛に、同宗の信徒が相結んでユグノー派と呼ばれた。やがてチャールス九世が幼少にして王位を履み、母后カザリンが政を攝した。カザリンは政敵ギース Guise 公の力を削がんため、殊更新敎徒に自由を許してこれを味方としたが、舊敎徒

圖解　佛王ヘンリー四世及び妃マリヤ（イタリヤ、メヂチ家）記念牌　向つて左（表）王夫妻の姿を表はし、周圍に「基督敎の王ヘンリー四世、マリヤ」（オーガスタ）（佛文）と記し、向つて右（裏）には夫妻結婚の樣を刻し且つ「權力擴大の源」とラテン文にて記す。この結婚により王權のイタリヤ方面に及べることを表はす

セント＝バーソロミューの虐殺

アントの勅令

は法王及びイスパニヤの援助を受け、宗敎上政治上の大爭亂を起した。その後チャールスは母后を斥けて自ら實權を握らうと企て、密に新敎徒を引いて味方としたので、カザリンは急に態度を變じて舊敎徒と結び、一五七二年セント＝バーソロミュー St. Bartholomew の祭日を期して、パリーの新敎徒二千餘人を殺し、地方にも及ぼした。次いでヴァロア王家の正統が絕えて、支流ブルボン Bourbons 家のヘンリー四世が相續し、その新敎徒なるにかかはらず先づ舊敎に改宗して、國內多數の舊敎徒を和らげ、一五九八年ナントの勅令 Edict of Nantes を發して新敎派にも信仰の自由を許し、新舊兩敎徒の政治的同權を認め、更に賢相シュリー Sully を登用して內政の改善を計り、フランスの政敎的內亂が止んでその國家主義は彌々隆盛を極むることとなつた。

五　三十年戰役の經過

ドイツではアウグスブルグの宗敎講和後、

三十年戰役（一六一八―一六四八年）の勃發

デンマルク王クリスチャン四世の來侵

なほ新舊兩教徒の爭が絶えなかつたが、十七世紀の初め、皇帝フェルヂナンド一世の孫フェルヂナンドがボヘミヤ王となり、大いにその地の新教徒を抑壓したので、一六一八年ボヘミヤの人民は王に抗して亂を計り、これより三十年に亘れるヨーロッパの大亂となつた。その後フェルヂナンドはドイツの帝位に上つて、フェルヂナンド二世と稱し、ボヘミヤ人は新教徒たるファルツ伯（Pfalz (Palatinate)）フレデリックを迎へて王としたが、帝は直ちに兵を遣してボヘミヤに侵入し、フレデリックを追ひ、新教徒を平定させた。かくて一六二五年デンマルク王クリスチャン四世（Christian IV.）は新教徒擁護を名とし、オランダ・イングランド兩國から軍費を仰ぎ、自ら兵を率ゐてドイツに攻め込んだが、ドイツの名將ワレンスタイン（Wallenstein）に破られて志を果さなかつた。然る

圖解　ワレンスタイン將軍（一五八三―一六三四年）

グスタフ＝アドルフのドイツ侵入

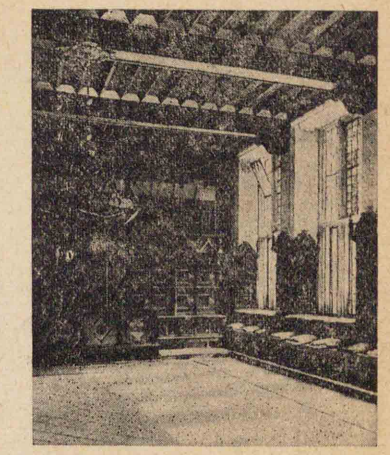
リュッツエンの戰

圖解　スウェーデン王グスタフ＝アドルフ（一六一一―三二年）

圖解　リュッツエンの戰（ストックホルム博物館藏）畫の中央、一方に馬より落ちんとせるは戰死せるグスタフ＝アドルフである

うと計つた。しかもグスタフ＝アドルフは一六三二年、ワレンスタインのドイツ軍とリュッツエン（Lützen）に戰つて戰死し、スウェーデンの勢一時大に衰へたが、ワレンスタインも皇帝諸侯に疑はれて不幸なる死を遂げ、加ふるにフランスは公然スウェーデンと力を併せてドイツに當つたので、ドイツの困苦も一方ならず、フランにスウェーデン王グスタフ＝アドルフ（Gustav Adolf）はドイツの新教徒を援け、かねてバルト海（Baltic Sea）上に覇權を確立しようと企て、兵を率ゐてドイツを侵し、フランスもまたこれを援けて、共にドイツの勢力を抑へよ

ウェストファリヤ條約



圖解　ミュンスター講和會議場　一六四八年のウェストファリヤ條約はドイツ、ウェストファリヤ州のオスナブリック(Osnabrück)及びミュンスター(Münster)で取結ばれたものであつて、そのミュンスターの會議場は今日の同市、市廳の中に存在し、下の如きものである。周圍の座席は當時諸國全權の座せしところである

三十年戰役の結果

ンスもまた財政の困難に苦しみ、遂に一六四八年、ウェストファリヤ(Westphalia)の條約成り、多年の紛亂漸くここに收まつた。(一)フランスはこの條約で、アルサス(Alsace)の大部とメッツ(Metz)・トール(Toul)・ヴェルダンの地を得、ライン左岸に勢力を張り、(二)スウェーデンはポメラニヤ(Pomerania)の西部を得て、ドイツ帝國議會に出席權を得、(三)スウェーデンとオランダとは獨立を許され、(四)ドイツの新舊兩教徒は共に同一の權利を得ることになつた。この戰爭によつてドイツは人口大に減少し、田園は荒れ、商工業は衰退し、爲に帝國の威信は衰へて、統

一の基礎は全く壞れた。

第五章　近代歐洲諸國家の發達(上)

❶イングランド第一革命と共和政治

イングランドでは一六〇三年エリザベス女王が死んで、緣戚なるスチュアート(Stuart)家のジェームス一世(James I.)が王位に上り、スコットランド(Scotland)の王をも兼ねたが、王は王權神授說を執つて專制を行ひ、恣まに租稅を取り立てて屢〻議會と衝突した。その子チャールス一世もまた王權の神聖を唱へて屢〻議會と相爭ひ、遂に一六四二年武力に依つて議會を抑へようと計つたから、ここに八年に亙れる大內亂が起つた。この時議會黨の勇將オリヴァー=クロンウェル(Oliver Cromwell)が出で、精銳なる騎兵を率ゐて王

ジェームス一世の王權神授說

チャールス一世

圖解　チャールス一世　ヴァン=ダイク(van Dyck)筆

黨の軍を破り、王は捕へられ、遂にクロンウェルを首領とする議會黨過激派が、無法にも王の罪を論じて死刑に處し、王政を廢し、共和政治を布いた。（一六四九年）所謂イングランド第一革命である。臣として君を弑する天理に悖つた行動は、わが國史上にこれを認むるべくも無く、君臣の分、嚴として備はり、兩者の關係父子のそれの如き巍然たるわが國體にこれを比すれば、眞に雲泥の相違である。

共和政治の出現

わが國體との比較

かくてクロンウェルは共和政府の長官となり、武斷政治を以て國內を治め、いはゆるピューリタンの主義によつて奢侈を禁じ弊風を正し、更に航海條例（Navigation Act）を出してオランダの海權を妨げ、またフランスと相結んでイスパニヤを伐ち、ジャマイカ島（Jamaica）を取つて國威を揚げた。しかも彼の政治はあまりに峻嚴であつたので、却て國民の怨を招き、彼の死後、一六六〇年チャー

航海條例

圖解　クロンウェル（ピーター＝レリー（Peter Lely）筆。フロレンス、ピチー繪畫館藏）英國の海權確立のもとづくところ如何

「女子の世ースルーッチ王英」筆クイヴ＝シィヴ
（母世三ムヤリイウ、妻の世二ムヤリイウ、ダンラオ）ーリメリと左てつ向
〔シア、スペザリェ（世二）スルーッチ（世二）スムーェジ

ヴァン＝ダイク筆英王チャールス一世の子女（ロンドン肖像繪畫館藏）

バロック式文化の盛時、フランドル派の巨匠としてオランダに出たヴァン＝ダイク（Van Dyck）（一五九九―一六四一）は實に肖像畫家として一代の盛名を縱ままにした。夙に英王チャールス一世に招かれて宮廷畫家となり或は王チャールス一世また時にその子女を描いた。ここに掲ぐるは則ちその一である。畫中のチャールスは後にチャールス二世として王政復古の大業をなしたが、施政徒らに反動に傾いて民望を失ひ、同じく畫中のジェームスはジェームス二世として王位を履んだものの、施政また宜きを得ずして國民の恨を買ひ、遂に國外に走るの止むなきに至つた。今この名畫に接して兩英王の幼時を偲べば、轉ろに運命の奇なるに驚かざるを得ぬのである。

ルス一世の子チャールス二世が招かれて王政復古を見ることになつた。

二 名譽革命と議會政治の成立　チャールス二世とその後を繼いだ弟ジェームス二世（James II）の時代は、國教を守らず、民權を無視し、またフランスに屈して國威を辱しめることもあつたので、議會は擧つてこれを喜ばず一六八八年ジェームス二世の女メリーと、その夫オランダ統領ウィリヤムを迎へ、ここにウィリヤムは議會の決議した「權利宣言」、即ち國民と議會の權利を規定せるものを許容し、よつてイングランドの王位に即いて、ウィリヤム三世と稱した。この革命は流血の慘なく平和の間に行はれたので名譽革命（Glorious Revolution）と呼ばれる。

圖解　ウィリヤム三世騎馬像（英國ハムトン＝コート離宮藏）

名譽革命（一六八八年）（わが將軍綱吉の頃）

ウィリヤム三世は外、勢力平均（Balance of power）の主義によりヨーロッパの諸國と結び、

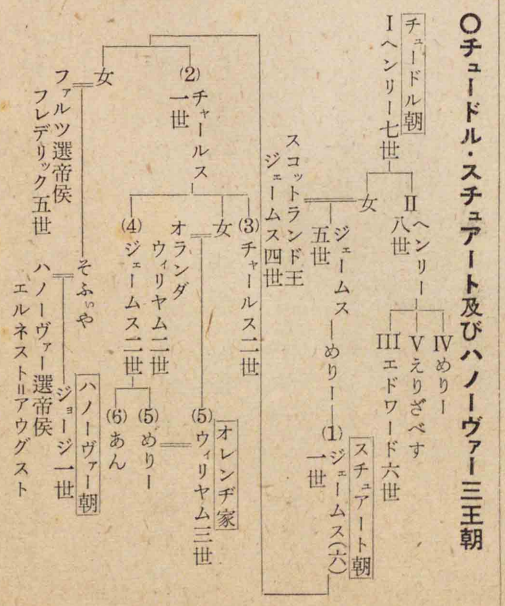
政黨內閣の起り

大ブリテン王國の成立

ハノーヴァー王朝

フランス王ルイ十四世の強大を抑へ、內、議會に勢あるトーリー・ホイッグ兩政黨の何れかに政權を執らせる、政黨內閣の端を開いた。やがて女王アンが卽位し、從來イングランド・スコットランド兩國が共同王を仰ぐに拘はらず、その議會の別なりし風を改め、一七〇七年兩國の議會を併せ完全な一國を造り、大ブリテン王國（イギリス王國）と稱した。アンの歿後、ジェームス一世の曾孫ハノーヴァー侯ジョージが英國王に迎へられ、ジョージ一世と稱し、現イギリス王室ハノーヴァー朝（一九一七年、ウィンゾル朝と改む）がここに起つた。

○チュードル・スチュアート及びハノーヴァー三王朝



③フランスの發展とルイ十四世

フランスではブルボン朝のヘンリー四世後、その子ル

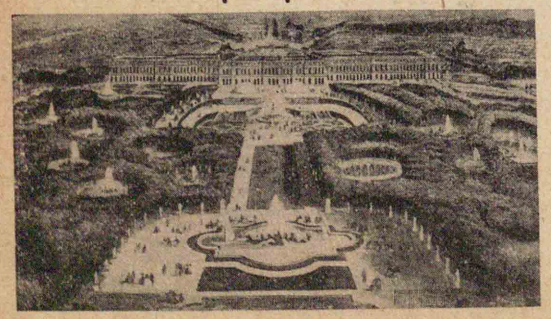
リシュリュー及びマザレン

ルイ十四世の親政時代

ヴェルサイユ宮殿とその後庭

ルイ十四世（ヴェルサイユ博物館藏）

イ十三世並に孫ルイ十四世が相ついで立ち、リシュリュー（Richelieu）はルイ十三世を、マザレン（Mazarin）はルイ十四世をそれぞれ宰相となつて輔佐し、リシュリューは內、貴族の權を抑へて王權を張り、外、三十年戰爭に關係してドイツ皇帝の勢力を抑へ、マザレンは幼主を輔けてウェストファリヤ條約に國威を輝し、フランスをしてよくヨーロッパに優越の地位を得させた。やがてマザレンの死後、ルイ十四世が政を親裁し、「朕は國家なり」（I am the State）の主義によつて着々王權を伸張し、コルベール（Colbert）を財政の局に當らしめ、保護政策によつて產業を興し、國富を增し、ルーボア（Louvois）を軍務の局において軍制を整へ、更にヴェルサイユ（Versailles）に壯麗なる



フランス文學の黄金時代

宮殿を營み、美術の粹を集め、また大に文藝を奬勵したので、有名なる大家が續々出で、いはゆるフランス文學の黄金時代と稱せられた。しかも、ナントの勅令を廢して勤勉の新教徒を國外に追ひ、また屢〻外國と事をかまへて國庫を空しうした結果、次第に國力の衰退を來すやうになつた。

ネーデルランド侵入

ファルツ戰役

四　ルイ十四世の侵略戰　初めルイ十四世は國力の充實するにつれ、領土を擴げてヨーロッパの覇者とならうと志し、先づ王后の關係によつてイスパニヤ領ネーデルランドに兵を出し、オランダが自國の安全を患ひ、諸國に結んでこれを妨ぐるや、再び兵を出してこれを伐ち、更に王弟妃の關係によつてファルツに侵略の軍を出し、何れも勢力平均を主張する列國に妨げられて、その目的を達しなかつた。その後イスパニヤでは王チャールス二世に子がなかつたので、その縁戚たるフランスのルイ十四世の孫フィリップが、遺言によつてイスパニヤの

イスパニヤ繼承戰役（一七〇一―一七一四年）

ユトレヒト條約の要項

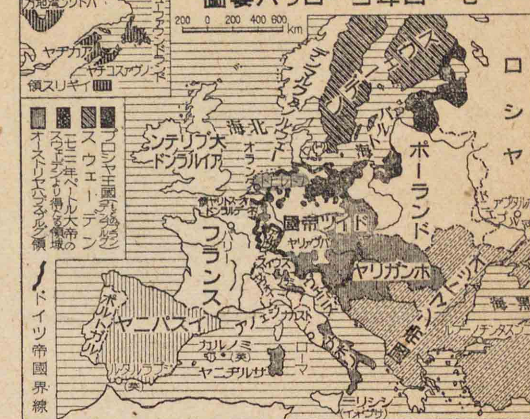
王位を嗣ぎ、フィリップ五世と稱した。（一七〇〇年）しかるにドイツ帝レオポルド一世は、その皇后のイスパニヤに出でたる關係により、次子チャールスをイスパニヤの王位に推し、イギリス王、ウィリヤム三世また勢力平均の主義よりオランダを誘ひ、ドイツを助けてフランス・イスパニヤに當り、ここに十三年に亙れるイスパニヤ繼承戰役となつた。（一七〇一年）やがてイギリスでは、アン女王が立ち、マールボロ公をして兵を率ゐて大陸に渡り、サヴォイ公ユージンと協力してブレンハイム等にフランス軍をうち破らせた。しかもその後イギリスに政變が起つて平和論が盛となり、ドイツでもまた、イスパニヤ王の候補たるチャールスが帝位に卽いて、チャールス六世と稱するに至つたので、ここに俄然融和の氣運が動き初め、一七一三年にはドイツ以外の關係列國間にユトレヒトの和約が

圖解　マールボロ公の記念牌（英國博物館藏）

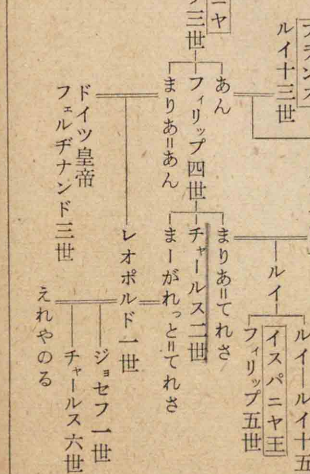
英國の植民地的勢力增進

結ばれ、翌年にはドイツ・フランス間に同じく和議の成立を見ることになつた。これらの和約で、列國はフランス・イスパニヤの合同せぬを條件に、フィリップ五世のイスパニヤ王たるを認め、イギリスはフランスよりハドソン(Hudson)灣地方・ニューファウンドランド(Newfoundland)・アカヂヤ(Acadia)地方、イスパニヤからジブラルタル(Gibraltar)・ミノルカ(Minorca)島を得、以て海上王國たる基を固め、サヴォイは王號を許されシシリーを取り、ブランデンブルグ(Brandenburg)もまた王號を許され、共

一七一四年ヨーロッパ要圖



イスパニヤ繼承戰爭關係系圖



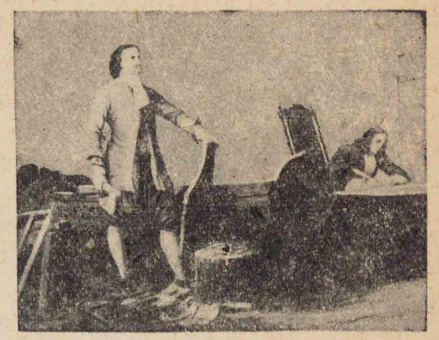
ロマノフ朝の興起

に將來の發展を策することが出來るやうになつた。更にオーストリヤはイスパニヤからネーデルランドとミラノ(Milan)・サルヂニヤ(Sardinia)等の地方を得、後にサルヂニヤをサヴォイに與へてシシリーをとつた。

第六章 近代歐洲諸國家の發達(下)

㈠ロシヤの發展 ロシヤはスラヴ人の國で、約二百年間キプチャック汗國の支配に屬し、蒙古人の壓迫に苦しんでゐたが、その間、モスコー太公國の勢が盛となり、遂に十六世紀の前半イヴァン四世の時始めて皇帝(ツァー Czar)の尊號を稱し、シベリヤ(Siberia)の侵略に着手した。しかるに帝の死後、內亂が起り、十七世紀の前半、ミカエル=ロマノフ(Michael Romanov)なるものが、その亂を鎭めて帝位に上り、ロマノフ王朝がここに起つた。

㈡ペートル大帝の革新と北方戰役 ロマノフの孫ペートル大帝(Peter the Great)が立ちロシヤの國運は急に盛となつた。そもそもロシヤは東方に



ペートル大帝の西歐巡歷

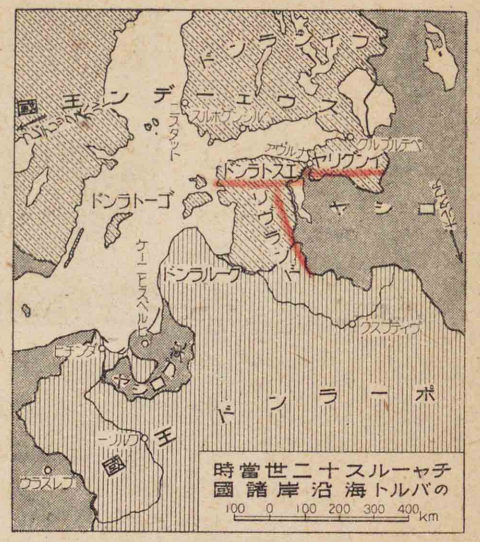
圖解　造船所に於けるペートル大帝　ペートル大帝西歐見學の時、オランダ、ツァーンダム(Zaandam)にゐて造船を學んだ。圖は斧を手にせる帝とその家從（ツァーンダム、ペートル大帝舊宅藏）

偏在して、その國風が粗野であり、なほ西方はスウェーデンに、南はトルコに抑へられて、西歐の文化に親しむことが出來なかつた。そこでペートルは先づトルコを伐つてアゾフ海沿岸の地を攻め取り、後、親しく西ヨーロッパ諸國を巡つて、その文明を目擊し、特にオランダでは一職工として造船術を學び、英・佛等の諸國では制度・文物を視察し、歸國の後陸海軍を整備し、曆法を改め、教育を奬め、交通を開き、更に産業を盛にするに至つた。當時、スウェーデンは北歐の強國であつたが、ペートルはこれを抑へてバルト海上に門戸を開かんと企て、スウェーデン王チャールス十二世の年少きに乘じてポーランド・デンマルク

圖解　スウェーデン王チャールス十二世銅像（ストックホルム王宮前に立つてゐる）

北方戰役（一七〇〇—一七二一年）

ナルヴァの戰



ーランドを侵してその王の廢立を行うた。この間ペートルは漸次スウェーデンの領土を侵して、ネヴァ(Neva)河口の地に新都を營み、これをペテルブルグと名づけ、更に一七〇九年チャールス十二世がロシヤの中心に侵入を計るや、これをポルタヴァ(Poltava)に擊破してトルコの地に敗走させた。やがてチャールスは本國に歸り、ノルウェー(Norway)と戰を開き、不幸、フレデ

と兵を連ね、スウェーデンに戰を挑んだ。チャールス十二世は非凡の勇將であつて、このことを知ると同時に兵を率ゐて、デンマルクに攻め込み、ここに北方戰役が起つた。（一七〇〇年）やがてチャールスはデンマルクを征服して、直に軍を東に轉じ、優勢なるロシヤ軍をナルヴァ(Narva)の一戰に打破り、更にポ

ニスタット條約

圖解　スウェーデンの軍士、チャールス十二世の遺骸を奉じて本國に還る（ストックホルム博物館藏）

リックスハルドの戰に戰死を遂げたので、一七二一年スウェーデンはロシヤとニスタットに於て和を結び、バルト海東岸の地を割讓するに至つた。かくてロシヤはバルト海の制海權を握り、北ヨーロッパに雄飛することになつた。

Frederikshald　Nystad

㊂カザリン二世の雄圖　ペートル大帝の後、六代三十七年を經て、女帝カザリン二世が王位に上り、大帝の遺志をついで內政を刷新し、學術を奬勵し、更に領土を擴げて國威を振はんと企て、既にイヴァン四世以來、迅速に進行し、ペートル大帝時代には清國の北境に迫れる、かのシベリヤ經營をうけ繼ぎ、遠く東方に手を展べて千島の大部を占領し、我が北邊を窺ひ、更

Catharine II.

カザリンの內政外交

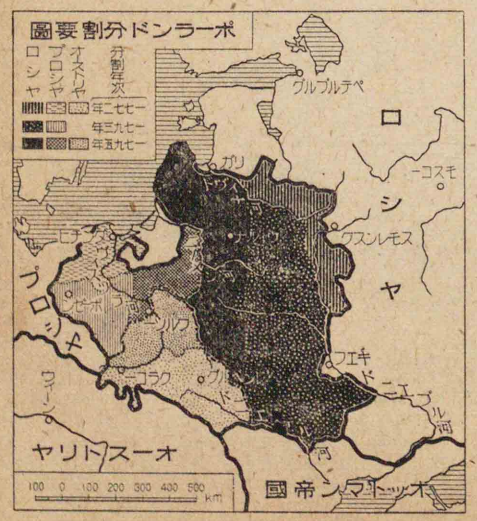
圖解　ロシヤ女帝カザリン二世（一七六二―一七九六年）プロシヤ、ステッチン(Stettin)の貴族の家に生れ、ロシヤ帝ペートル三世の皇后となり、後に自ら卽位し、啓蒙的專制君主として名高い

カザリン女帝のポーランド干涉

第一、第二回ポーランド分割

にトルコと戰つて黑海沿岸を侵略し、進んでポーランドに野心を展べることとなつた。ポーランドは十一世紀に起つたスラヴ民族の國で、いはゆる東歐の强國として、常にその盛大を誇つたが、社會階級間の爭が甚だしく、その上國王の選擧毎に他國の干涉を蒙つて、國勢が衰へ、ロシヤ等列强の侵略するところとなつた。始めロシヤのカザリン二世はその寵臣を擁してポーランドの王位に卽かせ、尙ほポーランドに迫つてその國內のギリシヤ敎徒を保護させようとしたが、同國民はその意に從はなかつたので、斷然武力を用ひて侵入を計り、遂に一七七二年プロシヤ・オーストリヤと計つて、各自國に近きところを割取した。これが第

Poland

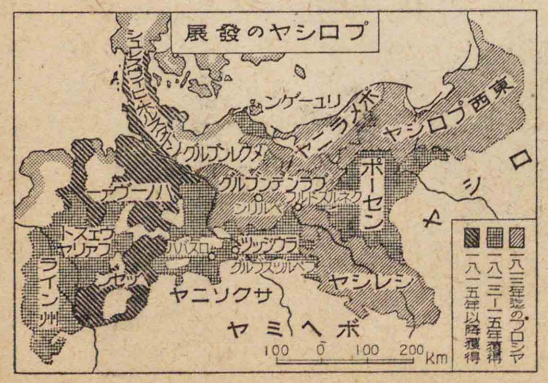


一回ポーランド分割である。やがてポーランド人は悲憤にたへず、恢復のことに努めたが、ロシヤの武力に壓せられ、遂に一七九三年ロシヤはプロシヤ(Prussia)と相計つて第二回ポーランド分割を行つた。ここに於てポーランドの志士コシューシコ(Kosciuszko)等は同志を集めて報復の軍を起したが、事遂に成らず、一七九五年ロシヤ・プロシヤ・オーストリヤの三國が相議し、第三回の分割を行ひ、ポーランドはここに全く滅亡してしまつた。

ポーランド第三回分割

四 プロシヤの起り　プロシヤはバルト海の南岸に位し、もとドイツ騎士團(Order of the Teutonic Knights)の所領であつたが、後、ポーランドに併せられ、十七世紀に至り、ブランデンブルグ(Brandenburg)選擧侯の所領となつた。やがて選擧侯フレデリック三世はイスパ

プロシヤの起源

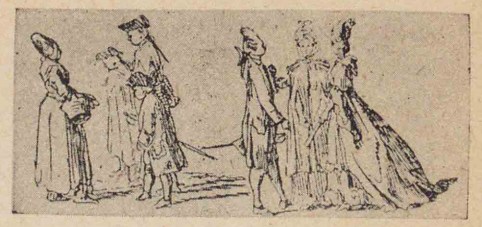


フレデリック一世プロシヤ王と稱す

フレデリック=ウィリヤム一世の治績

圖解十八世紀に於けるプロシヤ上流社會風俗〔コドウィキー(Chodowiecki)筆〕

マリヤ=テレサ女王と女子相續家憲



ニヤ繼承戰役に加はつてドイツ皇帝を援け、功に依つてプロシヤ王フレデリック一世と稱し、ユトレヒト條約(一七〇一年)の際列國の承認を得ることになつた。その子フレデリック=ウィリヤム一世(William)は勤儉にして武を尚び(タット)、産業を奬勵し、行政を改革し、ひたすら國力の充實に努めてプロシヤ勃興の基を固めた。

五 フレデリック大王とオーストリヤ繼承戰役　フレデリック=ウィリヤム一世の子はフレデリック二世(大王)(Frederick)であり、ブロシヤの英主であつて武略に長じ、父の遺(ノコ)せる精兵と富力に依つてプロシヤの地位を列强の間に高めた。さきに一七四〇年ドイツ帝チャールス六世が死んで、その女マリヤ=テレサ(Maria Theresa)は父の殘せる女子相續の家憲に從ひ、ハプスブルグ家の全領土を相續したが、バヴァリヤ(Bavaria)選擧侯チャールス=アルバート(Charles Albert)はハプスブルグ家の末流なるを以て自ら

カンプハウゼン筆フレデリック大王騎馬像

オーストリヤ繼承戰役（一七四〇—四八年）

相續の權ありと主張し、フランス・イスパニヤ等の援を仰いでオーストリヤ繼承戰役（Austrian Succession War）を始めた。開戰に先だち機を見るに敏なるフレデリック大王は、突然兵を出し、オーストリヤ領シレシヤ（Silesia）を占領し、その割讓を迫つた。そこで一方バヴァリヤ等の侵入に苦しむマリヤ＝テレサはシレシヤを割いてプロシヤと和し、力を專らにして聯合軍と戰ひ、交戰すること數年に及んだが、遂に一七四八年、列國アーヘン（Aachen）に會して和を議し、各國互に侵地を還し、マリヤ＝テレサの相續權を認め、プロ

圖解　マリヤ＝テレサ銅像　墺國ウィーン博物館前に立つ。周圍の騎馬像は女王時代の功臣

オーストリヤ繼承戰役關係系圖

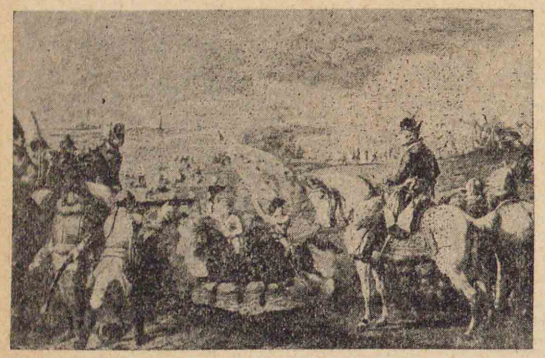
- ドイツ皇帝 フランス王 ルイ十四世
  - イスパニヤ王 ルイ＝フィリップ五世
  - イスパニヤ王 チャールス五世（一世）—フィリップ二世……フィリップ四世—まりや＝てれさ
    - ジョセフ一世—まりや＝あまりや
    - 女
- ドイツ皇帝 フェルヂナンド一世……レオポルド一世
  - バヴァリヤ王 チャールス＝アルバート（ドイツ帝）
    - チャールス六世—まりや＝てれさ
    - ドイツ帝 ジョセフ二世
    - フランシス一世

カンプハウゼン筆フレデリック大王騎馬隊（ベルリン、舊皇城内部裝飾）

ベルリン舊皇城、黑鷲書院の中に、カンプハウゼン筆フレデリック大王騎馬像がある。白馬に跨り梃杖を按ずる老フリッツ、黑雲暗き間意氣颯爽として邊（フラン）を拂ふ。大王は十八世紀のプロシヤに出で啓蒙的文化の政治によつて國内を安んじ、外、國威を全歐に輝かした。ことに七年戰役の艱難に處し、よく堅忍不拔の意氣を振つて永年の苦闘にたへ、いはゆるドイツ精神の支持者としてドイツ民族全般の信頼を博し、後年プロシヤをして民族統一の大業を完成せしむるに至つた。今この畫像に接すれば俊邁の氣（オ）自づと眉宇の間に躍動するを覺ゆるのである。

七年戰役（一七五六―六三年）

圖解　ロスバッハ戰に臨めるフレデリック大王　この戰に大王は僅に二萬の寡兵を以て、墺佛聯合軍六萬を破つた



シヤのシレシヤ領有を確認した。

㊅七年戰役　これよりマリヤ＝テレサは深くプロシヤの不法を惡み、密にロシヤ・フランス・サクソニヤ等と同盟を結び、プロシヤを伐つて、シレシヤを回復しようと計つた。フレデリック大王は早くもこれを悟つて内政を整へ、イギリスと同盟し、一七五六年機先を制してオーストリヤを伐ち、ここに七年戰役（Seven Years' War）が始つた。大王はこの戰にイギリスから軍資を仰ぎ、獨力を以て殆ど全ヨーロッパを相手に戰を續け、ロスバッハ（Rossbach）等に大勝を得たが、クネルスドルフ（Kunersdorf）に敗れてより、勢漸く非に、首府ベルリン（Berlin）も一時敵軍の占領するところとなり、その上イギリスの方針が變つて軍資の支給も絶え、大王は甚だしき窮境に立つた。然るにロシ

ロシヤ國情の變化

圖解一七六二年五月六日普露兩國同盟成立記念メダル。銘「人類の幸福の爲に」

フベルツスブルグ條約の締結

フレデリック大王の內政

ヤの女帝エリザベスが死んでペートル三世が位に卽き、プロシヤに味方して形勢が變はり、オーストリヤは却つて困難に陷つた。かくて列國何れも、戰に疲れて平和に傾き、遂に一七六三年イギリス・フランス間にパリー條約が成り、プロシヤもオーストリヤとフベルツスブルグ條約を結び、プロシヤはマリヤ"テレサの子ヨセフを皇帝に選ぶことを約して、シレシヤ領有を改めて確認された。

㊐フレデリック大王の治績　大王は七年の苦戰に堪へてよくプロシヤの武威を輝かしシレシヤの領有を確實にし、またポーランド分割に加はつて領土を擴げ、更に戰後「國家の第一公僕」(The first servant of the State)と稱して內政の刷新、民生の休養に意を用ひ、法典を造り、產業を奬め、學藝を勵まし、プロシヤの實力を整へて列强の間に伍せしむるに至つた。

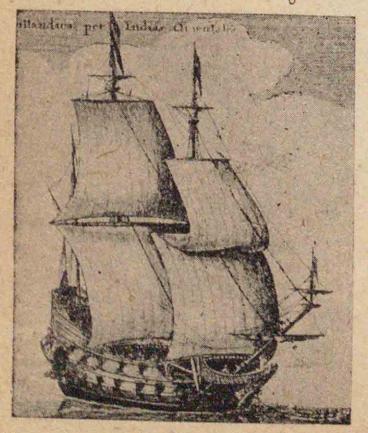
オランダ東インド會社の創立

圖解東洋通ひのオランダ船　僅に二百噸位の帆船

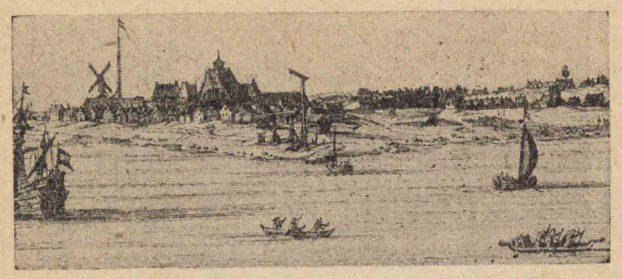
英國東インド會社の創立

第七章　英佛兩國の植民地爭奪

㊀英佛兩國の植民地經營　十七世紀に至つてイスパニヤ・ポルトガルの植民・貿易が大いに衰へ、これに代つてオランダが盛に東洋に活躍した。オランダはその獨立後、新進の勢に乘じて東インド會社を起し、ジャヴァ(Java)のバタヴィヤ(Batavia)を根據地として頻りに東方に力を展べ、(一六〇二年)パニヤ・ポルトガルに代つて、我が國の通商をも獨占した。更にオランダは西インド會社を設けて北米方面にも通商し、有力なる植民地を起すに至つた。しかもオランダは商利にのみ專念して植民地經營の基礎弱く、遂に英佛兩國民の壓倒するところとなつた。イギリスは一六〇〇年東インド會社を建て、フランスもま



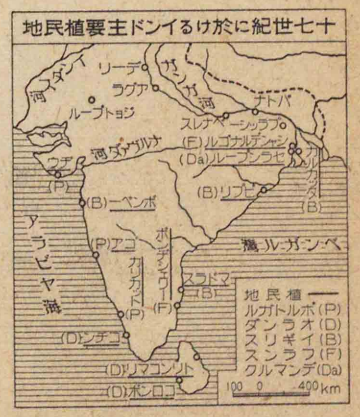
た四年おくれて東インド會社を起し、共にモゴル(Mogul)帝國の衰頽に乘じて着々地歩を獲得し、英人はマドラス(Madras)・カルカッタ(Calcutta)を、佛人はポンディシェリー(Pondicherry)・シャンデルナゴル(Chandernagor)を、それぞれ根據地として勢力の發展を計つた。



英佛兩國のアメリカ經營

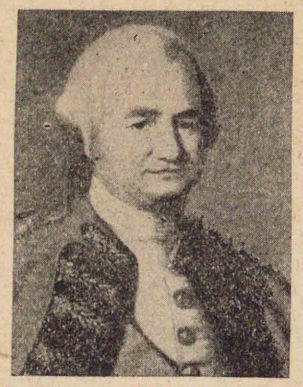
圖解　オランダ植民地當時のニューアムステルダム、卷末に掲げた近代都市ニューヨークの盛況と比較せよ（オランダ、ライデン(Leyden)聖ペートル會堂藏）

更に英佛兩國民はアメリカ方面にも力を用ひ、英はエリザベス女王の時、始めて北アメリカにヴァージニア(Virginia)植民地を開き、更に英國革命の時までにニューイングランド(New England)が出來、なほオランダ植民地のニューアムステルダム(New Amsterdam)を奪つてニューヨーク(New York)と改め、十八世紀の末には北アメリカの東岸一帯は殆どイギリスの所有となつた。　またフランスは十六世紀以來、カナダ(Canada)の



東部に植民し、ルイ十四世時代ミシシッピ(Mississippi)河の流域に廣大なるルイジヤナ(Louisiana)植民地を開いた。

(二)英佛兩國の植民地爭奪戰　かくて英佛の植民地は東西何れも境を接し、英佛兩本國間に爭が起ると共に、忽ち植民地にも波動を及ぼし、戰をひき起すことになつた。　オーストリヤ繼承戰役の際、佛人デュプレックス(Dupleix)はインドに於けるイギリスの勢力を抑へ、七年戰役の折、イギリスは軍資をプロシヤに給してフランスを大陸方面に牽制し、專心、フランス植民地の攻略に當つた。　卽ちインドではイギリス東インド會社にクライヴ(Clive)なる偉人が出で、佛人・土人の聯合軍を寡兵を以てプラッシー(Plassey)に破（一七五七年）り、イギリス領インド帝國(British India)の基を成すに至つた。　アメリカでも亦英軍がケベック(Quebec)を取つて、フランスの勢力をカナダから逐ひのけた。　や



七年戰役當時英佛兩軍のインド爭奪

圖解　クライヴ（一七二五―七四年）性狀、傲岸不屈にして爭を好む。十八歳の時會社の書記としてインドに來り、プラッシーの一戰に名聲を輝かした

がて一七六三年には英佛間にパリー條約が出來、イギリスはフランスからカナダとミシシッピ河以東のフランス領等を得、イスパニヤからフロリダ(Florida)を取り、なほイギリスはポンヂシェリー等をフランスに還し、同時にミシシッピ河以西のフランス領をイスパニヤに與へさせた。かくて植民上に於ける英國の勝利は決定的となり、その後同國は通商貿易上に盛んな活動を演じた。

アメリカに於ける英佛の抗爭

パリー條約の要項

一七五〇年英西佛三國勢力要圖

スリギイ
スンラフ
ヤンバスイ

第八章　アメリカ合衆國の獨立

㊀獨立の因由

北アメリカなるイギリスの植民地はその數十三州に達し、概して政治・宗教上、本國政府の處置に不滿な人々の移住により出來たものであるから、これら植民地は自づから自由獨立の精神が盛であつた。しかるにイギリスは本國の商工業保護の必要から、植民地と他國との直(チキ)取引を禁じ、尚ほジョージ三世(George III.)時代、戰後の財政窮乏を救ふがため、一七六五年、印紙法に依る課稅を定め、また茶・紙等の輸入にも稅金を課することとしたので、植民地の憤激は非常に昂まり、本國議會に代議士を出す權利の無いのを理由に極力課稅に反對し、紛爭の結果遂に戰亂の勃發を見ることとなつた。

アメリカ獨立の原因

茶・紙稅

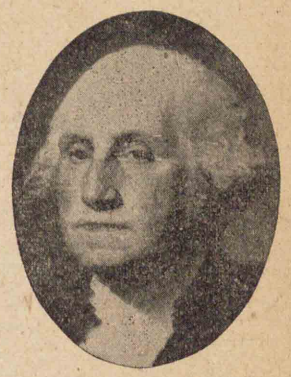
米國獨立要圖

英領カナダ
イスパニヤ領
ルイジヤナ
州ヤージニア
州ナイラロカ
州ヤージジ
フロリダ
領ヤニバスデ
灣コシキメ
州三十言宣立獨
地讓割國英
200 0 200 400 600 km

㊁獨立戰の經過

かくて一七七五年植民地義勇軍とイギリス軍隊との間に戰端が開かれ、翌年、植民地人民はフィラデルフィヤ(Philadelphia)に會合してジョージ・ワシントン(George Washington)を總督に推し、「獨立の宣言」(Declaration of Independence)を發し、ついで十三州

獨立の宣言



圖解ワシントン（一七三二―九九年）

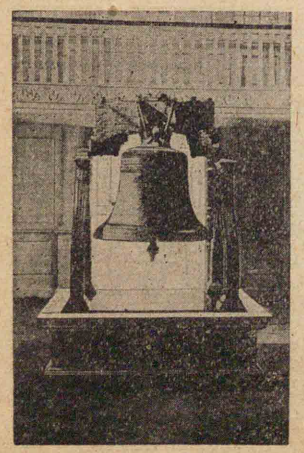
海上武裝中立同盟

英軍屈從

圖解一七七六年獨立の宣言出でフィラデルフィヤの人民狂喜して警鐘を亂打し、鐘裂く。稱して「自由の破れ鐘」といふ、（フィラデルフィヤ市獨立閣藏）

ヴェルサイユ條約

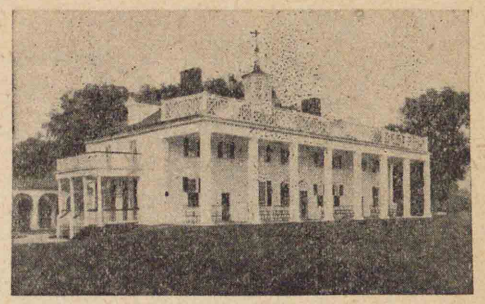
を結んでアメリカ合衆國と稱し、人を大陸諸國に遣して救援を求めしめた。これより列國の同情が大に集まり、フランスのラフイエット、ポーランドのコシーシコの如き各同志を率ゐて來り援け、遂にフランスは公然獨立軍に結んで援兵を送り、イスパニヤもこれに倣ひ、ロシヤもまた海上武裝中立同盟を結んで合衆國に便宜を與へた。加ふるに獨立軍は總督ワシントンの指揮下に、巧妙なる散兵戰を以て英軍を惱まし、一七八一年、同軍の根據地ヨークタウン（Yorktown）を陷れ、イギリス軍遂に屈して一七八三年ヴェルサイユ條約を結んだ。この條約によつて英國は合衆國の獨立を認め、且つミシシッピ河以東の地を割與し、更にフランスにトバゴ島（Tobago）とセネガル（Senegal）を割き、イスパニヤにもフロリダとミノルカ島を還した。



圖解ワシントン晩年功成り名遂げて首府の郊外ヴァーノン丘上に隱栖す。圖は當時の住宅

合衆國の共和組織

ワシントン初代大統領に選ばる



㊂合衆國の政治組織　やがて一七八七年合衆國は新に憲法を定めて聯邦共和政治を立て、任期四年の大統領を選んで、行政の大權を統べさせ、立法府卽ち國會を分つて州代表の元老院と地方代表の代議院とし、司法權は高等法院を置いて總轄させた。更に各州に自治を許し、それぞれ任意の憲法を設けて州内の政務を行はせた。なほワシントンが初代の大統領に選ばれ、首府ワシントンに居り、建國の大業が始めてここに完成し、國運日を逐うて盛となつた。

第九章　近世の文化

諸種の國家思想

啓蒙專制君主

近世國家の集權方針

重商主義

㊁近世的國家思想

中世の末、封建制度が衰へ、王家を中心に權力を集中せんとする傾向が盛となり、近世に至つては君主權の發展に伴ふ專制政治がヨーロッパ各國に行はれた。當時、一面には啓蒙革新の風が大に起り、君主もその影響を受けて人民を恤(アハレ)み制度を改め、封建的勢力たる貴族・僧侶を抑へて、國力を張らんとする風が盛になり、ここにいはゆる啓蒙專制君主(Enlightened Despot)の出現となり、プロシヤのフレデリック大王、ロシヤのカザリン二世の如きその代表的なものである。これより前に、イギリスで議會政治の發達を見たのも、要するに君主に於て貴族・僧侶を抑へ、新興平民の力を利用する必要があつたからである。かくて近世國家に於て中央集權の風が強くなると共に、海外に植民地を營んで土地を殖すに止まらず、產業奬勵・通商發展に依つて金銀貨の集積を計り、國力を固からしめようとする風も盛になり、かかる經濟政策は十七世紀以來重商主義(Mercantilism)の名を以て呼ばれた。この

マキャヴェリの君主論

國際法の祖

シェクスピヤ

圖解　イタリヤ、フロレンスのサンタクローチェ寺内にあるマキャヴェリの墓、墓誌に云ふ、「かかる偉名にふさはしき何等の讃辭も存せぬ。」一五二七年に死んだニコロ・マキャヴェリ

ヤに出で、有名な君主論を著はし、列國對峙の間に君權を强むる方法を述べたマキャヴェリ(Machiavelli)は、外交術の開祖と呼ばれ、十七世紀に出たオランダのグロチウス(Grotius)は、先進國の海洋獨占を批難し、諸國家間に於けるその自由を論じて、「國際法の祖」と仰がれてゐる。

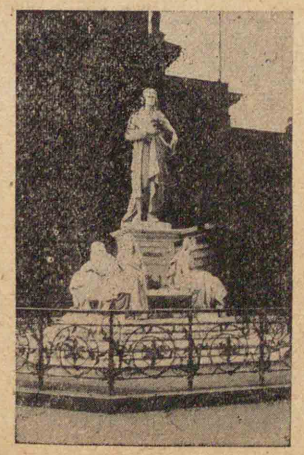
㊁國民文學の發展

近世に於て諸國家對立の形勢となり、各國それぞれ自國語に依る學問・文藝を奬勵し、諸種の傑作が續々と現はれた。イングランドではエリザベス時代に有名なるシェクスピヤ(Shakespeare)が出で、「オセロ」(Othello)・「ハムレット」(Hamlet)等の傑作を遺し、共和時代に出たミルトン(Milton)は「失樂(Paradise Lost)

園」を著はして永く文名を稱せられ、フランスでは
ルイ十四世時代、モリエール(Molière)・コルネーユ(Corneille)等の諸文
豪が喜劇・悲劇に大作を出し、ドイツでは十八・九世
紀の交、ゲーテ(Goethe)・シルレル(Schiller)等の諸大家が出で不朽の
大作を遺し、夫々國民
文學を樹立した。

ドイツ國民文學
圖解イタリヤの廢墟を背景とせるゲーテ(ドイツ、チッシュバイン筆)

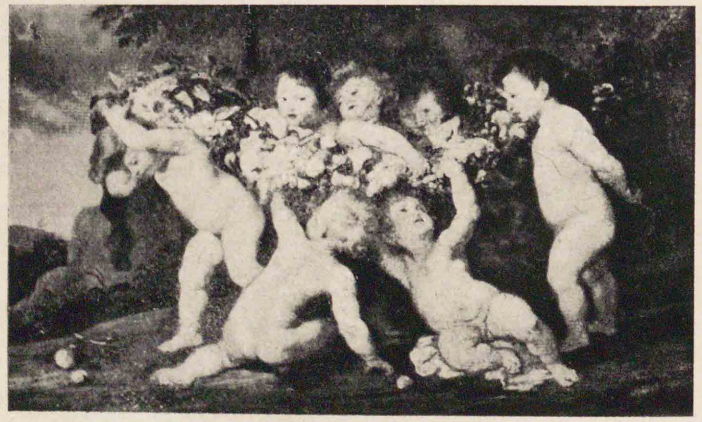
三　藝術の進歩　近世時代に中央集權が發展し、強大な宮廷生活が始まり、ここに壯大華麗な藝術が悅ばれるやうになつた。就中ヴェルサイユ(Versaille)宮殿の如きは出色の者である。繪畫に於てはイスパニヤにヴェラスケス(Velazquez)及びムリリョ(Murillo)が出で、オランダにはルーベンス(Rubens)・ヴァン=ダイク(Van Dyck)・レンブランド(Rembrandt)が現はれ、何れも得意の大作を出して華々しき活動を演じた。音樂に於てはドイツに



圖解ベルリン國立劇場前に立つシルレル大理石像

繪畫の進展

ムリリョの清淨受胎



「等兒小ぶ運を環物果」のスンペール

ルーベンスとムリリョ

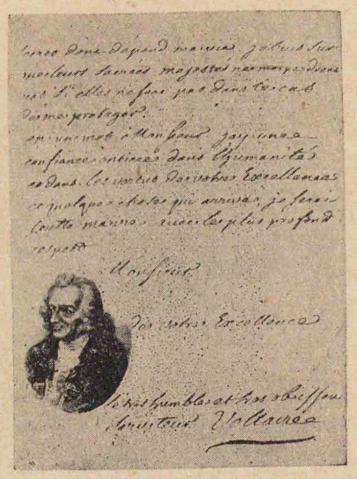
バロック式文化の盛なりし時、オランダにルーベンス(Rubens)(一五七七—一六四〇)、ヴァンダイク(Van Dyck)等、イスパニヤにヴェラスケス(Velasquez)、ムリリョ(Murillo)(一六一七—一六八二)等が出で、等しく形式の誇張とその理想化といふ方面に才筆を揮うた。ここに掲ぐるムリリョの「清淨受胎」、ルーベンスの「果物環を運ぶ小兒等」の如き、何れもこの間の消息を傳へて、觀者の賞讃を博するに足りる。

(前者はロンドン、國民繪畫館藏、後者はドイツ、ミュンヘン、ピナコテーク(München Pinakothek)繪畫館藏)

四 啓蒙思想の隆盛

文藝復興以來人智の發達と科學の進歩が著しく、特に十八世紀に至つては凡ゆる迷信・傳統を排除し、社會萬般の事物を專ら純理によつて解釋せんとする風が盛となり、ここに所謂啓蒙思想(Illuminism, Aufklärung)の隆盛を促し、ひいては革新文學の興隆を見ることとなつた。革新文學は明快・峻烈な筆を揮つて純理の批判を舊制度・舊思想に向け、不合理なものは、すべて一擧に打破しようといふのである。

モツァルト(Mozart)・ベートヴェン(Beethoven)が出で斯界の明星と仰がれてゐる。



啓蒙思想

圖解 ヴォルテールの手蹟と肖像 手蹟はヴォルテールがフレデリック大王と爭ひてドイツより本國に還らんとし、途にプロシヤの官憲に拘へられた時、埃國大臣スタヂオンに伯に救を求めた手紙。一五七三年六月七日附

先づフランスでヴォルテール(Voltaire)は社會制度の弊風を攻擊し、貴族・僧侶を非難し、モンテスキュー(Montesquieu)は「法律の精神(Spirit of the Laws)」を書いてイギリス流の憲法を說き、專制政治

革新文學

圖解 モンテスキー(一六八九—一七五五年)

圖解 ジュネーヴ、ルソー島にあるルソー記念像

を痛擊し、ルソーは「民約論」(Social Contract)等を著はして、人間の自由平等を力說し、フランス革命の因由をつくるやうになつた。かかる傾向は經濟學にも影響を及ぼし、イギリスでアダム=スミス(Adam Smith)の如きは、その著「富國論」(The Wealth of Nations)によつて「消費は目的で生產は手段であるから、多數の消費者を毒する重商主義は不可なり。」と論じ自由貿易論の先驅者となつた。

自由貿易論

五 哲學と科學　近世に於ける眞理探究の精神は勢ひ精神文化の活動を促し、哲學等の隆盛を促すことになつた。先づ十七世紀のフランスに出たデカルト(Descartes)は、眞正の知識は先天的に具はつた一定の原理から出づるといふ「唯理論」を述べ、先にイングランドに出た哲學者ベーコン(Francis Bacon)の「經驗論」

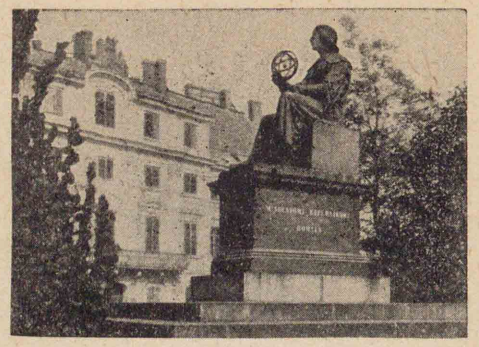
圖解 カント(一七二四—一八〇四年)唯理論と經驗論

大哲カント

に對立した。やがて十八世紀になつてドイツに大哲カント(Kant)が現はれ、巧にこれら兩說を綜合して近世哲學の基を定めた。

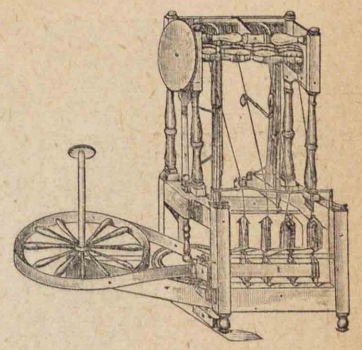
科學の研究も近世精神文化の活動に伴つて進捗し、十六世紀にポーランドに出たコペルニクス(Copernicus)は、地動說を述べて教會の迷信を正し、十七世紀にドイツに出たケプレル(Kepler)は、天體運行の法則を發見して科學界に大なる貢獻をなし、ガリレオ(Galile)はイタリヤに出で、物體落下の法則を研究し、また天體觀測の望遠鏡を發明して學界を裨益(ヒエキ)した。その他イギリスのニュートン(Newton)は引力の大法則を發見し、フランスのラプラス(Laplace)は數學を天文學に應用して天體間の關

科學の進步



圖解 ワルソーにあるコペルニクス記念像手に持てるは天球儀である

圖解 ワット(一七三六—一八一九年)蒸氣機關と紡績機



圖解　アークライト發明の紡績機
圖は一七六九年特許局に出願せる水力紡績機。四對のローラーを水力でかし動かす。こ絲を紡ぎ出す。ローラー及び紡錘は向つて左方下部の車輪に依つて動かさこの車輪はれに水力に依つて動く裝置である

係を明かにした。これら科學の發達は啓蒙思想の影響によつて躍進的の發展を遂げ、それに伴つて各種機械の發明に注目すべきものが現はれてゐる。十八世紀に出た英人ワット(Watt)は蒸氣機關を造り、アークライト(Arkwright)は水力に依る紡績機を發明し、十八世紀末から英國に發展した產業革命の原因となつた。

同	同	一五三四	イングランド教會ローマ法王より獨立す	
同	同	一七一四	ラスタットの講和	
同	同	一七一八	スウェーデン王チャールス十二世戰死す	
同	同	一七二一	ニスタットの和議結ばる	
櫻町	高宗	一七四〇	オーストリヤ繼承戰役起る(—一七四八)	
桃園	同	一七四八	フレデリック大王即位(—一七八六)	
同	同	一七五五	アーヘンの講和成る	
同	同	一七五六	英・佛植民地戰爭始まる(—一七六三)	
同	同	一七五七	七年戰役(第三シレシヤ戰役)起る(—一七六三)	
同	同	一七五九	プラッシーの戰。ロスバハ及びロイテンの戰	
同	同	一七七二	クネルスドルフの戰。ケベック陷落	
後櫻町	同	一七七六	パリー條約・フベルツスブルグ條約締結	
後桃園	同	一七七二	第一回ポーランド分割行はる	
同	同	一七七五	北米イギリス植民地獨立戰役起る(—一七八三)	
光格	同	一七八〇	海上武裝中立同盟成る	
同	同	一七八三	ヴェルサイユ及びパリー條約締結さる	

二年前、德川吉宗將軍となる

竹內式部罪せらる。

大事年表三、近世史

日本	支那	世紀	西紀	西洋事蹟	東洋(日本及びその他)
後花園	明宗	十五世紀	一四五五	薔薇戰役起る(—一四八五)	
後土御門	憲宗		一四七九	イスパニヤ王國成る	
同	孝宗		一四九二	グラナダ陷落。コロンブス、アメリカを發見す	
同	同		一四九八	ヴァスコ=ダ=ガマ、インド航路を發見す	
後柏原	武宗		一五一三	免罪符の發賣	
同	同		一五一七	ルーテル宗教改革を唱ふ	
同	同	十世紀	一五一九	チャールス五世卽位す	
後奈良	世宗		一五三三	マジェラン世界一周の途に上る(—一五二二)	
同	同		一五三四	コルテス、メキシコ征服を始む(—一五二一)	
同	同		一五四〇	ロシヤのイヴァン四世始めてツァールと稱す	
同	同		一五四三	イングランド教會ローマ法王より獨立す	
同	同		一五四九	耶蘇會組織さる	
同	同		一五五五	ポルトガル人始めて日本に小銃を傳ふ	
同	同		一五六二	サヴォエル日本に至る	
正親町	同		一五六八	アウグスブルグの宗教講和	
同	穆宗		一五七一	ユグノー戰役起る(—一五九八)	
同	同		一五七二	オランダ、イスパニヤに叛く	
同	同		一五七九	イスパニヤ、フィリッピン群島を占領す。レパントの戰	
同	神宗		一五八二	セント=バーソロミューの殺戮	
同	同		一五八八	オランダ共和國の建設	
後陽成	同		一五九八	法王グレゴリー十三世曆法を改正す	
同	同		一六〇〇	無敵艦隊の敗滅	足利成氏古河に據る
同	同		一六〇二	ナント勅令の發布	十二年前、應仁の亂起る
同	同		一六一八	英國東インド會社組織さる	
後水尾	同		一六二四	オランダ東インド會社組織さる	北條早雲歿す
同	熹宗		一六三二	三十年戰役起る(—一六四八)	
明正	毅宗	十世紀		リシュリュー、フランスの宰相となる	二年前、武田晴信自立す
				リュッツェンの戰	毛利元就陶晴賢を嚴島に滅ぼす、川中島の前役
					二年前、桶狹間の戰
					一年前、川中島の合戰
					織田信長入京す
					信長叡山を燒く、一年前、姉川の戰
					三方原の戰
					一年前、上杉謙信卒す
					本能寺の變
					聚樂第行幸
					豐臣秀吉薨ず
					關ヶ原の戰
					翌年德川家康將軍となる・二年前、清の太祖皇帝を稱す
					四年後、滿洲國號を建てて清と稱す

同	後柏原	一四九八	ヴァスコ=ダ=ガマ、インド航路を發見す		
同	武宗	一五一三	免罪符の發賣		
同	同	一五一七	ルーテル宗教改革を唱ふ		
同	同	一五一九	チャールス五世卽位す マジェラン世界一周の途に上る(—一五二一) コルテス、メキシコ征服を始む(—一五二一)		
同	後奈良	一五三三	ロシヤのイヴァン四世始めてツァールと稱す		
同	同	一五三四	イングランド教會ローマ法王より獨立す		
同	同	一五四〇	耶蘇會組織さる		
同	同	一五四三	ポルトガル人始めて日本に小銃を傳ふ		
同	同	一五四九	サヴィエル日本に至る		
同	同	一五五五	アウグスブルグの宗教講和		
同	正親町	一五六二	ユグノー戰役起る(—一五九八)		
同	同	一五六八	オランダ、イスパニヤに叛く		
同	穆宗	一五七一	イスパニヤ、フィリッピン群島を占領す。レパントの戰		
同	同	一五七二	セント=バーソロミューの殺戮		
同	神宗	一五七九	オランダ共和國の建設		
同	同	一五八二	法王グレゴリー十三世曆法を改正す		
後陽成	同	一五八八	無敵艦隊の敗滅		
同	同	一五九八	ナント勅令の發布		
同	同	一六〇〇	英國東インド會社組織さる		
同	同	一六〇二	オランダ東インド會社組織さる		
後水尾	同	一六一八	三十年戰役起る(—一六四八)		
同	熹宗	一六二四	リシュリュー、フランスの宰相となる		
明	正	一六三二	リュッツェンの戰		
同	毅宗	一六四二	イギリス内亂起る(—一六四九)		
同	同	一六四三	フランス王ルイ十四世卽位(—一七一五)		
後光明	清世祖	一六四八	ウェストファリヤ條約締結		
同	同	一六四九	イングランド共和政となる(—一六六〇)		
同	同	一六五一	航海條例の發布		
後西	同	一六六〇	イングランド王政復古		
同	同	一六六七	フランス王ルイ十四世外國侵略を始む		
靈元	聖祖	一六八二	ペートル大帝卽位(—一七二五)		
同	同	一六八五	ナント勅令の廢止		
同	同	一六八八	イングランド名譽革命		
同	同	一六八九	ネルチンスク條約締結さる		
同	同	一七〇〇	北方戰役起る(—一七二一)		
同	同	一七〇一	イスパニヤ繼承戰役起る(—一七一四)プロシヤ王國成る		
同	同	一七〇三	ペテルブルグの創建		
同	同	一七〇七	大ブリテン王國成立		
中御門	同	一七一三	ユトレヒトの講和		
同	同	一七一四	ラスタットの講和		
同	同	一七一八	スウェーデン王チャールス十二世戰死す		
同	同	一七二一	ニスタットの和議結ばる		
櫻町	高宗	一七四〇	オーストリヤ繼承戰役起る(—一七四八) フレデリック大王卽位(—一七八六)		
桃園	同	一七四八	アーヘンの講和成る		
同	同	一七五五	英・佛植民地戰爭始まる(—一七六三)		
同	同	一七五六	七年戰役(第三シレシヤ戰役)起る(—一七六三)		
同	同	一七五七	プラッシーの戰。ロスバハ及びロイテンの戰		
同	同	一七五九	クネルスドルフの戰。ケベック陷落		
後櫻町	同	一七六三	パリー條約・フベルツスブルグ條約締結		
同	同	一七七二	第一回ポーランド分割行はる		
同	同	一七七五	北米イギリス植民地獨立戰役起る(—一七八三)		
後桃園	同	一七八〇	海上武裝中立同盟成る		
同	同	一七八三	ヴェルサイユ及びパリー條約締結さる		
光格	同				

同	後柏原	一五一三	北條早雲歿す
同	同	一五一七	
同	同	一五一九	
同	後奈良	一五三三	二年前、武田晴信自立す
同	同	一五三四	
同	同	一五四〇	
同	同	一五四三	毛利元就陶晴賢を嚴島に滅ぼす、二年前、川中島の前役 一年前、桶狹間の戰、川中島の合戰
同	同	一五四九	
同	同	一五五五	織田信長入京す
同	正親町	一五六二	信長叡山を燒く、一年前、姉川の戰
同	同	一五六八	
同	穆宗	一五七一	三方原の戰
同	同	一五七二	一年前、上杉謙信卒す
同	神宗	一五七九	本能寺の變
同	同	一五八二	聚樂第行幸
後陽成	同	一五八八	豐臣秀吉薨ず
同	同	一五九八	關ヶ原の戰
同	同	一六〇〇	翌年德川家康將軍となる。
同	同	一六〇二	二年前、清の太祖皇帝を稱す
後水尾	同	一六一八	
同	熹宗	一六二四	四年後、滿洲國號を建てて清と稱す
明	正	一六三二	
同	毅宗	一六四二	翌年明亡び清の世祖燕京に卽位す
同	同	一六四三	
後光明	清世祖	一六四八	由井正雪の反
同	同	一六四九	
同	同	一六五一	
後西	同	一六六〇	
同	同	一六六七	三藩の亂平ぐ
靈元	聖祖	一六八二	此の頃德川綱吉將軍たり
同	同	一六八五	一年前、綱吉生類憐令を發す
東山	同	一六八八	
同	同	一六八九	德川光圀薨ず
同	同	一七〇〇	淺野長矩吉良義央を殿中に傷く一年前、大石良雄等主の仇を報ず
同	同	一七〇一	
同	同	一七〇三	
同	同	一七〇七	德川家繼將軍となる
中御門	同	一七一三	
同	同	一七一四	二年前、德川吉宗將軍となる
同	同	一七一八	
同	同	一七二一	
櫻町	高宗	一七四〇	
桃園	同	一七四八	
同	同	一七五五	
同	同	一七五六	
同	同	一七五七	
同	同	一七五九	竹內式部罪せらる。
後櫻町	同	一七六三	
同	同	一七七二	
同	同	一七七五	
後桃園	同	一七八〇	
同	同	一七八三	
光格	同		

第四編　最近世史（十八世紀末より十九世紀末に至る）

第一章　フランス大革命

大革命の史的價値

㊀大革命の原因

第十八世紀の末に起つたフランス大革命は、たゞにフランスのみならず、ヨーロッパの社會に著しい變動を與へた大事件であり、後代の歴史にまで大なる影響を留めてゐるが、その基づくところは主として政治上・社會上の弊害に歸着する。フランスでは、ルイ十四世以來特に專制政治を行ひ、奢侈と外征のため財政亂れ、しかも少數の貴族・僧侶は土地の大部を領するにかかはらず、免稅の特權を得、主として重稅を課せられ

圖解　第三級民―平民の負擔重きを示す諷刺畫

大革命勃發の因由

たのは貧困な大多數の平民であつたから、平民の不平・不滿は實に甚だしきものがあつた。加ふるに革新文學に鼓吹せられた自由平等の精神、自由民權の思想に基づくアメリカ獨立の影響等いやが上に平民の奮起を促し、遂にルイ十六世(Louis XVI.)の失政を動機に、恐るべき革命の騒亂をひき起すに至つたのである。

ルイ十六世の性格

財政整理の失敗

圖解　ルイ十六世夫妻とその太子

(二)革命の勃發と國民議會

かゝる難局に際してフランスの王位にあつたのは、ルイ十六世である。王は溫良の君主にして改革の志はあつたが、時局を救濟すべき決斷をもたなかつた。王は先づチュールゴー(Turgot)・ネッカー(Necker)・カロンヌ(Calonne)等を順次任用して、財政整理のことに當らせたが、王后や貴族・僧侶の反對にあつて、その目的を遂げることが出來ず、ここに止むなく一七八九年、久しく開かなかつた

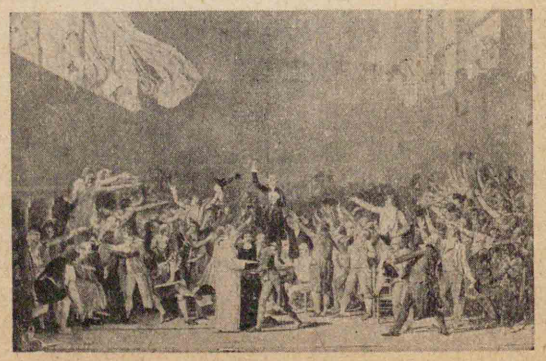
三部會と國民議會

圖解　第三級代表、三部會より離れて別に國民議會を組織しヴェルサイユのテニスコートに會して誓を立て、その任務を果さざるうち決して國民議會の解散せぬことを約束したバスチーユ牢獄の破壞（我が國では光格天皇寛政元年、家齊將軍の時）

圖解　バスチーユ牢獄破壞の記念牌　上銘（佛文）「バスチーユの攻圍」　下銘（佛文）「一七八九年七月十四日　パリー市民により奪取さる」

人權の宣言

三部會をヴェルサイユに召集し、極力、難局の打開に當らせようと企てた。然るに議決の方法について議論が生じ、その結果、平民議員は貴族・僧侶と分れて別に國民議會(National Assembly)を組織し、新に憲法を組織して解散すべきことに定め、貴族・僧侶の若干も來り加はるに至つた。偶〻王が武力を以て議會を壓迫する企があると傳へられ、不平に滿てる暴民が一時にパリーに蜂起し、遂にバスチーユ(Bastille)牢獄を破壞して革命の端を開いた。（一七八九年七月十四日）かくして暴動は各地に勃發し、貴族・僧侶の外國に避難するものが相次いで起つた。やがて議會は「人權の宣言」(Declaration of the rights of man)を出して自由平等の民權



圖解ミラボー（一七四九―九一年）貴族の出身、幼時痘瘡を病み、容貌醜かつたが、その雄辯は人を魅する力があり、始めて三部會議員として政界に乘り出した

王家、國外遁走を計る

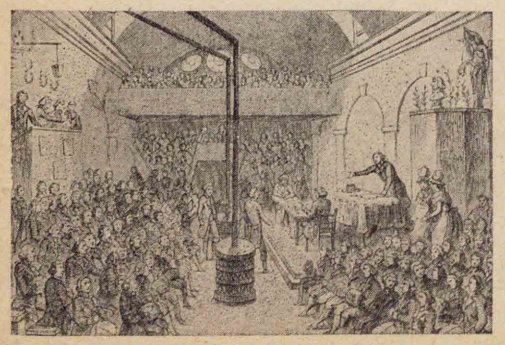
圖解ジャコベン黨の會議

立法議會

を主張し、またミラボー等の盡力から新憲法の制定に着手し更に立憲君主制に基づく諸般の改革を議して、地方官吏を公選とし、教會領を沒收して、財政の整理に充てた。然るにミラボーが死んで溫和派の勢が衰へ、王は賴るところを失つて王后マリー＝アントアネットの勸めに從ひ、他國に遁走を企てたが途に擒へられ、却つて王の一族を擧げて幽閉の身となり、先に議會の制定せる新憲法に承認を與へた。（一七九一年九月）

㊂ 立法議會の經過と國民公會の恐嚇政治

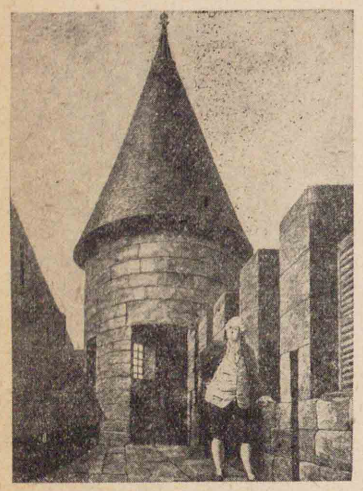
一七九一年國民議會が解散して新憲法に基づく立法議會の成立となつたが、同議會の末、立憲王政黨は頗る衰へ、溫和共和主義を唱ふるジロンド黨と、過激共和主義を主張するジャコベン黨が最も勢力あり、王政廢止の意見が段段盛となつた。時にオーストリヤ・プロシヤの二國は革命思想の傳播を恐れ、共同してフランスを侵し、一擧にこの思想を抑へようとしたが、却つてフランス人の敵愾心を刺激し、王權を停止して王の一族を禁錮し、力を一にして外難に當つた。

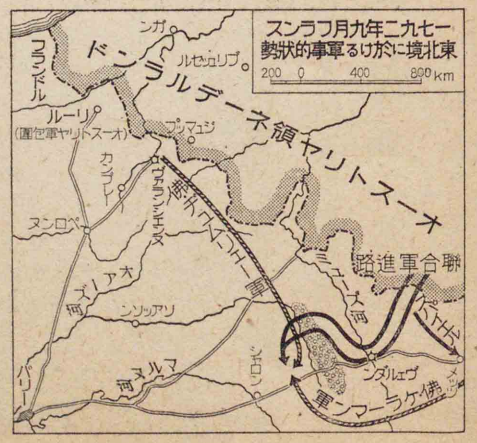


佛人の愛國心昂まる

國民公會成立

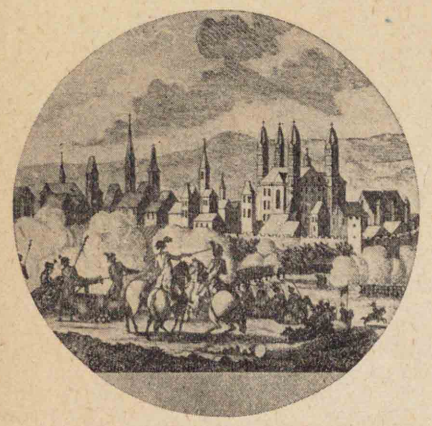
圖解タンプル獄とルイ十六世





やがて一七九二年立法議會が解散して、新に國民公會の成立を見たが、この公會で溫和・過激の共和黨が提携して王政を廢し、共和政を布き、無法にも

ルイ十六世を弑するに至つた。かかる天理に背いた所行は、君臣の分、嚴然として、秋毫も亂るる無き神聖なわが國體に比ぶべくも無いのである。報に接せるヨーロッパ諸國は大に驚き、イギリスの宰相小ピットが中心となつて一七九二年第一回歐洲大同盟を組織し、同盟軍が協力して四方からフランスの國境に迫つた。ここに於て過激論を主張するジャコベン黨は、溫和說を唱ふるジロンド黨を倒して國論を統一し、いはゆる恐嚇政治の機關たる公安委員會・革命裁判所を設けて、反對者を容赦なく處刑し、更に共和曆を布き、基督教の信仰を止めて道理の崇拜を起し、徵兵制を布いて愛國の精神を勵まし、國を擧げて侵入軍に當り屢〻これを破つた。しかもこの間ジャコベン黨の虛を窺ふものが出で、また



第一回歐洲大同盟

圖解 同盟軍の侵入より佛の愛國心は大に昂まり、一七九二年進んで獨のスパイエルを擊つた。圖は當時の光景

黨內にも分裂を生じ、マラー・ダントンの兩黨首、相ついで殺され、同黨の領袖ロベスピエールもその專橫を惡める同派の反擊によつて斃れ、恐嚇政治がここに終つた。(一七九四年七月)そこで一七九五年、國民公會は穩健な憲法をつくつて自ら解散し、五人の總裁と上下兩院を主腦とせる總裁政府が新に組織され、ここに溫和な手段によつて國內に革命主義の遂行を計ることになつた。

圖解 マラー(一七四三—九三年)恐嚇政治の終り

圖解 ロベスピエール(一七五八—九四年)總裁政府の組織

第二章　ナポレオン一世(上)

❶ 總裁政府の活動とナポレオン

總裁政府は國民公會と同じく

革命精神

圖解ナポレオンは北伊、アルコレ(Arcole)の戰に自ら軍旗を捧げて陣頭に立ち、橋上を進んで大にオーストリヤ軍を破つた(ヴェルサイユ博物館藏)

天才的英雄ナポレオン＝ボナパルト

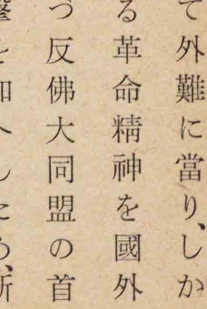
圖解ナポレオン＝ボナパルトの自署

圖解若年將軍ナポレオンの記念牌

カンポ＝フォルミオ條約

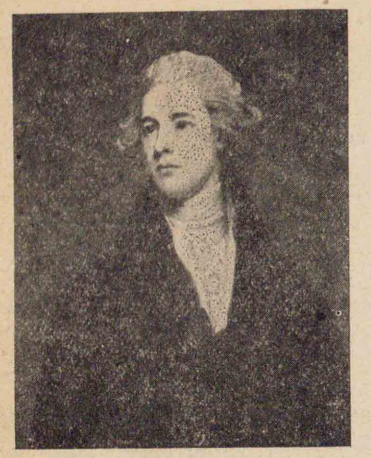
熱烈なる愛國心を鼓舞して外難に當り、しかも自由・平等博愛のいはゆる革命精神を國外に宣傳するに力を致し、先づ反佛大同盟の首腦たるオーストリヤに打擊を加へんため、新に三軍を組織してこれに向はせた。

第一及び第二軍は何れもドイツ方面でうち破られ、獨り天才的英雄ナポレオン(Napoleon Bonaparte)＝ボナパルトの率ゐる第三軍が、北イタリヤに進出して、連りにオーストリヤ軍を破り、まさにウィーン(Vienna)を衝かんとしたが、自ら後方との聯絡を絶たれるを憂へ、遂にオーストリヤの請を納れて、一七九七年カンポ＝フォルミオ(Campo Formio)の條約を結び、オーストリヤをしてロンバルヂヤ(Lombardy)及びネーデルランドを割かせ、第一回大同盟はここに瓦解し、ナポレオ



ナポレオンのエジプト遠征

第二回歐洲大同盟

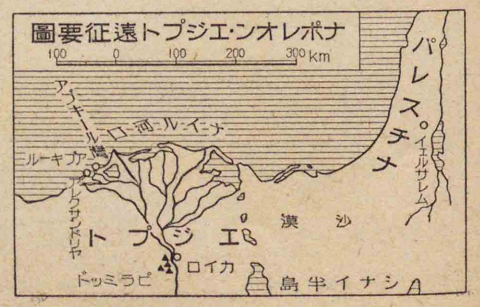


圖解小ピット(一七五九―一八〇六年)二十三歲大藏大臣となり、二十四歲總理大臣となる

ンの名聲は大に揚つた。やがてナポレオンは政府に說いて敵國イギリスを制するため、イギリス本國とインドとの交通を斷たんとし、一七九八年自ら軍を率ゐてエジプトに遠征し、忽ちにして全土を平げたが、その海軍は英將ネルソン(Nelson)の率ゐる艦隊にアブキール(Aboukir)灣内に擊滅せられ、ナポレオン軍は本國との連絡を失ふに至つた。

㊁統領政治とナポレオン

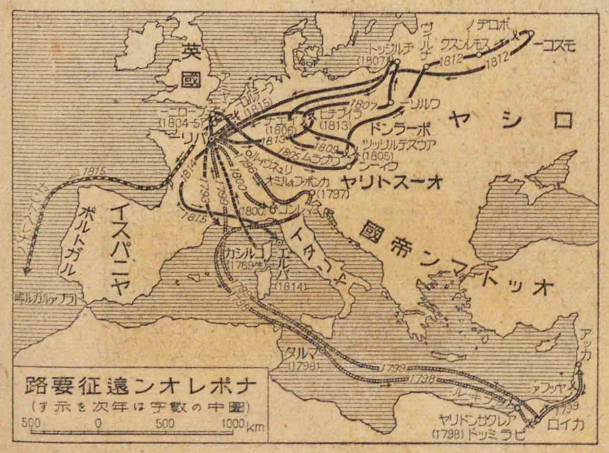
一七九九年英國首相小ピットは英・露・墺・葡等諸國を併せて第二回歐洲大同盟を組織し、到るところフランス軍をうち破つたので、フランス國内は大に動搖して偉人の出現を望むものが多かつ



統領政府の組織

た。ナポレオンは機失ふべからずとして直ちに本國に還り、武力によつて總裁政府を倒し、新憲法を作つて統領三人より成る統領政府(Consul)を起し、自ら第一統領(The first Consul)として全權を握つた。かくてフランスの共和政治は名のみとなり、その實は、武斷的君主政治と化し果てた。やがてナポレオンは新政府を認めぬオーストリヤに打撃を加へんため、一八〇〇年モロー(Moreau)をドイツ方面より進ませ、自らアルプスの險を越えて北イタリヤに現はれ、オーストリヤ軍をマレンゴ(Marengo)に破り、かれをしてリュネヴィル(Luneville)の屈從的和約に從はせ、ライン左岸の地を讓らせた。この年イギリスでもピットの主戰内閣が倒れて和平に傾き

マレンゴの戰



卽位の式服を纏へるナポレオン大帝

パリーエトアルーの凱旋門

即位の式服を纏へるナポレオン大帝（上）

威名一代を蔽へるナポレオン＝ボナパルトは己が成功を權威づけんが爲め一八〇四年フランス皇帝の位に即いた。圖は即位の正裝に身を飾れる大帝の英姿を描く。フランソア＝ジェラールの名筆にかかり、今ヴェルサイユ博物館に所藏されてゐる。 François Gérard

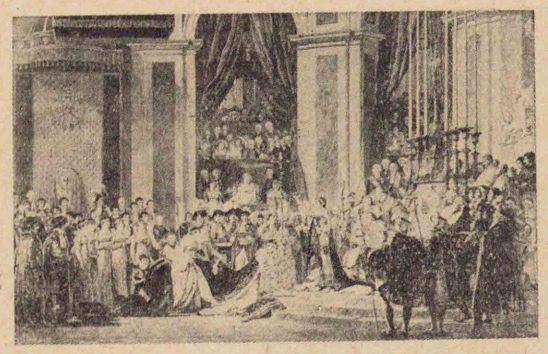
パリー、エトアールの凱旋門（下）

ナポレオン大帝の武名全歐に轟くや、帝自ら赫々たる戰勝の光榮を誇らんため、パリーにエトアールの凱旋門を營む。一八〇六年帝の盛時に起工し、一八三六年ルイ＝フィリップ王の時代に成る。高さは百五十呎、古典的藝術の面影を表はし、豪壯にして典雅の結構を備へてゐる。

アミヤン條約

互に侵地を還す條件でフランスとアミヤン Amiens に和を結び、第二回大同盟も目的を遂げずに終つた。

㊂ナポレオンの內治と帝政の確立　これよりナポレオンは內政に意を用ひて、人材をあげ、財政を整へ、教育をすすめ、舊教を回復し、產業を奬勵し、法典を修め、革命精神に舊制を加味した建設事業が着々と行はれた。かくして民望を收めたナポレオンは一八〇二年終身の統領に推され、一八〇四年には國民の總同意を得てフランス人の世襲皇帝となり、ナポレオン一世 Napoleon I. と稱し、その翌年イタリヤ王の位を兼ねた。



ナポレオンの內政

圖解ナポレオンは一八〇四年法王をパリーに招いてノートル＝ダームに戴冠式を行ひ、その際また皇后ジョセフィンに親ら加冠した

ナポレオンの即位

第三章　ナポレオン一世（下）

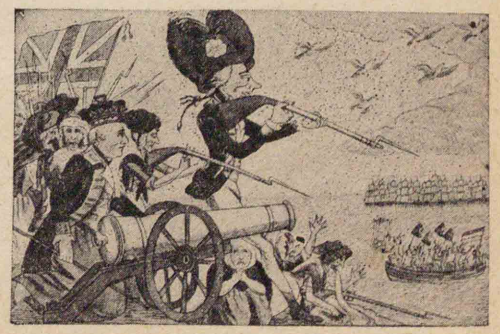
佛國に恐るる英國を諷する漫畫　船の舳にギヨチーヌを捧ぐるは革命思想の傳來を意味する

ナポレオンの英國上陸策

ネルソン（一七五八―一八〇五年）トラファルガルの大海戰

㊀ナポレオンの海陸攻戰と神聖ローマ帝國の瓦解

イギリスでは一八〇四年ピットが再び内閣をつくり、翌年ロシヤ・オーストリヤ・スウェーデン等を併せて第三歐洲大同盟を結び、一擧にフランスを抑へようと計つた。ここにナポレオンはイスパニヤと結んで英本國に侵入を企て、佛西聯合艦隊をして英艦隊を西インド方面に牽制し、虛に乘じて陸軍をイギリスに送り、一擧に勝を制せんと企てたが、聯合艦隊は英提督ネルソンによつてトラファルガル沖（Trafalgar）に大敗を喫し、ナポレオンの希望は遂に挫折した（一八〇五年十月）。ここにナポレオンは海上の失敗を償はんとし、急に



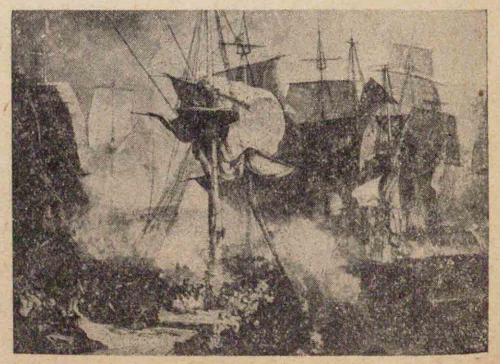
トラファルガルの大海戰（ターナー筆）　正面の檣の下にネルソンが斃れてゐる

アウステルリッツの戰

ライン聯邦

神聖ローマ帝國の滅亡

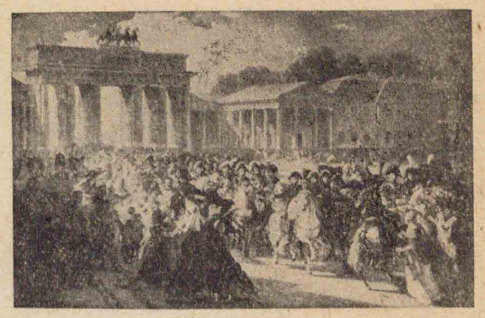
軍を轉じてオーストリヤを侵し、首都ウィーンを奪ひ、ついでオーストリヤ・ロシヤ聯合軍をアウステルリッツ（Austerlitz）の戰に擊破し、遂にオーストリヤとプレスブルグ（Pressburg）に和し（一八〇五年）、墺をしてヴェネチヤをイタリヤ王國に割き、ナポレオンのイタリヤ王たるを認めさせた。やがてナポレオンは西南ドイツ十六國をしてドイツ帝國から離れ、彼自身を保護者とせるライン聯邦（The Confederation of the Rhine.）を組織させたので、帝國の統制は悉く失はれ、神聖ローマ皇帝フランシス二世（Francis II.）は一八〇六年を以て帝號を辭し、單にオーストリヤ皇帝フランシス一世と稱し、オットー大帝以來、連綿たりし神聖ローマ帝國はここに解體した。



㊁ナポレオン一世の盛運と大陸封鎖

プロシヤは約十年間常に中立を守つて國土の安全を得たのであるが、ナポレオンの暴狀に憤

ナポレオンのプロシヤ侵入



圖解ナポレオン軍ベルリンに入る　圖の中央白馬に跨るはナポレオン帝。左の門はベルリンのブランデンブルグ門

大陸封鎖令

圖解プロシヤ王フレデリックウィリヤム三世　有名なルイゼ后は彼の王后である

つてロシヤと結び、フランスに宣戰した。（一八〇六年）　ナポレオンは直ちに大兵を擧げてプロシヤを侵し、ベルリンを占領し、頻りにプロシヤ・ロシヤの聯合軍を破つて、東プロシヤに進み、遂に一八〇七年普露兩國の君主とチルジット（Tilsit）に會して和を議し、大にプロシヤの領土を削り、プロシヤ領ポーランドを收めてワルソー（Warsaw）公國を立て、己（オノ）が勢力下に加へた。これより先、ナポレオンはベルリンで有名なる大陸封鎖令を出し、ヨーロッパ諸國とイギリスとの通商をとどめ、經濟的にイギリスを屈服させようと計つた。

㊂ナポレオンの極盛

かくてナポレオン帝の威名は全ヨーロッパに響き、大陸

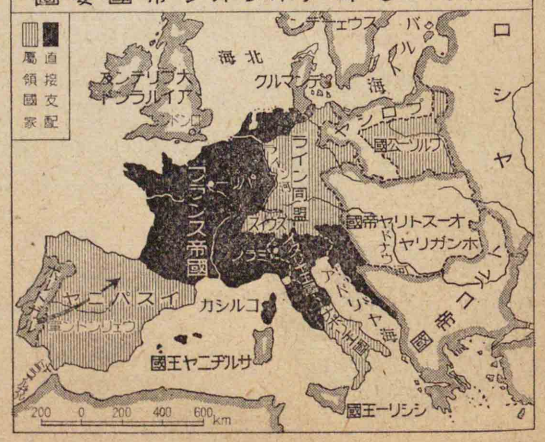
ナポレオンのイスパニヤ侵入

オーストリヤ征伐

圖解マリヤ＝ルイザ皇后　墺帝フランシス一世の女　ナポレオン、ハプスブルグ家に娶る

封鎖を守らざるポルトガルを擊ち、進んでイスパニヤを侵して舊王家を抑へ、己（オノ）が兄ジョセフ（Joseph）をして王位に上らせた。しかるに西葡兩國民はイギリスの援助を得て烈しき抵抗を試み、爲に帝は親征して頻りにこれに壓迫を加へた。やがてナポレオンは、隙に乘じて起れるオーストリヤに大兵を轉じ、一八〇九年ウィーンを占領し、ワグラム（Wagram）に大勝を得、遂にオーストリヤを屈服せしめてウィーン條約を結び、ダルマチヤ（Dalmatia）方面をとつた。更に繼嗣のないのを理由として皇后ジョセフィン（Josephine）を廢し、オーストリヤの皇女マリヤ＝ルイザ（Maria Louisa）を娶

一八一〇年ナポレオン帝國要圖



ンオレポナるむ眺をーコスモく行け焼

圖解　ナポレオンに對してプロシヤの奮起を促したのはプロシヤ王后ルイゼである。圖はルイゼとその二子。年長の方は後のフレデリック＝ウリヤム四世、年少の方は後のウィリヤム一世帝（ブレスラウ繪畫館藏）

プロシヤの改革

圖解　スタインドイツ、ナッサウの人、プロシヤに來つて大臣となり、國民自由主義により、プロシヤの統制を計つた

つて家門の隆昌を圖つた。かくてイギリス・トルコを除く殆んど全ヨーロッパは帝の足下に跪くに至つた。」

㊃ナポレオンの衰運と歐洲獨立戰役

フランスの與國の多くはナポレオンの壓迫の甚しいのを怒り、殊に大陸封鎖により國民生活上、大なる苦痛を與へらるるを憤り、諸國民擧つて熱烈な愛國心を喚起した。中にもドイツは國內に統制なきため、フランスに乘ぜられたのを覺りプロシヤの如きはスタイン・ハルデンベルヒ（Stein, Hardenberg）らの名宰相の下に、着々內政を整へて、報復の擧に出ようとした。當時ロシヤにもナポレオンに對する反抗心が湧き起り、大陸封鎖に從はずして密にイギリスと通商を始め、ここにナ

燒け行くモスコーを眺むるナポレオン（ウルスタイン、世界史より採收）

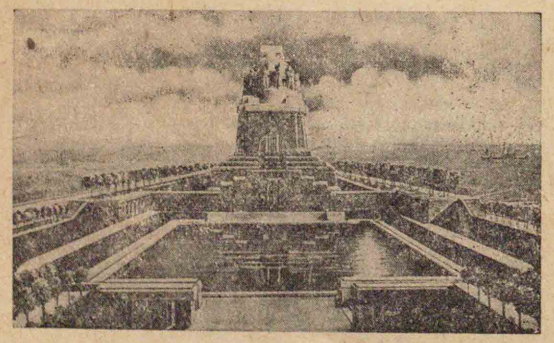
Ulstein

一八一二年九月フランス帝ナポレオン一世の率ゐる大軍は懸軍長驅してロシヤの舊都モスコーに入いつた。しかも降服を豫想されたロシヤ軍は頑として抵抗を止むる樣子も無い。偶〻九月十四日、突如モスコー市内に大火が起り、延燒連日、二十日に至つて止んだ。久しぶりに物資（ブツシ）豐かな大都に入いつたフランス軍の亂暴な徵發から出た失火とも言はれ、また頑强な住民の反抗より起つた放火とも言はれてゐる。大火終らんとし、ロシヤ軍、依然として降服を求めず、加ふるに恐るべき寒威が日に日にフランス軍を脅かして來たので、流石に不屈なるナポレオンも、一旦占領した敵都から敗軍の將の如く撤退するに至つた。圖は佛軍の本營クレムリン（Kremlin）の宮殿から燒け行くモスコーを眺めて悵然たる大ナポレオンの風姿を描いてゐる。誰か知らん、このモスコーの大火が一誘因となつて、流石に全勝を誇つた大英雄の運命も漸く傾き來るに至つたことを。

ナポレオンのロシヤ遠征

圖解　ハルデンベルヒ　ハノーヴァーの人プロシヤに仕へて首相となり、國民自由主義に基いて、國力の充實を計つた

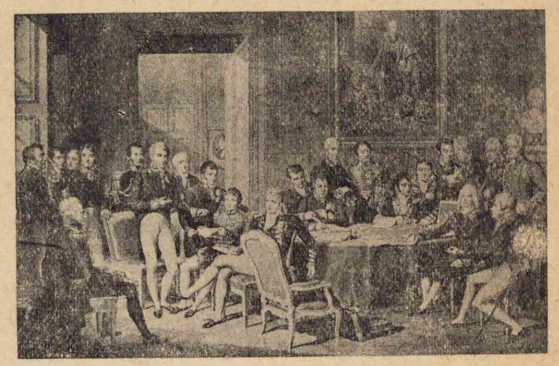
ポレオンは一八一二年、約五十萬の大兵を起してロシヤに遠征し、連戰連勝、遂にモスコーに侵入したが、偶〻大火が起つて全市みな燒け失せ、フランス軍は飢餓と寒氣のため、餘儀なく退却を開始し、多大の損害を受けて敗退するに至つた。ここに於てプロシヤが先づ叛いてロシヤと結び、次いでイギリス・オーストリヤ等と結んで所謂第四回歐洲大同盟を組織し、ナポレオンに當ることとなつた。かくて同盟軍は一八一三年、大にフランス軍をライプチヒ（Leipzig）に破り、翌年進んでパリーを陷れ、ここにナポレオンは進退に窮して、帝位を辭し、エルバ（Elba）島に流され、ルイ十六世の弟ルイ十八世（Louis XVIII.）が迎へ



圖解　ライプチヒ戰勝記念碑　高さ九六米突　歐洲諸國民戰役（一八一三年）

られてフランスの王位に卽き、列國と講和してブルボン朝が再興した。

五　百日天下とウィーン列國會議　一八一四年歐洲列國は戰後の處置を講ずるため、ウィーンに公會を開いたが、列國の利害が相違して容易に一致を見なかつた。ナポレオンはエルバ島にあつてこの報を得、またルイ十八世の國民に人望なきを聞き、密にエルバを遁れてパリーに還り、容易く帝位に復することが出來た。かくてヨーロッパ列國は大に驚き、兵を出し、イギリスのウェリントン Wellington、プロシヤのブリュッヘル Blücher 等が聯合軍を率ゐ、一八一五年六月大に



ウィーン公會

圖解ウーン公會の光景　前列向つて右より二人目タレーラン(佛)中央椅子に倚るはカッスルリー(英)左の中央に立つはメッテルニヒ

圖解ワーテルローの戰　英軍最終の進擊

ワーテルローの戰

ナポレオン、セントヘレナに流さる

ウィーン公會決議要項

ナポレオンとワーテルロー Waterloo に戰つてこれを破り、更にフランスに攻込んでパリーを占領し、ナポレオンを擒へてセントヘレナ島に流し、所謂ナポレオンの百日天下が終り、二十三年に跨る歐洲の大亂はここに至つて始めて止んだ。

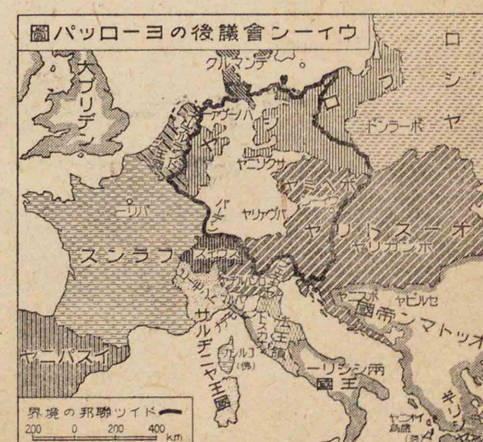
これより先、ナポレオンの再擧に驚いたウィーンの列國委員は、一八一五年六月急に議事をまとめてウィーン條約を結び、(一)オーストリヤはネーデルランドを捨ててヴェネチヤ・ロンバルヂヤを得、(二)プロシヤはポーランドの一部を復し、サクソニヤの北半とライン右岸の地を取り、(三)ドイツ諸國は三十五の君主國、四自由市相合して統制の弱いドイツ聯邦 German Confederation を組織し、(四)ロシヤは舊ワルソー公國の大部を得てポーランド王國を起し、ロシヤ帝その王位を兼ね、(五)オランダは舊墺領ネーデルランド卽ち ベルギー Belgium と合してネーデルランド王國 The Kingdom of the Netherlands をつくり、(六)スウェーデンはノルウェーを併せ、イギリスは戰役中に奪つたセイロン Ceylon

神聖同盟の成立

ン・ケープタウン(Cape Town)等を領し、(七)イタリヤは革命前の如く諸小國の分立に委せられた。要するにこの條約は、多年の戰爭に苦んだ結果、反動的傾向に制せられて、フランス革命前の狀態に復するを主眼とし、當時盛となれる國民統一主義(Nationalism)・自由主義(Liberalism)に何等注意を向けなかつた。

第四章　自由主義及び國民主義の發展

第一節　自由主義・國民主義と南米諸國・ギリシヤの獨立



㊀神聖同盟

ウィーン會議後間もなく、ロシヤ帝アレクサンドル一世(Alexander I.)が、オーストリヤ帝並にプロシヤ王と謀つて神聖同盟(Holy Alliance)を組織し、各國の君主が何れもキリスト教の精神を體し、正義・平和・博愛を旨として兄弟の如くに親しみ、臣民を赤子のやうに愛さうと約し、戰を厭へるヨーロッパ諸國の殆ど全部がこれに加はつた。オーストリヤの宰相メッテルニヒ(Metternich)は、神聖同盟を利用して國民統一運動や自由主義を抑へ、ただに自國のみでは無く、歐洲列國の平和をも維持しようと考へ、ドイツ・イタリヤ・イスパニヤ等にこの種の運動が起れば、直ぐ他國の君主と協力して武力干渉を用ひるのを忘れなかつた。

㊁メッテルニヒの干渉政策

ドイツにはウィーン條約で出來た統制不充分の聯邦組織に甘んぜず、眞の統一・自由を要求する聲が盛であつて、大學學生等が中心

圖解　ロシヤ帝アレクサンドル一世（一八〇一—一八二五年在位）

神聖同盟の目的と反動政治

メッテルニヒの干渉政策

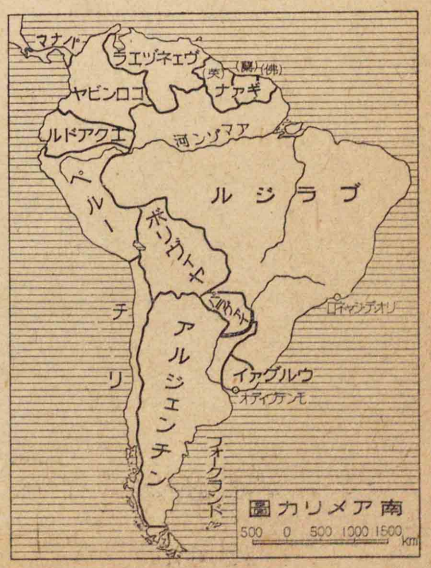
圖解　メッテルニヒ　一八〇九年以降一八四八年までオーストリヤの宰相として歐洲外交の牛耳をとつた

となり、頻りに示威運動を試みたが、メッテルニヒはドイツ諸國と計つてこれを抑へ、一八一九年イタリヤに自由統一の運動が起つた時も、列國と議し兵力でこれを鎮め、(一八二一年)イスパニヤに自由運動の起つた際も同様、強力でこれを壓迫した。ナポレオン戰役前後、中南米のイスパニヤ・ポルトガル植民地が、自由主義の主張により續々獨立し、メキシコ・チリ(Chili)・ペルー(Peru)・アルジェンチン(Argentine)諸共和國、ブラジル(Brazil)帝國等も起つたが、メッテルニヒは例の神聖同盟を楯とし、武力で以て抑へようと計つた。然るにイギリス外相カニング(Canning)は、新興諸國の承認が自國の貿易に有利であると考へ、率先してこれを認め、また米國大統領モンロー(Monroe)も有名なモンロー主義(Monroe Doctrine)の教書を出し、ヨーロッパ

南米諸國獨立

神聖同盟の衰弱

モンロー主義の宣言



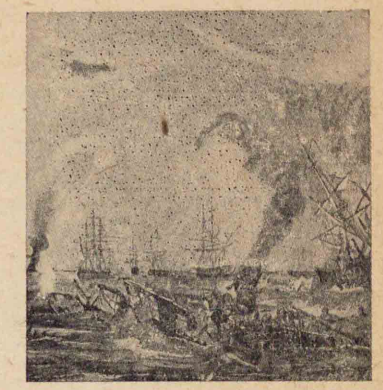
圖解　ジェームス＝モンロー　米國第五代の大統領。一八一七年就任、再選して一八二五年に至る、共和黨の政治家

諸國がアメリカ諸國に武力干渉を行ふのは、取も直さず合衆國に敵意を示すものであると宣言し、メッテルニヒの威勢も力及ばず、神聖同盟の威信は地に墜ちた。

㊂ギリシヤの獨立　ギリシヤは多年異人種・異宗教のトルコの壓迫に苦しんでゐたが、十九世紀になつて國民主義と自由主義に刺戟をうけ、遂に一八二一年獨立の旗を飜し、ギリシヤ擁護の精神も高まつて、英國詩人バイロン(Byron)の如きも來り加はつた。トルコは屬領エジプトの藩王メヘメット＝アリ(Mehemet Ali)の援を得、頻りにギリシヤ軍を破つたが、ロシヤは神聖同盟の方針に背き、英・佛二國と協力して獨立軍を援け、遂に一八二七年三國艦隊

圖解　バイロン(英國國民肖像畫館藏)　ギリシヤ、トルコに叛く

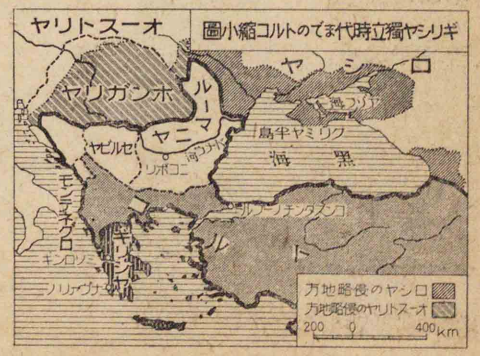
ナヴァリノの海戰



圖解ナヴァリノの海戰　メッテルニヒ、海戰の報を得、「十月二十日（海戰の日）の事件は歐洲に新時期を開いた」と嘆じたが、そは神聖同盟の沒落を悲んだ言葉である

圖解メヘメット＝アリ（一七六九―一八四九年）

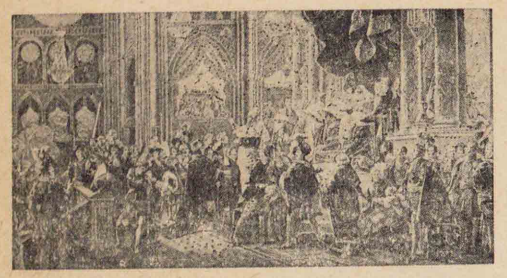
はナヴァリノ海戰にトルコ艦隊を全滅させ、ロシヤの陸軍もトルコの首府に迫つたので（一八二九年）、トルコはアドリヤノープルの和約を結んで、ギリシヤの獨立を承認し、ギリシヤはバワリヤの王子オットーを仰いで國王に推戴した。やがてエジプトの藩王メヘメット＝アリは、恩賞の不滿足から叛を計つてトルコを討つたが、ロシヤはトルコを助けてバルカンに出ようとし、ここに英・佛二國が抗議してその野心を抑へた。しかるにその後フランスはエジプトを援けてトルコを討ち、自國の勢力をこの方面に張らうとし、爲に英・露等諸國の壓迫を蒙つて、外交上、拭ふべからざる失態を招いた。これが、いはゆる十九世紀前半の東方問題である。



ギリシヤ獨立時代までのトルコ縮小圖

東方問題

佛の反動政治



圖解チャールス十世は舊教に熱心なる王。圖はレンス伽藍に於けるその塗油式壇上、僧正の前に禮拜するはチャールス十世

七月革命勃發

第二節　自由主義とフランスの國力發展並にその國民性

一　七月革命とその影響

フランスではブルボン朝のルイ十八世が王位に卽き、反動政治を行つて、甚だしく民望を失つたが、王の歿後王弟チャールス十世が位に上り、貴族・僧侶を重んじて、極端な保守政策をとり、甚だしく民權を抑へ、遂に一八三〇年七月首相ポリニャックの說に聽いて、未だ召集せぬ議會を解散し、言論を抑へ、選擧權を制限したから、パリーの市民は激昂して、暴動を起し、王はイギリスに逃れ、ブルボ

ベルギーの獨立

ルイ=フィリップ王の弊政

ン家の支流ルイ=フィリップ(Louis Philippe)迎へられてフランス國民(King of the French)の王となつた。これ卽ち七月革命(July Revolution)で、君臣の關係父子のそれの如きわが國體にこれを比すれば、眞に雲泥の相違である。自由主義の影響は今や全歐に擴がり、特に露帝の治下ポーランド王國では、ロシヤの支配を離れて完全な獨立を得ようとする運動起り、その結果却つてロシヤの屬領に變じた。なほウィーン條約で決められたネーデルランド王國で、北、オランダと南、ベルギーとが人種・宗教・經濟を異にする關係上、互に和合しなかつたが、七月革命の影響からベルギー獨立運動が起り、遂にその目的を達して、一八三一年局外中立國として列國の承認を得た。

㈡ 二月革命とその影響　七月革命で王位に上つたルイ=フィリップは當初巧みに平民風を裝ほひ、中等民を後援として王家の勢力を張るに努めたが、後には次第に專制に傾いて言論を壓し、また買收の惡弊を助長し、特に東方問題に失敗を招いて著しく人望を失つた。やが

圖解　一八四八年二月二十三日のパリー市街戰

二月革命の勃發

第二共和政治

ルイ=ナポレオン

て一八四八年二月、政府は選擧法改正の示威運動に彈壓を加へ、これを動機としてパリーの暴民が一時に蜂起し、王は位を辭してイギリスに逃れ、共和黨は社會黨と相結んで假政府を立てたが、遂に共和黨は社會黨を斥け、人民投票でナポレオン一世の甥ルイ=ナポレオン(Louis Napoleon)を任期四年の大統領に選んだ。(一八四八年十二月)　この二月革命(February Revolution)の影響は忽ち歐洲全土に波及し、中にもオーストリヤでは自由主義者の暴動起り、メッテルニヒが國外に逃れ、ホンガリヤでは志士コッシュート(Kossuth)等が主となつて獨立を計つたが、遂にその目的を果さずに終つた。

㈢ クリミヤ戰役とナポレオン三世　新に大統領となつたルイ=ナポレオンは自ら伯父の大ナポレオンに擬して、人望を收攬し、一八五

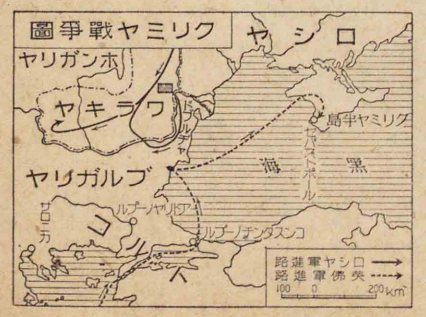
ナポレオンの「非常處分」(クーデター) Coup d'état.

圖解ナポレオン三世（一八〇八―七三年）父はナポレオン一世の弟ルイ―ボナパルト母はジョセフィーヌの女オルタンス Hortense

クリミヤ戰爭の原因

セバストポールの包圍

一年武力を以て反對黨を抑へ、憲法を改めて大統領の任期を十年とし、遂に國民の總投票に問うて帝位に上り、ナポレオン三世と稱した。（一八五二年）Napoleon III. その後ナポレオン帝は外交上、華々しき活動を演じて帝位を安固ならしめようと考へたが、帝がトルコよりパレスチナ聖蹟管理權を得るに及び、ロシヤもトルコに迫つてトルコ領内の全ギリシヤ教徒の保護權を要求し、その聽かれざるに及んで一八五三年戰を開いた。ナポレオンはこの機を逸せずイギリスと相結んでトルコを援け、遠くクリミヤ半島に兵を出し、更にサルヂニヤの援兵をも併せ、セバストポール（Crimea Sebastopol）の要塞を圍んで、一八五五年遂にこれを陥れた。翌年ナポレオンは關係列國代表をパリーに集め、いはゆるパリー條約を議定し、(一)ロシヤはギリシヤ教徒保護の要求を捨て、(二)黑海を中立として露土兩國共にその沿岸に武備を許さぬ定めとし、ロシヤ南下の希望は全く挫け、ナポレオンの威名は全歐に響いた。



赤十字社の起りし次第を考へよ

パリー條約

圖解ナイチンゲール女史　クリミヤ戰役の始め英軍に軍需品少く、且つ傷病者看護の設備なく將卒共に困んだ。女史特志看護婦を率ゐて戰地に至り看護に餘念なく「クリミヤの天使」の名一代に高まつた

ナポレオンの末路

四 ナポレオン三世とその末路　ナポレオンはまた內治にも意を注ぎ、教育をすすめ、交通を便にし、產業を盛にし、世界大博覽會をパリーに開いた。しかも一八七〇年國運を賭してドイツと戰を開いたが、遂に戰敗れてナポレオン家の沒落となり、第三共和政の時代が起り、巧に共和政の基を固めて今日に至つた。

五 フランスの國民性　フランス人は機敏にして頭腦明快、極めて天才的である。しかも勤儉にして貯蓄の美風を有し、また愛國の精

フランス人の特質

神に富み、第三共和時代に至つて國富み兵強く、歐洲列強の間に伍して遜色なきに至つた。しかも感激性強く小黨分立の弊に陷り易く、政體の變革がしばしば起つた。人口增加率の少いのも亦國運の將來に憂ふべき事柄である。

第三節　自由主義とイギリスの國力發展並にその國民性

イギリスの盛大

㊀イギリスの隆盛　イギリスは便宜な地理的位置と、强大な海軍力により、十八・九世紀を通じ、着々その植民地を擴大し、通商貿易を發展させ、なほ自由主義に基づく立憲政治の完成によつて國家の基礎を固め、政治上・經濟上驚くべき發展を遂げた。

產業革命もとイギリスに

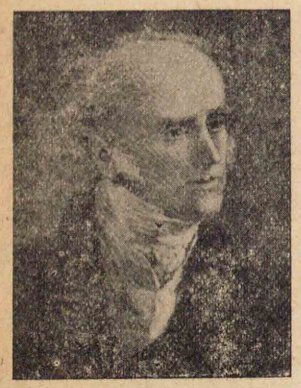
㊁產業革命と選擧法改正　十八世紀の後半、蒸氣機關や紡績機の發明により、家庭工業が一變して大工場組織に化し、なほ交通の改善によつて販路も擴大されるやうになり、ここに所謂產業革命（Industrial Revolution）となつ

起つて遂に歐洲大陸に波及した

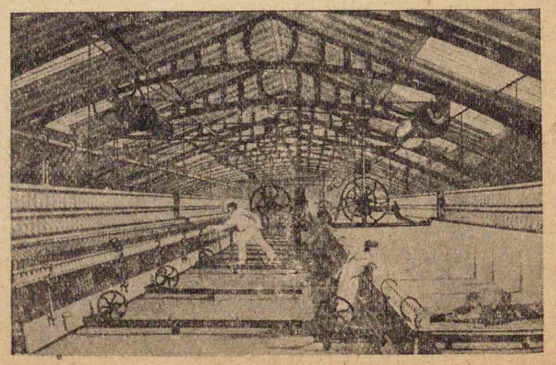
腐敗選擧區

商工業者の勢力增進

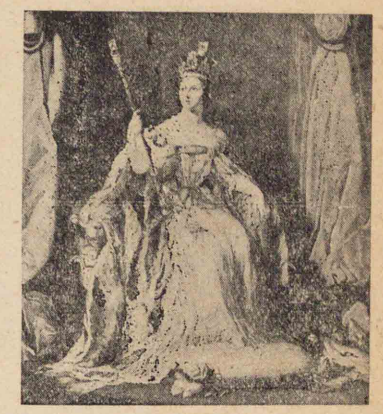
た。この結果、工場の起れるところは寂しき農村も忽ち殷盛の大都市と化した。然るに選擧區制は依然舊時のものに依り、新興大都市には議員選出の力なく、人口の少くなつた所謂腐敗（Rotten Borough）選擧區は、依然多くの議員を出し、商工業都市の不利益は多かつた。やがて七月革命後、選擧法の改正が主張され、グレイ（Grey）伯がイッグ內閣を組織するや、一八三二年貴族等の反對を排して、概ね腐敗選擧區を廢除し新興都市を選擧區に加へ、商工業者の力が政治を左右するやうになつた。なほこの後、選擧法に度々修正が加へられ、現世紀には普通選擧法が行はれ、女子にも參政



圖解　グレイ伯（一七六四年―一八四五年）一八三〇年ホイッグ內閣を組織す。一八三二年六月四日大多數を以て選擧法の改正に成功した



圖解　十八世紀の大紡績工業　アークライトの初期の紡績機に比べては著しい進步である（一二二頁挿畫參照）



ヴィクトリヤ女王

圖解ヴィクトリヤ女王（一八三七―一九〇一年在位）叔父ウィリヤム四世の後を承け、ハノーヴァー王朝第六代の君主となつた

圖解コブデン（一八〇四―六五年）穀物法の廃止

權が與へられた。

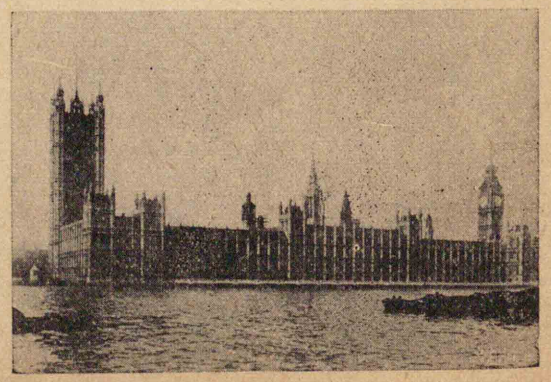
㊂ヴィクトリヤ女王と英國の發展　一八三七年ヴィクトリヤ女王（Victoria）が王位に卽き、諸般の方面に刷新が加へられ、實に英國は世界に誇るべき勢力を示した。ナポレオン戰後、議會は地主の利益を考へ、穀價の下落を防ぐため穀物法（Corn Law）を發して、輸入穀物に課稅をなし、下層民の困難が、甚だしくなつたが、コブデン（Cobden）・ブライト（Bright）等の努力から、一八四六年トーリー黨のピール（Peel）内閣の際、遂に同法令の廢止が實現された。なほ一八四九年には航海條例が廢止され、自由貿易主義が確立し、その後現世紀に特惠關稅法（Preferential Tariff）の定められるまで實に英國經濟策の中心であ

圖解ウェストミンスター英國議會　ロンドン、ウェストミンスター寺院の東南テームス河畔に立つ。現存のものは十九世紀前半の建築

保守黨内閣の功績

圖解ビーコンスフィールド伯ヂスレーリ（一八〇四―八一年）保守黨の大政治家。一八六八年始めて總理大臣となり、國權の振張に努む

つた。更に十九世紀後半、トーリー黨が保守黨（Conservatives）、ホイッグ黨が自由黨（Liberals）と改稱され、各自政見を定めて、議會に多數を占むる黨派が責任内閣を組織し、政黨政治の發展が著しかつた。そして保守黨は國威の發揚に力を致し、一八七五年同黨のヂスレーリ（Disraeli）内閣は、スエズ運河（Suez Canal）の株を買收して、後年エジプトに力を展ぶる素因をなし、同黨の變形なる統一黨のソールスベリー（Salisbury）内閣も、二國標準主義によつて大海軍の建設に努力し、その他アジヤにアフリカに、それぞれ國權を展べたのも、概ね同黨の施政時である。これに反して自



アイルランド問題

由黨は內政の改善に力を致し、アイルランド問題の解決にも功勞少なからざるものがある。アイルランド(Ireland)は十九世紀初め、英國に併合され、一八二九年には舊教徒たるアイルランド人も、代議士として英國議會に出ることが出來るやうになつた。しかし彼等は英本國と人種・宗教を異にする關係上、なほ種々な壓迫を受けて不平に堪へざるものがあつたが、十九世紀後半、ヴィクトリヤ女王の治世、グラッドストン(Gladstone)が自由黨內閣を組織し、アイルランドに特別議會を造つて自治を與へるやう努力し、その目的は果さなかつたが、人道政治家として後世に知られてゐる。

圖解　グラッドストン（一八〇九―九八年）自由黨の大政治家「アイルランドを安んずるは余の使命なり」と稱し、終始一貫、アイルランド問題の解決に努めた

グラッドストン

イギリス人の國民性

四　イギリスの國民性

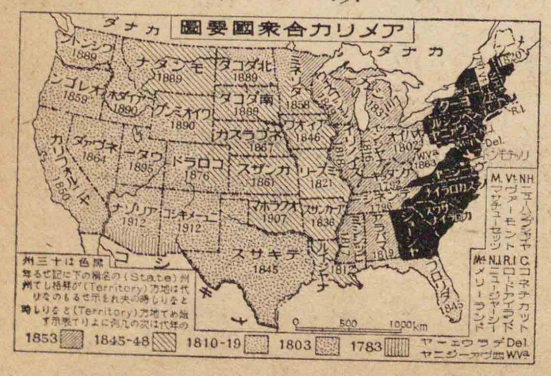
イギリス人は保守的なるも着實であつて、冷靜、常に常識を重んじて感情に囚はれず、極めて漸進的に且つ現實的である。社會道德に心を用ふると同時に、頗る利害の打算に長ずる。されば經濟上にも大なる進步をなしたと同時に、外交上にも少なからざる成功を博した。日英同盟によつて露の强大を抑へ、三國協商(Triple entente)によつてドイツの發展を阻(はば)んだのも、概ねこの例である。

アメリカの發展

第四節　自由主義とアメリカ合衆國の隆運並にその國民性

一　合衆國の膨脹

アメリカ合衆國は建國以來、領土の擴張に餘念無く、フランスからルイジヤナ、イスパニヤからフロリダを買ひ、またテキサス(Texas)を併せ、更にメキシコと戰つてニューメキシコ(New Mexico)・カリフォルニヤ等をとり、獨立後六十餘年にして、早くも太平洋岸に出ることが出來、一八五三

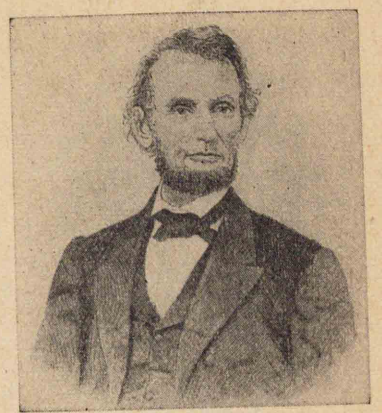


年には水師提督ペリーをわが國に遣はして通交を求めた。

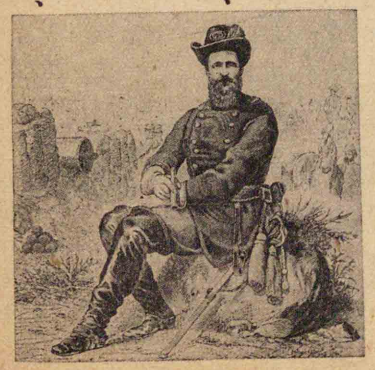
㈡南北戰役

合衆國の南北は少なからず國情を異にし、南部諸州は奴隷を使役して盛に農業を營み、且つ自由貿易を喜び、北部諸州は商工業に從事して保護貿易を主張し、なほ北部に勢力ある共和黨は中央集權を唱へ、人道上から奴隷使用に反對し、南部に根據をもつ民主黨は地方分權を主張し、經濟上より、奴隷の必要なことを力說し、事每に南北相爭つて止まなかつた。やがて一八六〇年、奴隷廢止論者の共和黨リンカーンが大統領に選ばれ、南部諸州は不平の極、分離を宣して別にアメリカ聯邦を組織し、都をリッチモンドに奠め、

南北戰役



圖解リンカーン大統領（アメリカ第十六代大統領、一八六一―六五年在任）一八四六年選ばれて下院議員となり、遂に大統領の榮職にすすむ



圖解グラント將軍（一八二二―八五年）南北戰爭に北軍の將として大功があり、後、兩度引續いて大統領となつた奴隷廢止論者リンカーン

Perry
Lincoln
Republicans
Democrats
The Confederate States of America
Richmond

翌年遂に北部諸州と戰を開き、五年に亙る南北戰役となつた。初め南軍がよく戰つたが、北軍の將グラントが善戰して勝ち、遂にリッチモンドを陷れて南部諸州が悉く復歸し、內亂ここに收まつた。戰役中リンカーンの出した奴隷解放令が、戰後全國に行はれて自由主義高潮し、南北の融合も逐次行はれて、新進の國力は全世界に振つた。

㈢モンロー主義の强要

メキシコ共和國は黨爭繁く、財政亂れ、一八六一年遂に外債支拂を中止した。爲に債權國なる英・佛・西三國は共同に出兵して、損害の賠償を約束させ、英・西兩國は兵を引上げた。然るに佛帝ナポレオン三世は、獨り兵をメキシコに留めて共和政治を廢し、別に帝政を布いて、ハプスブルグ家のマクシミリヤンを皇帝に迎へ、これをフランスの保護の下に置いた。しかし間も無くアメリカ南北戰役が止み、合衆國はモンロー主義に基づいて嚴重にフランスの不法を責め、ナポレオンは止むなくここに撤兵した。やがて

グラント將軍の善戰

英・佛・西の共同出兵

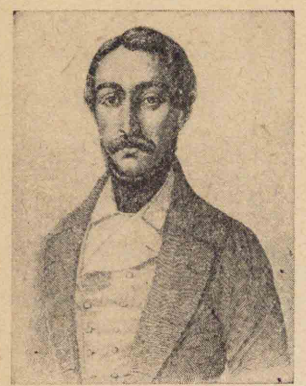
合衆國のモンロー主義主張

マクシミリヤンもメキシコ人に殺されて、共和政が復活し、ナポレオンの威名は全く地に墜ちてしまつた。

㊃合衆國の國民性　合衆國は新進の廣大な國土で、内に種々なる移民を包容し、統制が不完全なる如く考へられるが、アングロ・サクソン種が中心となつて、常識的に現實的に行動し、更に無限の經濟的資源を擁して、盛んに活動を續けつつある。

合衆國の國民性

第五節　自由主義・國民主義とイタリヤ王國の建設



圖解　マッチニ（一八〇五―七二年）　イタリヤ、ジェノアの人。民族的統一と共和國建設に努力し、カヴール・ガリバルヂと相並んで伊の三傑と稱せらる

㊀イタリヤ統一の運動　中世以來統一の無かつたイタリヤは、ウィーン會議後も諸小邦に分れ、オーストリヤ等外國の干渉も屢〻起つた。これがため七月革命後、志士マッチニ（Mazzini）等が出で、統一・自由を要求する運動が盛となり、特に北イタリヤのサルヂニヤの如きこの運動の中心であつた。

㊁イタリヤ統一戰役　サルヂニヤ王ヴィクトル・エマニュエル二世（Victor Emmanuel II.）は、夙にイタリヤの統一・自由を大成しようとし、賢相カヴール（Cavour）を用ひて内に憲政を布き、通商を盛にし、外はクリミヤ戰役に兵を出して、英佛兩國の同情を得、遂に佛帝ナポレオン三世と密約を結んで、フランス軍の援助を得、一八五九年オーストリヤと戰を開いた。この戰に聯合軍はマジェンタ（Magenta）・ソルフェリノ（Solferino）の戰に佛墺兩軍及サルヂニヤ王何れも軍を率ゐて奮戰し、戰鬪十五時間に及ぶ。

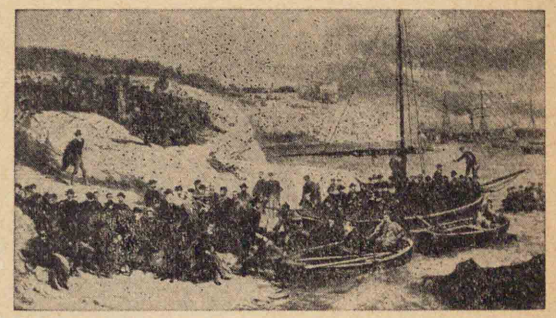
ヴクトル・エマニュエル二世

圖解　カヴール（一八一〇―六一年）　イタリヤ三傑の一人。實際的積極的の政治家

圖解　ソルフェリノの戰

伊佛聯合軍、オーストリヤに宣戰

ビラフランカの和議



圖解　ガリバルヂ、ナポリ王國攻略のためジェノア附近を船出す

ガリバルヂのナポリ攻略

トリヤからロンバルヂヤを得て、これをサルヂニヤに交付し、サルヂニヤをして戰を止めさせるに至つた。かくしてサルヂニヤの目的は大成されなかつたが、イタリヤの統一・自由の端はここに開けた。

㊂統一の進展　やがてエマニュエル王は王家の舊領ニース・サヴォイ（Nice, Savoy）をフランスに與へ、ナポレオンの内諾を得て、中部イタリヤ諸國民の希望を納れ、これを自國に併合した。（一八六〇）王は更に南下して法王領の大部を得、共和黨の志士ガリバルヂ（Garibaldi）の攻略せるナポリ王國を收めて、益々その勢を伸ばし、墺領ヴェニス並に法王領を除くイタリヤ全土を併有し、遂に一八六一年イタリヤ王の位に卽き、後四年にしてフロレンス（Florence）に都を奠めた。

イタリヤ王國成立

イタリヤ統一の完成

イタリヤの國民性

ドイツ聯邦の統制薄弱

第六節　國民主義とドイツ帝國並にその國民性

㊀ドイツ統一の進展　ウィーン條約によつて出來たドイツ聯邦はその統一が薄弱で、しかも各國それぞれ舊制を守つて專制政治が行

はれてゐた。されば自由主義と相並んで、國民統一の必要が叫ばれるやうになつた。十九世紀の前半、プロシヤが首腦となつて、北・中ドイツ諸邦と關稅同盟(Customs Union)を結び、各邦相互間の關稅を廢めて、一種の經濟的統一を試み、やがて南獨諸邦もこれに參加し、次第に政治的統一の傾向を生じた。更に二月革命の影響を受けてプロシヤのベルリンに騷擾が起つた際、王フレデリック＝ウィリヤム四世(Frederick william IV.)は民意に從ひて憲法を發布し、プロシヤ自ら中心となつてドイツ統一に盡力すべき旨を約した。しかもフランクフルトの國民議會(Frankfurt am Main)が、オーストリヤを斥けてドイツを統一し、プロシヤ王を仰いで世襲皇帝になさうと決議した際、王は時機未だ至らずとし躊躇してこれを

關稅同盟の成立

フレデリック＝ウィリヤム四世の政見

一八四八年より一八七一年までの歐洲要圖

ウィリヤム一世の統一思想

圖解　ウィリヤム一世　フレデリック＝ウィリヤム三世の子。一八五八年攝政。一八六一年プロシヤ王。一八八八年ドイツ皇帝

受けなかつた。

(二)プロシヤの雄圖とプロシヤ・オーストリヤ戰役

一八六一年ウィリヤム一世がプロシヤ王となり、プロシヤ自ら、中心となつて、オーストリヤを斥け、よりて以て民族統一を大成しようと企て、まづローン(Roon)を陸相に任じ、モルトケ(Moltke)を參謀總長に擧げ、ビスマルク(Bismarck)を擢んでて宰相とし、議會の反對にも屈せず、斷然軍備を擴張し、密かに機會の至るを待つた。偶〻一八六三年デンマルク王クリスチヤン九世が立ち、その兼領にしてドイツに關係深きシュレスウィヒ・ホルスタイン(Schleswig-Holstein)兩公國を分ち、シュレスウィヒを自國に併合した。兩公國の人民はその舊法に違ふの故に異議を唱へ、ドイツ

ビスマルクの英斷

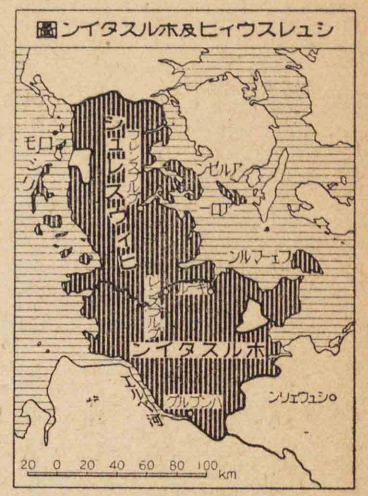
シレスウィヒ＝ホルスタイン問題

圖解　ビスマルク(一八一五—九八年)　一八六二—九〇年プロシヤの首相。一八七一—九〇年ドイツ帝國大宰相

普墺戰役（七週間戰役）（一八六六）

ケーニヒグレーツの戰

プラーグ條約



の兩雄プロシヤ・オーストリヤまたこれを責め、共に兵を連ねてデンマルクを討ち、兩公國を割取するに至つた。

しかるにその處置について普墺兩國間に紛議を生じ、一八六六年兩國遂に戰を交へ、聯邦の多くはオーストリヤに味方した。プロシヤはさきにフランスより中立の約を得、更にイタリヤと攻守同盟を結んでゐたので、今やイタリヤと南北相應じて敵に迫つた。かくてプロシヤ軍はケーニヒグレーツ Königgrätz に戰つて大勝を得、まさに進んでウィーンに迫らうとしたので、オーストリヤは遂に屈してプラーグ條約を結び、兩公國をプロシヤに割き、自らドイツ聯邦を離れ、更にヴェネチヤを割きイタリヤに與へた。かくてプロシヤは一八六七年自ら盟主となつて北ドイツ聯邦 North German Confederation をつくり、南ドイツ諸邦とも同盟を結び、ドイツ統一の事業は半ばここに達せられた。同年オーストリヤもまたホンガリヤを獨立させて、これと二元君主國 The dual Monarchy をつくり、依然歐洲の强國たる體面を保つた。

墺匈二元國成立

獨佛戰役（一八七〇—七一）わが明治三、四年にあたる

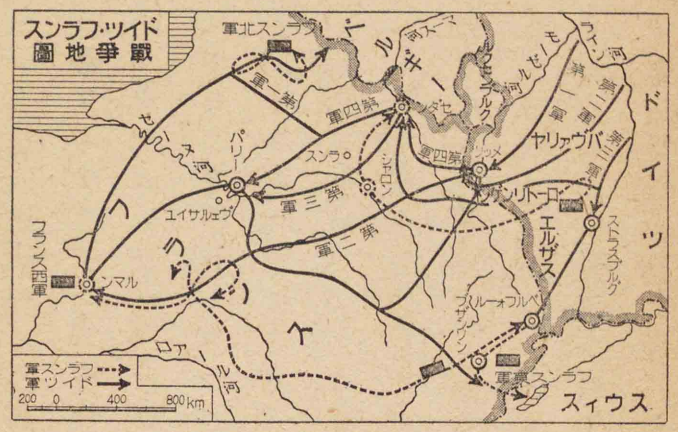
レオポルド迎立の紛議

獨佛開戰

㊂ドイツ・フランス戰役と帝國の大成　外交の失敗に惱めるフランス帝ナポレオン三世は、プロシヤがオーストリヤを破つて勢の日に盛なのを惧れ、ビスマルクも亦、ドイツ統一の大成のため、フランスを屈する必要ありと考へ、兩國の關係は日增しに險惡となつた。偶〻一八六八年イスパニヤに內亂起り、ここに國民は女王イサベラ Isabella を廢してプロシヤ王族レオポルド Leopold を迎立したが、ナポレオン帝の反對に會うて、レオポルド自らこれを辭することになつた。されど帝はこれに滿足せず、更にプロシヤに迫つて將來、レオポルドをイスパニヤ王たらしめぬ保證を得ようとし、プロシヤのこれに應ぜざるに及んで戰を宣し、一八七〇年ドイツ・フランス戰役 Franco-German War が起つた。

パリーの包圍

ヴェルサイユ假條約



この戰にプロシヤはドイツ諸邦の援けを得、總軍八十餘萬、モルトケ將軍の巧妙な作戰により、忽ちフランスに侵入し、メッツの要塞を圍み、セダンにナポレオン帝を圍んでこれを降し、進んでパリーを包圍した。やがて市民が起つて帝政を廢し、共和假政府を作り、防ぎ戰ふこと四ケ月、食は盡き兵乏しく、一八七一年一月遂に開城し、假政府行政長官チエール（Thiers）、ビスマルクとヴェルサイユに會して假條約を結び、ついでフランクフルトでこれを確認し、フランスはエルザス・ロートリンゲン二州を割き、五十億フランの償金を出した。これ（Elsass(Alsace) Lothringen(Lorraine)）より先、パリーの開城前、ウィリヤム一世はドイツ諸邦の望を納れ、ヴェル

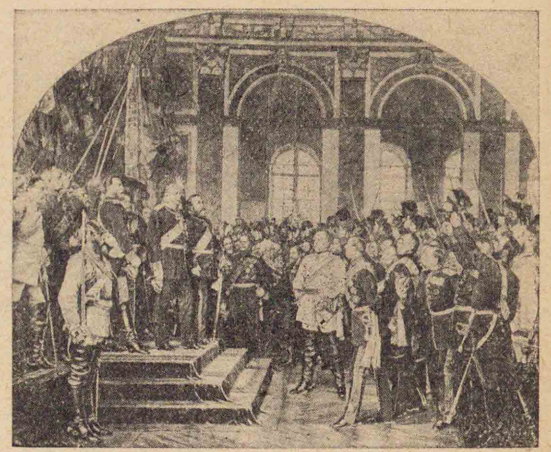
ドイツ皇帝卽位

圖解　ウィリヤム一世ドイツ皇帝卽位式　壇上中央に立つはウィリヤム一世。壇下ビスマルク・モルトケの兩功臣立つ。王に向つて右側右手を擧げて萬歲を呼ばふはバーデン太公フレデリック

ビスマルクの下野

ドイツの國民性

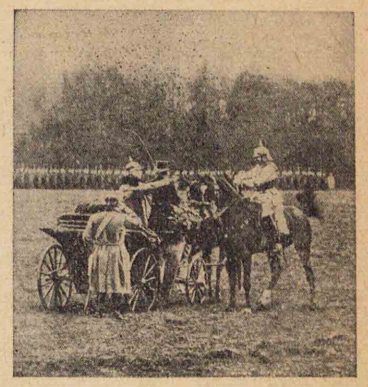
我が國の親ドイツ的傾向について考へよ



サイユ宮に於てドイツ皇帝の位に卽き、統一の業が始めてここに大成した。やがて憲法が定められ、プロシヤ王は帝位を世襲して帝國の大權を統べ、各邦代表の聯邦議會（Bundesrat）と、國民代表の帝國議會（Reichstag）が立法を掌ることとなつた。帝國創立の功臣ビスマルクは、當初の帝國宰相として內政外交の刷新に任じ、產業をすすめ、通商を盛にし、植民地を開き更に同盟を以て外交の基礎を固め、國勢日に隆盛に赴いた。一八八八年ウィリヤム二世帝が立ち、ビスマルクは野に下り、新帝は意のままに諸般の刷新を行ひ、その國力は全歐を壓せんばかりとなつた。」

四　ドイツの國民性

ドイツ人は勤勉にして意志强く、よく義務を



圖解　一八九〇年ビスマルク宰相を辭して野に下り、己が別邸フリードリッヒスルーエに退隱したが、ウィリヤム二世は態々該地に觀兵式を行つて老功臣を招じ、これを慰めた

守つて愛國の至誠に富んでゐる。フランス人のやうに天才的ではないが、組織力・綜合力に富んで、理論の究明に於ては獨特の力を備へて居り、政治に、經濟に、學術に大なる業績を殘してゐる。ただ驕慢で自負心に強きがため、まま計らざる失敗を招くの惧がある。

第七節　國民主義とロシヤ帝國並にその國民性

㈠ロシヤ南下の趨勢と露土戰役　ロシヤではペートル大帝以來バルカン半島に南下を企つる希望があり、十九世紀には或はギリシヤの獨立を援け、或はエジプト問題に干與し、またクリミヤ戰役をもひき起すに至つたが、何れも充分その目的を達することが出來なかつた。さてクリミヤ戰後、總スラヴ主義とて、バルカン半島居住の凡

ロシヤの南圖

總スラヴ主義

ゆるスラヴ族をロシヤに併せて、大スラヴ帝國を造らうといふ大國民主義の運動起り、ロシヤは密に南進の機を窺つてゐた。當時トルコは多年の弊政に苦しみ、人民は疲れ、財政は亂れ、殊にトルコの回教徒は、ギリシヤ舊教を奉ずる領内のスラヴ族を壓すること甚だしかつたので、一八七五年、ボスニヤ（Bosnia）・ヘルツェゴヴィナ（Herzegovina）まづ叛き、セルビヤ（Serbia）・モンテネグロ（Montenegro）これを援け、ブルガリヤ（Bulgaria）亦應じ、加ふるにトルコのブルガリヤ人虐殺が行はれて、歐洲列國の同情もバルカンのキリスト教徒に集まり、ロシヤは英・獨・墺諸國と相携へて、内政改革をトルコに迫つた。しかしトルコの改革に何等誠意が認められなかつたので、ここに露帝アレクサンドル二世は、斷乎キリスト教保護を名として、一八七七年トルコに宣戰した。

圖解　アレクサンドル二世帝（一八五五―一八八一年弑殺）農奴解放にも力を致した

トルコの暴政

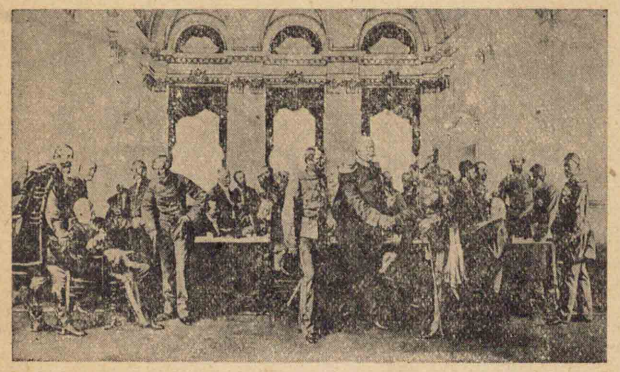
露土戰役の起因

㈡露土戰役の結果とベルリン會議　や

がてロシヤ軍はドナウ河を越え、トルコの勇將オスマン=パシャ(Osman Pasha)の守れるプレヴナ(Plevna)の要塞を圍んで、これを拔き、更に勢に乘じてコンスタンチノープルに迫らうとし、一方別軍は黑海の東岸を、アルメニヤ(Armenia)に向つて前進した。ここにトルコは力窮まつて援をイギリスに求め、ロシヤはイギリスの干渉を喜ばず、急にトルコとサン=ステファノ(San Stefano)ノ條約を結び、バルカン諸邦の獨立を認め、特にブルガリヤの領土を增して半獨立の國とし、ロシヤの威力をこの方面に展べようと計つた。かくて英國の宰相ヂスレーリは、露國の勢力が近東に增加するを忌み、自らバルカンに勢を張らうとするオーストリヤと相結んで、極力この條約に反對し、方にロシヤに戰を開か

プレヴナの防戰

サン=ステファノ條約



圖解　ベルリン會議の光景
前列ビスマルク(獨)と握手せるはシュワロフ(露)で、ビスマルクに向つて直ぐ左はアンドラシー(墺)左方、半ば體を傾くるはヂスレーリ(英)これと談話を交ふるはロシヤ全權ゴルチャコフである

うとしたが、ドイツ宰相ビスマルクが種々仲裁の勞をとつて、一八七八年いはゆるベルリン會議(The Congress of Berlin)が開かれ、(一)トルコ領ルーマニヤ・セルビヤ・モンテネグロが獨立し、(二)ブルガリヤは前條約に定められた領土を大に削られて、キリスト教君主を戴く半獨立國となり、(三)オーストリヤはボスニヤ・ヘルツェゴヴィナの軍事及び行政權を委任され、(四)トルコはイギリス・ギリシヤ・ロシヤにそれぞれ領土の一部を讓與し、(五)更にトルコは自國領內に信教の自由を認むることとなつた。かくてロシヤのバルカン占有の目的は、充分成功せず、却つてオーストリヤ・イギリスの勢力增進を見るやうになつた。これより

ベルリン會議(一八七八)
わが國では西南の役の翌年

ベルリン條約要項

㊂近代ロシヤの狀勢

これより

農奴の解放

露の東進

先、アレクサンドル二世は自由主義に轉じて、農奴の解放を行つたが、その結果は豫想に反して、帝の專制政治が復せられ、國内は勿論ポーランドに對しても極端なる壓迫が加へられ、それがため帝は無政府主義なる虚無黨に弑せられた。次ぎのアレクサンドル三世は保護政策で産業をすすめ、シベリヤ鐵道で極東に勢力を展べようとし、遂にニコラス二世に至つて、戰を我が國に開いて大敗し、内は專制主義によつて一般の民望を失ふことになつた。

圖解　アレクサンドル三世帝（一八八一―一八九四年在位）

ロシヤの國民性

四　ロシヤの國民性　ロシヤ人は質朴粗野にして文化の程度が低く、加之、迷信的信仰强く、時として極端な行動に走るやうな惧がある。なほロシヤは領内に雜多な異民族を包容し、しかも亂暴極まる專制政治が續けられ、爲に廣大な領土を有するにも係はらず、國内は常に不安動搖に充ち滿ちてゐた。

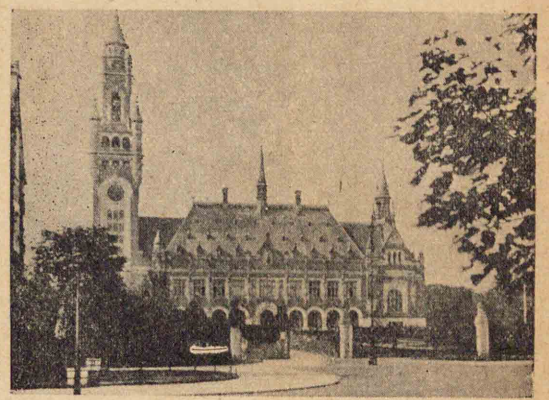
ロマンチック主義と尚古主義

帝國主義

國際協調主義

第五章　最近世の文化

一　最近文明の基礎　十八世紀に榮えた啓蒙主義は、社會萬事みな傳統を排し、純理に從つて解釋せんとする風があるので、その結果理想を無視して、現實を喜ぶやうなことになり、これが反動として十八世紀末から、十九世紀にかけ、歴史・理想・感情を重要視する理想主義並にロマンチック主義（Romanticism）、更に合理的・功利的なるも、なほ且つ啓蒙主義に異つて、精神生活をも重んずる尚古主義（Classicism）の勃興となつた。歴史を重んずるロマンチックの影響は民族統一主義・國家主義を呼び起し、國家主義の發展は帝國主義（Imperialism）をもひき起すやうになつた。次に功利的な尚古主義の各個人の價値を重ずるところから、世界的傾向を馴致し、それに近代交通・通信機關の發達が影響し、ここに國際協調主義また世界平和主義を生むに至つた。一八六四年に出來た萬國赤十字同盟



ハーグ萬國平和會議

圖解ハーグの平和堂　一九〇七―一三年創立。この建設に際し米國のカーネギーは百五十萬弗を寄附した。通例、平和會議の會場に使用されてゐる

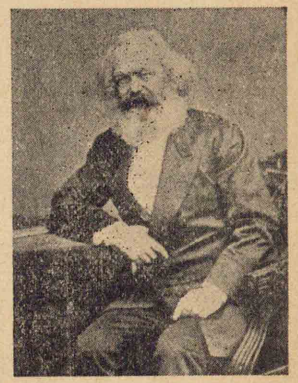
社會主義は共產主義にまで進んでは弊害が多い

の如きは、戰時敵味方の別なく、傷病者救護を目的とするので、人類愛に立脚せる世界的なものであり、一八九九年・一九〇七年兩度、オランダのハーグ(The Hague)に開かれた萬國平和會議(The International Conference)の如きは、國際協調(International Concert)の明かな現はれである。」その他萬國博覽會・萬國郵便聯合・萬國電信聯合、さては世界大博覽會の如きも、國際協調に立つて人類の幸福を計れるものである。合理的な啓蒙主義から出で、功利的な尙古主義に影響された、いはゆる自由主義は、國家主義と相結んで、いよいよ立憲主義を盛にし、また普通選擧や婦人參政權の叫びをかたため、更に產業革命後の勞働問題を解決せんため、自由民主主義から社會主義(Socialism)への發展を促し、ドイツのカール=マルクス(Karl Marx)の如き、特に

圖解カール=マルクス　(一八一八―八三年)　唯物史觀によつて社會を見た現實主義(實證主義)

新理想主義

圖解ダーウィン　(一八〇九―八二年)　科學の發展



この主義に學問的の組織を與へた最初の人物である。啓蒙・尙古兩主義の現實的傾向に立脚し、理想主義及びロマンチック主義の非現實的傾向に反抗し、十九世紀の中頃に起つた現實主義(實證主義)(Realism Positivism)は、いよいよ科學の振興を促し、思想界を風靡した物質主義・自然主義もその一端の現はれである。なほこれに對する反動が十九世紀の後半に起り新理想主義等の勃興となつた。

(二)科學の進步と應用

十七・八世紀に活動の基礎を固めた科學の研究は、十九世紀以降現實主義の影響から長足の進步をなし、いはゆる科學の時代をつくり、天文學・數學・物理學・化學・醫學・動植物學等みな多大の

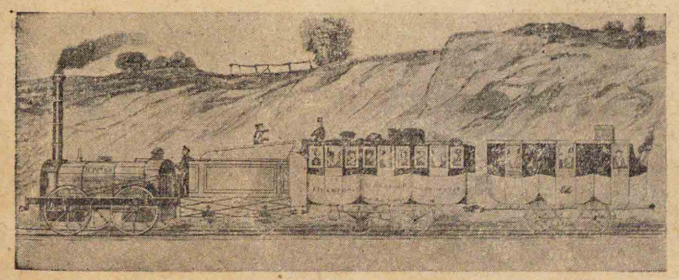
種の起源

進歩を遂げ、諸種の發明・發見も續々と起つた。中にもイギリスのダーウィン Darwin の進化論、ドイツのマイエル Mayer・ヘルムホルツ Helmholtz の相對性原理の如き、その遙に後のアインスタイン Einstein の學界に及ぼせる影響は甚大なものがある。科學應用の發明では、蒸氣力の利用によつて生れたアメリカ人フルトン Fulton の汽船、イギリス人スチヴンソン Stephenson の汽車、さては電氣の利用から生れた米人モース Morse の電信機、エヂソン Edison の電燈、イタリヤ人マルコニー Marconi の無線電信、英人グラハム=ベル Graham Bell の電話、また現代に於けるラヂオの如き特に注目に値する。ガソリン=モーターの利用は現代に至つて盛に起り、自動車・飛行機・飛行船の發明となり、軍事の方面にも少なからず影響がある。その他ドイツ人レントゲン Röntgen のX放射線、細菌學

汽車・汽船の發明

圖解 スチヴンソン 發明の初期の汽車

交通々信機の進歩



醫學の進歩

圖解 フィヒテ（一七六二―一八一四年）哲學・史學

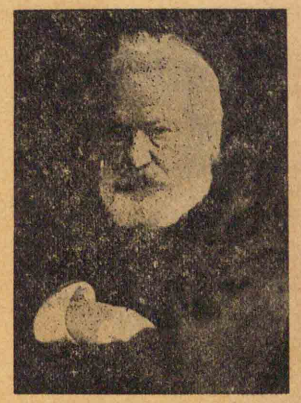
圖解 ランケ（一七九五―一八八六年）

圖解 カーライル（一七九五―一八八一年）文學

者コッホ Koch等の血清療法の如き、醫術の進歩を示すものも少くなく、地理學進歩に伴うて起つた、ノルウェー人アムンゼン Amundsen の南極探檢の如きも、近代文化の發展を示してゐる。

㊂ 哲學・文藝

哲學では十九世紀にドイツのフィヒテ Fichte・ヘーゲル Hegel等がカント後に出で、理想主義哲學を完成し、フランスにはコント Comte が出で實證主義の哲學を創めた。史學ではドイツ人ランケ Ranke が出て科學的研究法を大成し、史界の泰斗と稱せられてゐる。文學では十九世紀にバイロン・テニスン Tennyson・スコット Scott・カーライル Carlyle 等が英國に、ハイネ Heine



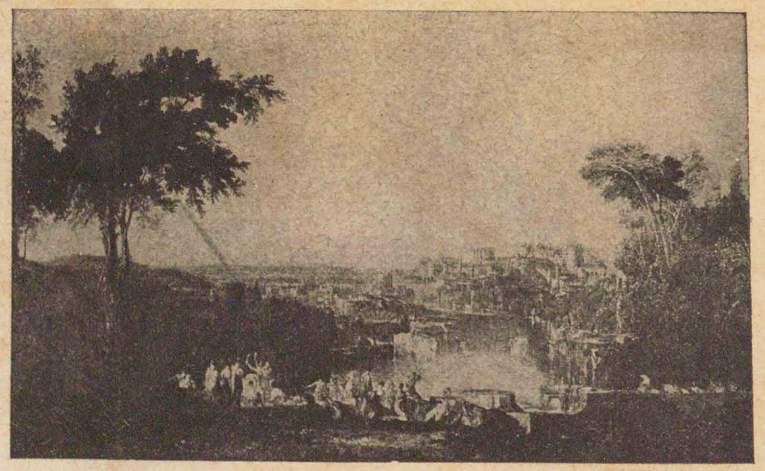
圖解ユーゴー（一八〇二―八五年）

繪畫の進展

印象派

がドイツに、ユーゴー Hugo がフランスに出で、共にロマンチック派の文豪と呼ばれ、更に十九世紀の中頃以後、自然主義の文學が盛んに起つて、フランスのゾラ Zola、ロシヤのトルスト Tolstoi イ、ドイツのズーデルマン Sudermann、ノルウェーのイブセン Ibsen 等がその名聲を稱せられてゐる。繪畫では最初、ロマンチック派と古典派が盛んに、次いで自然派がこれに代り、後には自然科學の實證的傾向に動かされた印象派 Impressionismus が勢を奮うた。十九世紀にフランスに出たデラクロア Delacroix・コロー Corot はロマンチック派の名手であり、同じくフランスのダヴィッド David は古典派の巨匠として知られてゐる。またフランスのミレー Millet は十九世紀に出て、自然派の父と呼ばれ、フランスのマネ Manet、イギリスのターナー Turner は印象派の大家と稱せられ、彫刻界の天才ロダン Rodin も、現世紀の初めフランスに出で、同じく印象派の名匠である。

ロダンのアダム



ターナーのヂドー及びエネアス

ロダンのアダム（上）

オーギュスト＝ロダン（一八四〇―一九一六）はフランスに於ける有名な彫刻家で、印象派の巨匠である。もと浪漫主義から出で印象主義の長所を遺憾なく發揮するに至つた。その傑作には「考へる人」（カレーの「戰士」等）様々あるが、ここに掲ぐるアダムも彼のものせる逸品であり、今パリーのロダン作品陳列館に藏されてゐる。

Auguste Rodin
The thinker
The warrior
of Calais

ターナーのヂドー及びイエネアス（下）（ロンドン、ミルバンク國民繪畫館藏）

ウイリアム＝ターナー（一七七五―一八五一）は英國に出た印象派の著名なる畫家である。驚くべき力を以て、光の作用を描寫するに妙を得た。その作品の著名なものは概ね海畫に關するものであつて「雪嵐」（Steamer in the snow-storm）「中の汽船」等特に著はる。ここに掲ぐる「ヂドー及びイエネアス」（Dido and Aeneas）も傑作の一、トロイ亡命の將イエネアスが圖らずも難風に遭ふてカルタゴの海岸に漂着し、ここに同國の女王ヂドーと會ひ見るに至れるところを表はしてゐる。

William Turner

同	一八五九	イタリヤ統一戰役起る（―一八六〇）。ヴィラフランカ假條約結ばる	神奈川長崎函館の三港を開く、佛國柴棍を占領す
同	一八六一	イタリヤ王國建設。北米合衆國の南北戰役起る（―一八六五）	和宮降嫁
同	一八六二	ビスマルク、プロシヤの首相となる	前年北京條約
同	一八六四	萬國赤十字社起る。シュレスウイヒ＝ホルスタイン問題起る	生麥事件
同	一八六五	北米合衆國南北戰役終結す	佛國越南侵略
同	一八六六	普・墺戰役。プラーグ條約	長州征代
明治	一八六八	イスパニヤに革命起る	長髮賊の亂平ぐ
同	一八六九	スエズ運河開通	德川慶喜將軍となる
同	一八七〇	獨佛戰役起る（―一八七一）	一年前慶喜大政奉還
同	一八七一	ドイツ帝國成る。ヴェルサイユの和議。イタリヤ統一完成	版籍奉還
同	一八七六	ヴィクトリヤ印度女帝となる	廢藩置縣
同	一八七七	露・土戰役起る（―一八七八）	神風連の變
同	一八七八	サン＝ステファノ條約。ベルリン會議	西南役起る

が圖らずも難風に遭ふてカルタゴの海岸に漂着し、ここに同國の女王ヂドーと會ひ見るに至れるところを表はしてゐる。

大事年表四、最近世史

年代					事蹟	
日本	支那	世紀	西紀	西洋	東洋（日本及びその他）
光格	清高宗	十八世紀	一七八九	フランス大革命起る	
同	同		一七九二	フランス共和政となる。第一回對佛大同盟結ばる（—一七九七）	二年前、德川家齊將軍となる
同	同		一七九三	恐嚇時代（—一七九四）。第二回ポーランド分割行はる	
同	同		一七九五	第三回ポーランド分割行はる	露號事件
同	仁宗		一七九六	ナポレオン、イタリヤを征す	
同	同		一七九七	カンポ＝フォルミオ條約結ばる	
同	同		一七九八	ナポレオン、エジプトに遠征す。アブキールの浜戰	
同	同		一七九九	第二回對佛大同盟成る（—一八〇二）	
同	同		一八〇〇	フランス統領政治（—一八〇四）。ナポレオンのオーストリヤ遠征	近藤重藏、擇捉に標柱を建つ
同	同		一八〇一	リュネヴィルの和議成る	伊能忠敬蝦夷地を實測す
同	同		一八〇二	アミヤンの和議成る	露使レサノフ交易を求む
同	同		一八〇四	ナポレオン、フランス皇帝となる（—一八一四）	
同	同		一八〇五	第三回對佛大同盟成る。トラファルガルの海戰。アウステルリッツの戰	ロシヤ人樺太に寇す
同	同		一八〇六	ライン同盟成る。神聖ローマ帝國亡ぶ。大陸封鎖令	露人蝦夷に寇す
同	同		一八〇七	チルジットの講和。フルトン汽船を發明す	間宮林藏樺太を探檢す
同	同		一八〇八	半島戰役始まる（—一八一四）	
同	同		一八〇九	ナポレオン、一世オーストリヤを征す	
同	同		一八一二	ナポレオン、一世ロシヤを征して敗る	蒲生君平歿す
同	同		一八一三	ヨーロッパ獨立戰役。ライプチヒの戰	伊能忠敬沿海實測全國を完成す
同	同		一八一四	ナポレオン、一世エルバ島に流さる	
同	同		一八一五	ウィーン列國會議開かる（—一八一五）。ナポレオンのセント＝ヘレナ流謫、神聖同盟成る	
同	同		一八一七	ワーテルローの戰	
仁孝	宣宗		一八二一	ギリシヤ獨立戰役起る（—一八二九）	ドイツ人シーボルト長崎に來る
同	同		一八二三	モンロー主義宣言さる	將軍家齊太政大臣となる
同	同		一八二七	ナヴァリノの海戰	

同	同	一七九二	大ルス大統領となる（一七九七）。第一回對佛大同盟結ばる（一七九七）。恐嚇時代（一七九四）。第二回ポーランド分割行はる	
同	同	一七九三	第三回ポーランド分割行はる	
同	同	一七九五	ナポレオン、イタリヤを征す	
同	仁宗	一七九六	カンポ＝フォルミオ條約結ばる	
同	同	一七九七		
同	同	一七九八	ナポレオン、エジプトに遠征す。アブキールの海戰	
同	同	一七九九	第二回對佛大同盟成る（一八〇二）	
同	同	一八〇〇	フランス統領政治（一八〇四）。ナポレオンのオーストリヤ遠征	十八世紀
同	同	一八〇一	リュネヴィルの和議成る	
同	同	一八〇二	アミヤンの和議成る	
同	同	一八〇四	ナポレオン、フランス皇帝となる（一八一四）	
同	同	一八〇五	第三回對佛大同盟成る。トラファルガルの海戰。アウステルリッツの戰	
同	同	一八〇六	ライン同盟成る。神聖ローマ帝國亡ぶ。大陸封鎖令	
同	同	一八〇七	チルジットの講和。フルトン汽船を發明す	
同	同	一八〇八	半島戰役始まる（一八一四）	
同	同	一八〇九	ナポレオン一世オーストリヤを征す	
同	同	一八一二	ナポレオン一世ロシヤを征して敗る	
同	同	一八一三	ヨーロッパ獨立戰役。ライプチヒの戰	
同	同	一八一四	ナポレオン一世エルバ島に流さる	
同	同	一八一五	ウィーン列國會議開かる（一八一五）。ナポレオンのセント＝ヘレナ流謫、神聖同盟成る。ワーテルローの戰	
同	孝宣宗	一八二一	ギリシヤ獨立戰役起る（一八二九）	
同	同	一八二三	モンロー主義宣言ぜる	
同	同	一八二七	ナヴァリノの海戰	
同	同	一八二九	アドリヤノープルの和議。ギリシヤ獨立す	
同	同	一八三〇	七月革命。ポーランド・イタリヤの動亂。スチヴンソン汽車を發明す	
同	同	一八三一	ベルギー獨立す	
同	同	一八三二	イギリス選擧法改正成る	
同	同	一八三三	ウンキアル＝スケレシ條約結ばれ、東方問題起る	
同	同	一八三七	イギリス女王ヴィクトリヤ卽位す（一九〇一）	
同	同	一八四〇	ロンドン條約結ばる（東方問題につき）	
同	同	一八四六	穀物法の廢止	
同	孝明	一八四八	二月革命。サルヂニヤのイタリヤ統一運動起る	
同	同	一八五二	ナポレオン三世、フランス皇帝となる（一八七〇）	
同	同	一八五四	クリミヤ戰役起る（一八五六）	
同	同	一八五五	セバストポール陷落す	
同	同	一八五六	パリー條約締結さる	
同	同	一八五七	イギリス、フランスと清國との戰始まる（一八六〇）	
同	同	一八五八	イギリス、インドを直轄とす	
同	同	一八五九	イタリヤ統一戰役起る（一八六〇）。ヴィラフランカ假條約結ばる	
同	同	一八六一	イタリヤ王國建設。北米合衆國の南北戰役起る（一八六五）	
同	穆宗	一八六二	ビスマルク、プロシヤの首相となる	
同	同	一八六四	萬國赤十字社起る。シュレスウイヒ＝ホルスタイン問題起る	
同	同	一八六五	北米合衆國南北戰役終結す	
同	同	一八六六	普・墺戰役。プラーグ條約	
明治	同	一八六八	イスパニヤに革命起る	
同	同	一八六九	スエズ運河開通	
同	同	一八七〇	獨佛戰役起る（一八七一）	
同	同	一八七一	ドイツ帝國成る。ヴェルサイユの和議。イタリヤ統一完成	
同	德宗	一八七六	ヴィクトリヤ印度女帝となる	
同	同	一八七七	露・土戰役起る（一八七八）	
同	同	一八七八	サン＝ステファノ條約。ベルリン會議	

同	尊號事件
同	
同	
同	
同	
同	
同	近藤重藏、擇捉に標柱を建つ
同	伊能忠敬蝦夷地を實測す
同	
同	露使レサノフ交易を求む
同	ロシヤ人樺太に寇す
同	露人蝦夷に寇す
同	間宮林藏樺太を探檢す
同	
同	蒲生君平歿す
同	伊能忠敬沿海實測全國を完成す
同	
同	ドイツ人シーボルト長崎に來る
同	將軍家齊太政大臣となる
同	松平定信・近藤重藏卒す
同	
同	賴山陽歿す
同	大鹽平八郎の亂。德川家慶將軍となる
同	阿片戰役起る
同	
同	二年前、清國に長髮賊の亂起る
同	一年前、ペルリ浦賀に來る。德川家定將軍となる
同	江戸大地震、藤田東湖死す
同	蕃書取調所を置く
同	アロー號事件起る
同	米使ハルリス將軍に謁し條約を結ぶ。ムガール帝國滅ぶ
同	安政の大獄。愛琿條約
同	神奈川長崎函館の三港を開く、佛國柴棍を占領す
同	和宮降嫁
同	前年北京條約
同	生麥事件
同	佛國越南侵略
同	長州征代
同	長髮賊の亂平ぐ
同	
同	德川慶喜將軍となる
同	一年前慶喜大政奉還
同	版籍奉還
同	
同	廢藩置縣
同	神風連の變
同	西南役起る

第五編　現代史（十九世紀末より現代に至る）

第一章　列強の世界政策

國家主義の發展

世界政策（帝國主義）

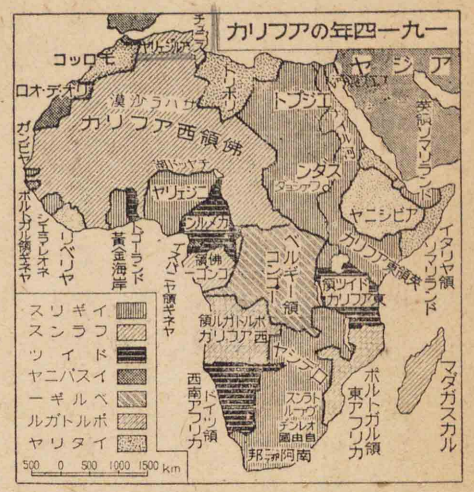
暗黑大陸の探檢

㊀帝國主義の發展　十九世紀の後半以降、歐洲列强の國家主義が頗る發展し、列國競うて國力充實・軍備擴張を計り、なほ各國何れも急激な人口增加を示し、その經濟組織の著しく變化して、生產力增大せる結果、列國競うて原料を海外に求め、新市場を世界各方面に開くの必要に迫られ、ここに國權の弱きところ、所有權の確實ならぬところ、努めてこれを求めて經營し、屬領或は保護國となし、またその經濟的利權を得んとした。所謂世界政策、一に帝國主義（Imperialism）と云ふものである。

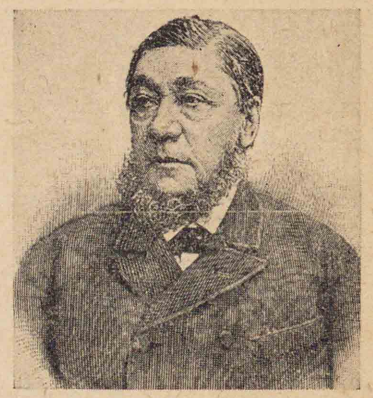
㊁列强のアフリカ經營　アフリカはもと「暗黑の大陸」（Dark Continent）と稱せられ、列國の顧みるところとならなかつたが、十九世紀後半に、英人リヴィンストン（Livingstone）

スエズ運河開通

アラビ=パシャの亂



グストン及びスタンリーの探檢からその眞相が判明し、ここに列國爭うて帝國主義的經營を企つることになつた。(イ)英國の經營　十九世紀の後半、フランスのレセップスがスエズ運河を開く計畫を立て、遂にエジプト藩王に勸めてその事業を完成した。その後イギリスは藩王の財政難を利用して、その所有株全部を買入れ、ここに勢力をエジプトに伸すの端を開いた。やがてエジプトのアラビ=パシャが、外人排斥を企てて兵を擧げた際、イギリスは獨力を以てこの亂を平定し、事實上エジプトはイギリスの保護領となつた。なほウィーン會議で英國はケープ植民地の占有を認められ、同地居住のブール人(オランダ植民の子孫)は、英人の支配を好まず



圖解トランスヴァール共和國大統領クリューゲル　英國の要求を拒んで、移住英人に參政權を與へず、南阿戰役が爲に起つた

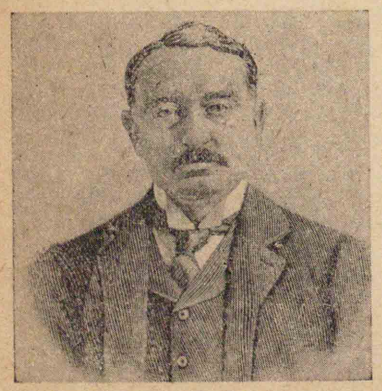
南阿戰役(一八九九―一九〇二年)

セシル=ローズの偉業

圖解セシル=ローズ(一八五三―一九〇二年)

佛のアフリカ經營

に、北に移つてオレンジ自由國とトランスヴァール共和國を建設した。然るにこれら兩國に金や金剛石が出で、イギリス人も次第に多く入り込んだが、兩國政府はイギリスの要求通り、移住民に參政權を與ふるを欲しなかつたので、一八九九年英國は戰を宣し、攻戰四年遂にこれを滅ぼし植民地に加へた。やがて英國は同植民地にナタルを併せ、南アフリカ聯邦を組織し、さきにローデシヤの開發に當つた、奇傑セシル=ローズの遺策をついで、アフリカ縱貫鐵道の敷設にその歩を進め、エジプトと南阿の連絡を企つるに至つた。(ロ)佛國の經營　一八三〇年フランスは兵を出して北アフリカのアルジェリ



ヤを取り、一八八一年チュニス(Tunis)を保護國とし、更にサハラ沙漠(Sahara)よりコンゴー(Congo)に至る、廣大な地域を收め、なほマダガスカル島(Madagascar)を取り、一八九八年、コンゴーよりするアフリカ横斷策を立て、一時ファショダ(Fashoda)を占領したが、イギリスの抗議に會うて撤退した。次いで一九一一年モロッコ(Morocco)の内亂に干與して兵を出し、翌年その保護權を得るに至つた。かくて七年戰役後振はなかつたフランスの植民的勢力は、ここに復興の氣運に向つた。(ハ)ドイツ及びその他の經營　ドイツはビスマルクの晩年、内政の整理がおほかた終つて、世界政策の實行にその手をそめ、一八八四年以降西南アフリカ・東アフリカ・カメルン(Kamerun)・トゴランド(Togoland)等の諸植民地を開き、ベルギーは一八八五年中央アフリカに、コンゴー自由國を起し、イタリヤはソマリランド(Somaliland)を開いて後、一九一一年トルコに戰を挑み、翌年その植民地のトリポリ(Tripoli)を割取した。

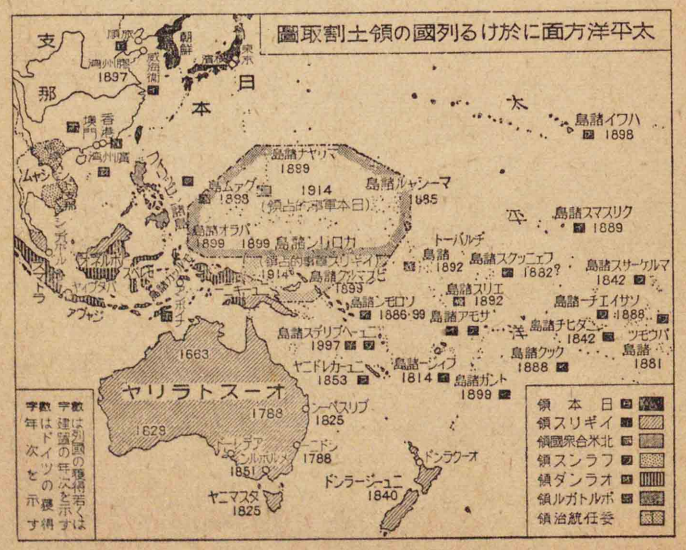
ファショダ問題

ドイツのアフリカ經營

大洋洲爭奪

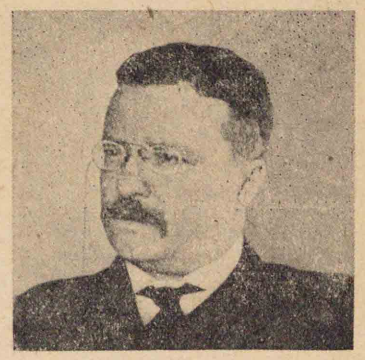
㊂大洋洲に於ける列國の活動と米國　大洋洲もまた列國爭奪の目的地と化し、先づイギリスは十九世紀の初め、オーストラリヤ(Australia)の植民を始め、農牧業や砂金の採取に從事し、更にニュージーランド(New Zealand)等の諸島を併せ、一九〇一年オーストラリヤ聯邦(Commonwealth of Australia)を造り、これに自治を與へた。ドイツの世界政策も亦、この方面に急激なる發展を示し、ビスマルクの晩年、英蘭兩國と共にニューギニー(New Guinea)を分割し、なほビスマルク群島・マーシャル(Marshall)群島を取り、ついでウィルヘルム二世親政の時、マリヤナ群島(Mariana)・カロリン(Caroline)群島等をイスパニヤより買ひ、米國と相計つてサモア(Samoa)群島を分割するに至つた。米國は十九世紀の後

オーストラリヤ聯邦



アメリカの帝國主義

半、國力が大に發展し、一時モンロー主義を抛つて帝國主義を採り、先づアラスカをロシヤから買取り、次いでマッキンリー大統領時代、キューバの叛亂に干與してイスパニヤに戰を開き、キューバを保護國とし、フィリッピン群島等を得、更にハワイ王國の内亂を利してこれを奪ひ、着々太平洋上に根據を固めた。やがて米國は大統領ルーズヴェルトの時、パナマ運河の開鑿を企て、一九一四年、遂に完成し、運河支配權を收めて太平・大西兩洋上に雄視することとなつた。



圖解　ルーズヴェルト大統領　第二十六代大統領（一九〇一年就任―一九〇九年辭任）

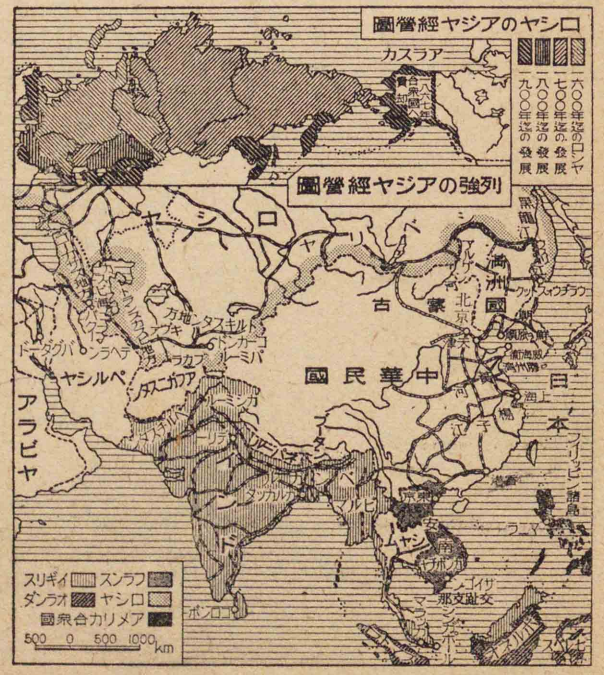
パナマ運河の開通

ヴィクトリヤ、インド女皇となる

㊃ 列强のアジヤ經營

（イ）英國　東インド會社による英國のインド經營は、十九世紀に至つてその大半を完了し、一八五七年モガール帝國をうち滅ぼし、翌年本國政府が會社に代つてインドを統治し、一八七七年ヴィクトリヤ女皇はインド女皇の位を兼ね、總督を置いて政務を行はせた。かくてインドは英國の寶庫として重要な地位を占め、西はベルチスタンを保護國として、露の南下を抑へ、東、バルマを併せて佛の西侵に備へた。更に英國はシンガポールをとりマラッカを得、太平・印度兩洋の關門を扼し、遂に支那に出て香港をとり、威海衛を租借し、英の帝國主義はアジヤの南方から北に向つて、一大飛躍を試みんとするやうになつた。（ロ）ロシヤ　ロシヤは十九世紀の後半盛にアジヤに活動し、中央アジヤに進出してインドに於

英國の帝國主義



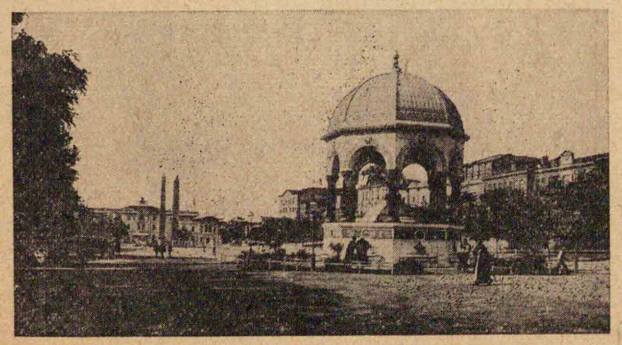
ロシヤの南下

日露戰役（一九〇四―一九〇五年）

佛のインド支那經略

けるイギリスの利權を脅し、東、シベリヤ(Siberia)より南下して黑龍江方面に力を展べ、更に北滿の地より南に下つて朝鮮を脅かし、ひいて新興日本の國防線を危ふくし、ここに日本は露の南下を恐れる英國と接近して、日英同盟を結び（一九〇二年）、遂にロシヤと戰つて大勝を博した。（一九〇四年―一九〇五年）

(ハ)佛國　フランスは露の極東政策を援けつつ、自らインド支那の侵略に從事し、安南よりサイゴン(Saigon)・コーチ支那(Cochin China)をとり、遂にカンボヂヤ(Cambodia)及び安南を保護國とし、更に北に出で、清國から廣州灣を租借するに至つた。(ニ)ドイツ　ドイツは國内の統一既に終つて、世界政策を行ひ、遂に清國より膠州灣を租借し、更に三B政策をとつて、トルコを懷柔し、ベルリン(Berlin)よりコンスタンチノープル（ビザンチウム）(Byzantium)を經てバグダード(Bagdad)に鐵



國際關係の變動

一八九八年トルコ懷柔の目的からコンスタンチノープルを訪問したる獨帝ウィリヤム二世は訪問の記念として八角形の旗亭を造りこれを贈つた。天井の四周にはWIIといふ己が名の略字とトルコの帝冠を交錯して表出し、亭内には噴水數條を迸らしてゐる

ドイツの三B政策

道を敷設し、やがて英國のインドに於ける利權を脅かさんとするに至つた。

第二章　世界大戰（上）

一　國際關係の變動

三國同盟と二國同盟

ドイツ・フランス戰役後、ドイツはビスマルクの政略に從ひ、フランスの復讐戰に備ふるため、先づオーストリヤと同盟し、次いでチュニスをフランスに取られて、不平を懷けるイタリヤを誘ひて同盟に加へ、一八八二年所謂獨・墺・伊の三國同盟(Triple Alliance)が成立した。よつてフランスはロシヤと相結んで所謂二國同盟(Dual Alliance)を組織し、三國同盟に對立した。しかもこれら二大同盟に對して英國は、強大な海權に護(マモ)られてよく「名譽の孤立(Glorious Isolation)」を守り、十九世紀末以降、二十世紀の初めにかけ、ヨーロッパの平和はこれら三大勢力平均の上に、辛うじて維持せられた。然るにその後ドイツの海權が擴大され、產業は急激に發

エドワード七世のドイツ包圍策

圖解　エドワード七世王　ヴィクトリヤ女皇の子。ジョージ五世の父。在位は一九〇一―一九一〇年　三國協商成立

二大國民主義の爭

展し、英國の地位は著しく脅かされ、ここに英王エドワード七世は、所謂「ドイツ包圍策」によつて先づ佛國に近づき、日露戰後にロシヤとも提携し、一九〇七年所謂英・佛・露三國協商(Triple entente)の成立を見るに至つた。かくてヨーロッパは二大勢力對抗の形勢となつたが、その裏面には各國とも、これらの結合を利用して帝國主義實現の後援たらしめようとの希望があり、機に乘じて烈しき競爭を誘致する惧があつた。

㈡ 二大國民主義の衝突

十九世紀以後、總スラヴ主義(Panslavism)總ゲルマン(Pangermanism)主義の二大國民主義が對立し、前者はロシヤが主となつてスラヴ種族の諸國を聯ね、自らの權力をうち立てようとし、後者は獨・墺二國が主となつてゲルマン諸國を併せ、その勢力を發展させようとし、常に統制の無いバルカン方面で、互に死力を盡して爭つたのである。されば青年トルコ黨の改革もその效無く、トルコの國力は日々に衰へ、遂に一九〇八年オーストリヤに親しきブルガリヤ(Bulgaria)が獨立を宣し、墺國自らもボスニヤ・ヘルツェゴヴィナの併合を公けにした。これ實に總ゲルマン主義の勝利であつたのである。その後、一九一一年、イタリヤがトルコの衰弱に乘じ、その領トリポリを奪はんとトルコに戰を開いたが、かねて機會を窺つてゐたセルビヤ・ブルガリヤ・モンテネグロ・ギリシヤ四

ブルガリヤ獨立宣言

圖解　バルカン諸邦の首腦　上、向つて右よりブルガリヤ王フェルヂナンド、ギリシヤ王ジョージ、トルコ帝マホメット五世、下、向つて右よりルーマニヤ王カロル、モンテネグロ王ニコラス、セルビヤ王ペートル　イタリヤ・トルコ戰役

國もこのトルコの難儀に乘じ、それぞれ自領を擴ぐるため、一九一二年同盟してトルコに戰を宣した。ここにトルコは止むなくイタリヤにトリポリを割き、力を專らにして四國に當つたが、戰敗れ、一九一三年多くの地を割いて和を講じた。

第一、第二バルカン戰役

ブカレストの和議

三年多くの地を割いて和を講じた。トルコは元來ドイツの盟邦であるから、この戰に敗れたのは取も直さず總ゲルマン主義への打擊であつた。然るに割讓地の分配から同盟四國の間に爭を生じ、ブルガリヤの要求が過大であるとて他の三國がこれを討ち、ルーマニヤもこれに加はり、ブルガリヤは遂に屈して、一九一三年ブカレストの和を結んだが、聯合四國は何れもその領土を增し、ブルガリヤのみは前戰役の所得を大に減殺された。このこともオーストリ

大セルビヤ主義

圖解墺國皇太子夫妻

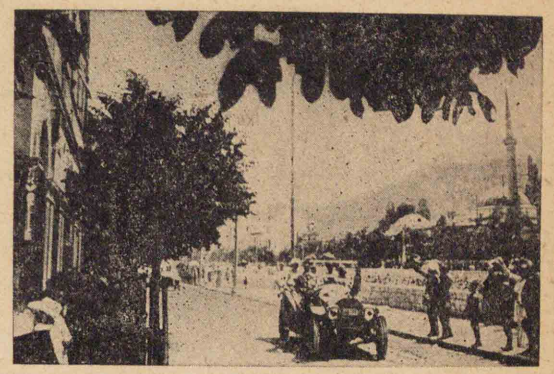
フランシス＝フェルディナンド（皇太子）＝ホーヘンベルグ公爵夫人（皇太子配）
フランシス＝ジョセフ（老帝）（一八四八―一九一六年）
チャールス＝ルイ

サライェヴォの兇變

ヤに親しいブルガリヤの失敗であつたので、同じく總ゲルマン主義の敗北であつた。かくバルカンを中心とせる二大民族主義の爭が續いたので、兩者の不和は益〻加はり來つた。

㊂ サライェヴォの暗殺と大戰の勃發

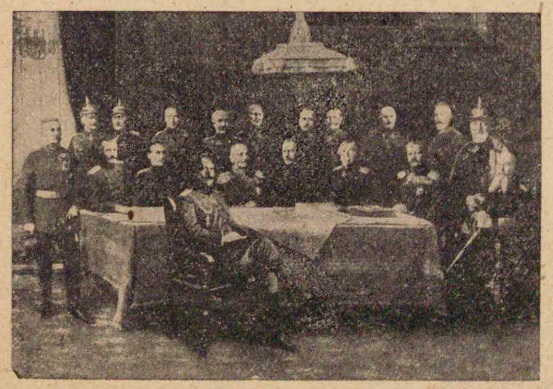
セルビヤはその同じ民族（スラヴ系セルビヤ人）の居住する諸地方を併せて、大セルビヤを建設し、以て總スラヴ主義の先鋒となる考であつたが、オーストリヤは事每にその行動を妨げ、特にボスニヤ・ヘルツェゴヴィナを併合してセルビヤの發展を阻止したので、墺國に對する反感は大に高まつた。偶〻一九一四年六月墺國皇太子フェルヂナンド太公夫妻が、ボスニヤのサライェヴォ（Sarajevo）で大セルビヤ主義の一青年に暗殺され、爲に墺國はセルビヤに最後通牒を送つて嚴重に詰問し、遂に



圖解　一九一四年六月二十八日墺國皇太子夫妻遭難前數秒の撮影（ウィーン陸軍博物館藏）

圖解　カイゼル、ウィリヤム二世とその幕僚　卓の此方に座せるはウィリヤム二世帝、卓の彼方に座せるは向つて右からチルピッツ・ヒンデンブルグ・モルトケ、立てるものにて右より二人目ベートマン＝ホルウエヒ

兩國間の平和が破れ（七月）ロシヤは總スラヴ主義の關係でセルビヤを援けんとし、ドイツは三國同盟と總ゲルマン主義の關係から墺國を援けてロシヤに戰を宣し、フランスも亦、三國協商の關係と往年の敗戰に報復せんため、ドイツに戰を宣した。やがてドイツがベルギーの中立を破つて、フランスに兵を進めようとしたので、イギリスはその不信を咎めてドイツと開戰し、以て三國協商に對する義を全うし、我が國も亦東洋平和のため、且つ日英同盟の誼（ヨシミ）のため、



大戰の勃發

ドイツに戰を宣し、千古未曾有の世界大戰はかくして始まつたのである。（一九一四年八月）

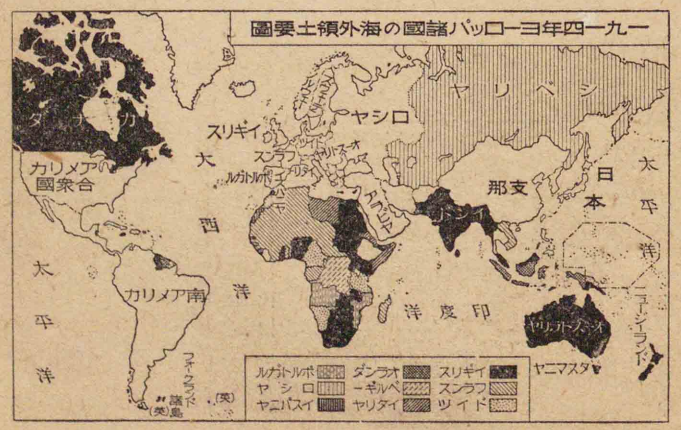
第三章　世界大戰（中）

The World Wide War

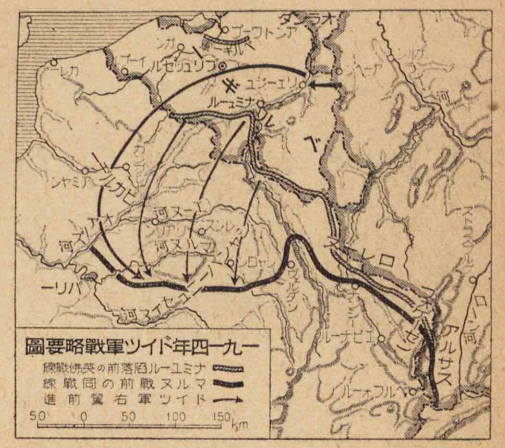
❶ 一九一四年戰　開戰當初、ドイツは先づ佛國を一擧に粉碎し、直に軍を還してロシヤに當るの策戰をとり、一九一四年八月ベルギーの中立を犯し、その抵抗を排してフランスに入り、疾風の如くパリーに向つて前進したが、佛の名將ジョッフル（Joffre）の率ゐる英佛聯合軍のため、マルヌ（Marne）

圖解　ジョッフルとイタリヤ王ヴィクトル＝エマニュエル三世

マルヌ河の戰

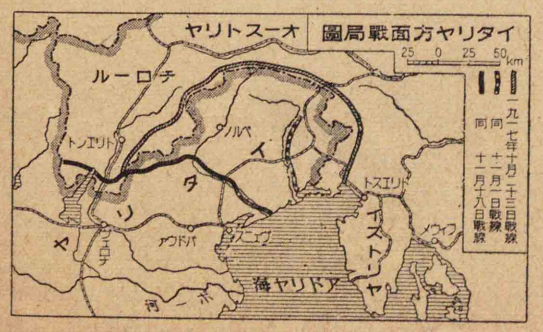


タンネンベルグの戰



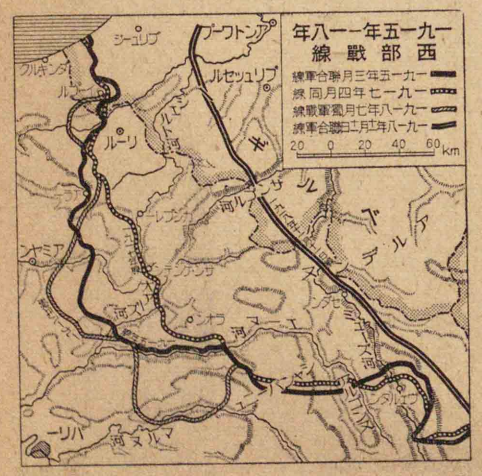
末）士氣大に振ひ、更に墺軍を援けてガリチヤを復し、ポーランドに攻め込んだ。

㈡ 一九一五年及び一九一六年戰　一九一五年ドイツ軍は進んでロシヤ軍を破りポーランドを占領し、また三國同盟にありながら、密に形勢を窺河の一戰に敗れ（九月）、退いて陣地を固め、ここに持久戰の姿をとるに至つた。この間東方では一時露軍が優勢を示し墺領ガリチヤを侵し、その別軍はまた東プロシヤを攻めたが、ドイツの名將ヒンデンブルグ Hindenburg はこれをタンネンベルグ Tannenberg に破つて（八月）、



ダーダネルス海峽砲擊

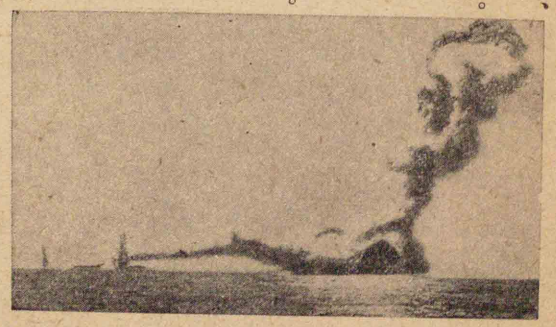
る變化を與へた。この間英佛聯合艦隊は、大擧してダーダネルス海峽 Dardanelles に迫り、さきに同盟側に應じたトルコを攻擊したが、その目的を果さなかつた。一九一六年ドイツは海陸包圍の難境にあつて、戰の永びくのを恐れ、主力を西部戰線に集め、ヴェルダン要塞 Verdun に猛襲を試みたが、佛軍ヴェルダン要塞戰



てゐたイタリヤは、斷然聯合側（協商側）に加はつて、オーストリヤに戰を開いた。しかもバルカンのブルガリヤは奮起して同盟側（獨墺側）を援け、共にセルビヤを占領して、戰の前途に大な

の抵抗は意外に頑強を極め、防禦すること數箇月、遂に敵を擊退し、獨軍に三十萬の犧牲を拂はせた。なほバルカンのルーマニヤ(Roumania)も聯合側に與みして兵を擧げたが、ドイツ・ブルガリヤの兩軍が相呼應してルーマニヤを攻め、殆どその半ばを占領した。海軍に於ては聯合側は常に同盟側を壓し、五月英獨兩艦隊ユトランド沖に戰を交へ、始め英國側が大なる損害を受けたが、後には敵艦隊に損傷を與へて退却させ、これを北海に封鎖して制海權を收め、やがてドイツの植民地は逐次イギリスの攻略するところとなつた。

圖解ユトランド沖の戰　英艦クーンリメリー爆破の光景



ユトランド沖の海戰

圖解潛水艇の跋扈を表示した英國の記念メダル　中央潛水艇に蹂するポセードンを畫き、周圍に獨文にてドイツの標語たる「神よ英國を罰せよ」と刻し、「一九一五年二月十八日」と加へてある

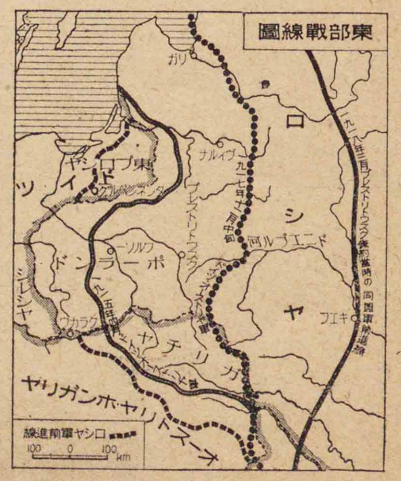
無制限潛水艇戰

(三)一九一七・八年戰　一九一七年二月、ドイツは英國の海上封鎖に對する報復として、無制限潛水艇戰を開始し、從前よりドイツの潛水艇に惱める米國が、ここに斷然ドイツに戰を宣し、聯合國側に參加し(四月)諸邦のこれに倣ひてドイツと交を斷つものが續出した。しかもこれより先、三月ロシヤに革命が起つて、聯合側に不測の禍をもたらした。ロシヤはかねてより、階級上・民族上の不平に充ち、自由民主主義が極端に走つてゐたが、大戰のため生活が困難となり、官僚の腐敗も暴露し、遂に革命が起つてニコラス二世(Nicholas II.)が位を退き、ロマノフ(Romanoff)家三百年の帝政が仆れて、一時、假共和政府が造られたが、やがて十一月に過激黨の領袖レニン・トロツキー(Lenin Trotzky)等が假政府

ロシヤ三月革命

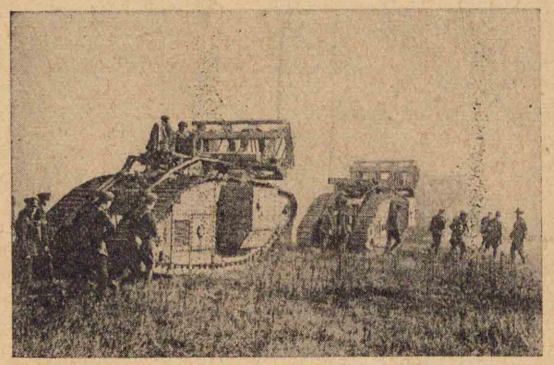
ロマノフ王朝顚覆

圖解ニコライ・レニン　本名、ウラヂミルウリヤノフ Uladimir Ulianoff



ブレストリトウスク單獨條約

を仆し、共産主義のソヴィエト政府を立て、ドイツとブレストリトウスク(Brest-Litovsk)に單獨條約を結び、ルーマニヤはここに孤立して同盟側と和する(一九一八年)の止むなきに至つた。ロシヤの屈服に力を得たドイツ軍は、一九一八年三月、大擧して西部戰線に猛擊を加へたが、英佛軍はアメリカの精鋭を併せて、名將フォッシュ(Foch)の下に統制され、獨軍の攻勢衰ふるをまつて、却つて攻勢に轉じ、全線にわたつて進擊した(九月)。かくてバルカンの形勢に動搖を生じ、ブルガリヤ・トルコが相次いで屈服し、次いでオーストリヤも休戰し、ハプスブルグ朝が仆れて共和政が起つた。ドイツも兵員補充の困難と、革命思想の勃興から、十一月ウィリヤム二世帝(ホーエンツオレルン家 Hohenzollern)の退位となり、共和政府が起つて十一月十一日の休戰となつた。



フォッシュ將軍進擊を冷す

圖解　イギリス、タンク隊の活動「タンク」は大戰に始めて用ひられた新武器

ドイツの革命

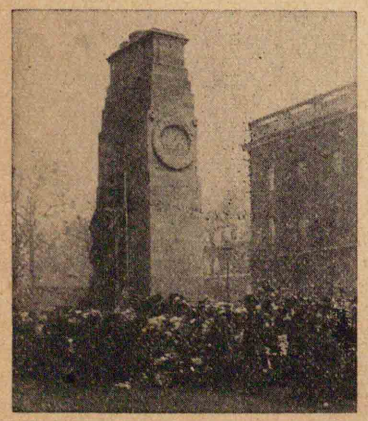
第四章　世界大戰(下)

一　大戰の結果

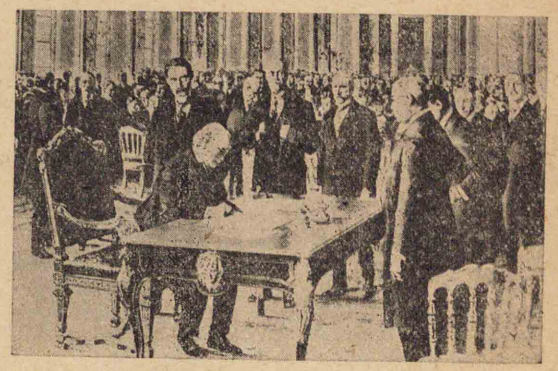
世界大戰はその參加國數よりせば三十二國、參戰の兵數は約六千八百萬、兵の損耗は約三千三百萬、戰費三千餘億圓、しかも新鋭の銃砲・航空機・戰車(タンク)・潛水艇等を利用して約四年半に亙り力を競うた、眞に有史以來の大活劇といひ得る。かくて戰後平和欲求の念が頻りに昂(タカ)まつたが、これと同時に發展の機を得た民族自決主義(The Principle of Self-determination of Nations)・國家主義が高調され、且つその實現を見るに至つたのは見脫(ノガ)すべからざる事實である。

圖解　パリー凱旋のフォッシュ・ジョッフル兩將軍先頭の兩將軍中、向つて右ジョッフル、左フォッシュ

大戰の結果



圖解　英國無名戰死者の墓ロンドン市内にある

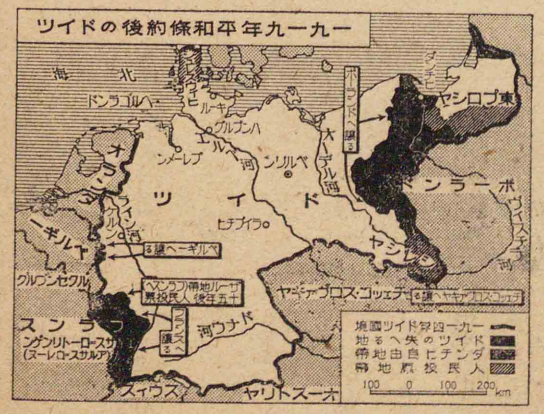


パリー講和條約

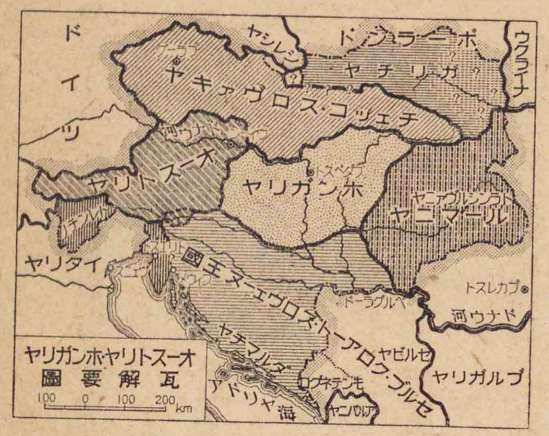
圖解ヴェルサイユ條約調印の光景　今、署名してゐるのは英のロイドジョージである。この折日本も戰勝國の一員として西園寺侯爵等が全權として參列し、爾後わが國は世界列國の先端に立つて活躍した

ヴェルサイユ條約及びその他諸條約の要項

㊁講和條約の大勢　對獨休戰の成立後、一九一九年一月より、聯合諸國の代表がパリーに集まつて講和條約案を作り、六月にはドイツ全權をヴェルサイユに招いて調印させ、その後、オーストリヤ・ブルガリヤと、翌年トルコと何れも調印を了するに至つた。條約には米國大統領ウィルソン(Wilson)の非併合・非賠償の主張が納れられず、フランスのクレマンソー(Clemenceau)等の峻酷な要求に決定を見た。その條項の主要なものは、(一)ドイツはエルザス・ロートリンゲンをフランスに還



へし、(二)ベルギー及び復興ポーランドに若干の地を割き、但し上シレシヤでは人民投票により、ドイツ・ポーランドの間に所屬を決する(Upper Silesia)、(三)北シュレスウィヒ(North Schleswig(Nord Schleswig))も同じく人民投票で、ドイツ・デンマルクの間に所屬を定める(Plebiscite)。(四)ドイツは賠償の責に任ずる(金額は將來の賠償委員會にて定む)。(五)ドイツは陸海軍を著しく制限され、且つ海外領土の全部を喪ふ(この喪失植民地は聯合側諸國の委任統治となる)。(六)オーストリヤは分解して、墺・匈兩國及チェコ=スロヴァキヤ(Czechoslovakia)・セルブ=クロアート=スロヴェーヌ(もとのセルビヤ等も加はつてゐる)(Serbcroatsloveniés(Yugoslavia))の大體民族別に基づく四箇の國家となり、ロシヤの崩壞によつて生れたフィンランド(Finland)・エストニヤ(Esthonia)等諸獨立國と相並んで、民族自決主



義の隆盛を示し、(七)更にオーストリヤはイタリヤ・ルーマニヤ等にも地を割き、(八)トルコもギリシヤ・イタリヤに地を與へ、(九)國際聯盟(League of Nations)の成立によつて、今後、戰爭の起るを防ぎ、世界の平和を維持するといふのである。

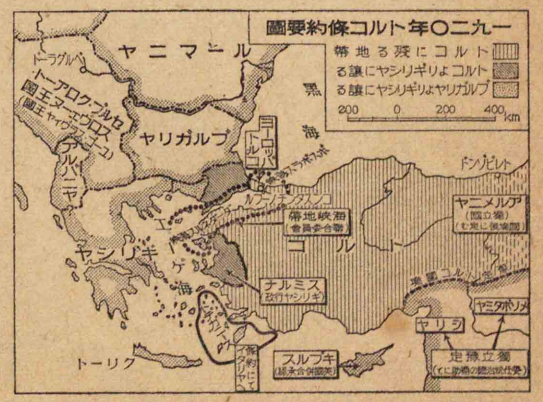
平和主義

第五章　大戰後に於ける列國の狀勢

㊀ドイツ賠償問題の紛議

ヴェルサイユ條約ではドイツの賠償金を出す原則だけが決まつて、總金額が定まらなかつたが、一九二一年のロンドン會議で、總額千三百二十億金マルクを課することになつた。然るにドイツは支拂不可能なことを主張し、容易にその責務を行はなかつたので、フランスは强硬論を唱

巨額のドイツ賠償金



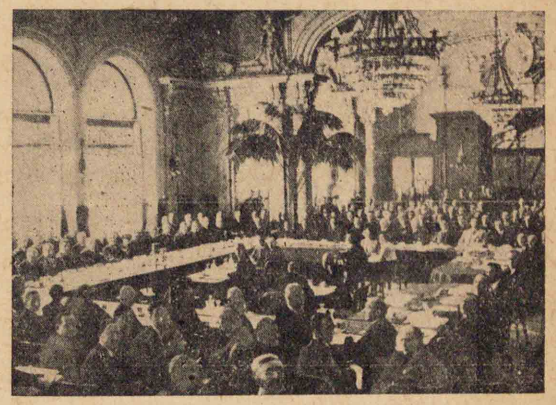
へて、ベルギーと共に、一九二三年ドイツ工業の中心地帶ルール地方(Ruhr)を占領した。その結果、ドイツの產業は衰へ、財界は不振となり、紙幣は暴落し、物價が騰貴し、民衆が大に困しみ、佛國の財政もまた行詰つた。そこで列强はその救濟を計り、一九二四年ロンドン會議でドーズ案(The Dawes Plan)を採用し、五箇年間にドイツの支拂ふべき年額を決定し、その後はドイツの經濟狀態に應じ、支拂年額を增させるやうに決し、フランスもこれに滿足し、ルールから撤兵を行つた。その後ドイツの經濟的回復が段々進み、一九二五年のロカルノ(Locarno)列國會議では、ドイツの國際聯盟加入が認められ、列國國境の安全が保證され、次いで一九二九年には、ヤング案(The Young Plan)の成立を見、向後ドイツの支拂ふべき賠償總額を、三百五十八億餘マルクと定め、これを一九二九年から約五十九箇年間に完濟させることにし、ドイツの負擔が非常に輕められた。しかしドイツの經濟回復はなほ充分でなかつたので、一九三二年のローザンヌ(Lausanne)會議

ルール地方の占領

ドーズ案

ヤング案

ローザンヌ會議



ヒットラーの活躍

圖解ローザンヌ會議の光景　一九三二年六月十六日、ローザンヌ、ボー＝リヴァージュ＝ホテル（Hôtel-Beau-Rivage）で開かる

ドイツ共和國の成立

ンヌ會議で、將來支拂ふべき賠償總額を三十億マルクと定め、ヤング案の支拂殘額三百二十億餘マルクに比し、大なる輕減を得ることとなつた。翌年ドイツで國粹社會黨のヒットラー（Hitler）が政權を得たが、彼の方針は賠償全額をも拒否しかねまじき有樣であつたので、フランスその他の不安は大なるものがあり、且つドイツ賠償金の減額は、米國に戰債を有する英・佛等諸國の支拂にも影響を與へ、國際經濟の前途に暗影を投じた。

㈡ 現代ドイツに於ける國粹主義　ドイツでは世界大戰の末、帝政が廢されて聯邦共和政が起り、社會民主黨のエーベルト（Ebert）が第一回大統領に選ばれたが、その歿後、大戰當時の名將として遍ねく崇敬されてゐたヒンデンブルグ（Hindenburg）元帥が大統領になり、人民黨の領袖ストレーゼマン（Stresemann）を擢んでて外相とし、國際協調主義を以て國家の難局に當り、賠償問題等も比較的順調に進んだのである。しかし一九三三年にはヒットラーが中心となつて國粹社會主義（National-Socialism）の內閣を組織し、次で人民宰相となり異民族排斥・植民地回收・陸海軍備平等等を唱へた。かくて內は國粹主義の精神を以て疲弊せる國力の恢復を圖り、外は往時の總ゲルマン主義の精神を擴充して、大ドイツ國を建設し、以て英・佛諸國の壓迫を排除しようとした。

ヒンデンブルグ大統領

圖解市民に圍まれた大統領ヒンデンブルグ　第二回大統領、一九二五年就任、再選して（因に大統領の年限は七年）一九三四年任半ばに歿し、ヒットラー立つて人民宰相となり、ザール（Saar）の人民投票に勝ち軍備制限條項を廢棄し、（一九三五年）ラインランド再武裝を宣言した（一九三六年）

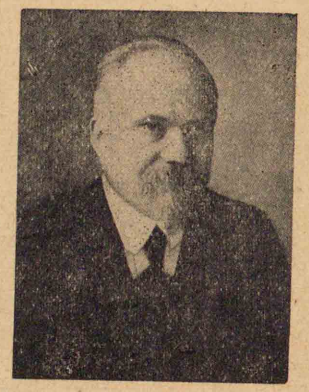
マジャール民族の奮起

㈢ ホンガリヤの國家主義　ホンガリヤ（Hungary）は大戰の結果、墺・匈二元國から離れて、マジャール人だけの民族國家を造つたのである。ところがルーマニヤ・イタリヤ・チェッコ＝スロヴァキヤ等から周圍の土地を削ら

れて、大戰前に比し領域が非常に狹くなつたので、祖國を愛するホンガリヤは、王政主義の攝政政府に統合され、共產主義を斥けて戰前の勢力にひき返さうと努めた。その爲にルーマニヤ及び、大戰によつて生れたチェッコ=スロヴァキヤ・ユーゴー=スラヴィヤ(セルブ=クロアート=スロヴェーヌ)の三國家は所謂小協商(The Little Entente)を組織して一種の防禦同盟を造り、フランスの援助の下にホンガリヤに對抗を策した。

圖解 ムッソリーニ 一八八三年北イタリヤの片田舍で生れたファシスト黨の出現

四 イタリヤの國家主義　イタリヤでは大戰後社會主義者が暴威を振つたが、ムッソリーニ(Mussolini)が出で、國民社會主義を奉ずるファシスト黨(Fascists)を率ゐ、國王より全權を受けて極端な獨裁政治を布き、(一九二二年)反國家主義者に抑壓を加ふると同時に、社會政策に全力を注ぎ、國論を一にして外交上、國權の發揚に努めた。卽ち先には獨・墺・匈の三國と相結んでフランスの專横を押へ、次いで一九三六年エチオピヤ(Ethiopia)を攻略し、一九三九年アルバニヤを併せ、獨・伊軍事同盟を結んで、英・佛諸國と對峙した。



圖解 ポアンカレー 一九一三年一月フランス大統領となつたフランスの國權主義

五 フランスの國權維持　大戰後フランスは强大な陸海軍を擁して、獨・伊兩國に當り、特にドイツの復興を抑壓するに全力を致し、一九二三年にはルール地方を占領して、ドイツの不信に制裁を加へた。その後財政著しく悲境に陷つたが、ポアンカレー(Poincaré)內閣の下にこれを整理し、常に國際聯盟に賴つてヴェルサイユ條約の維持に努め、ドイツの復興を阻止しようとした。

六 トルコの國權主義　トルコは大戰に敗れた結果、從來の領土の三分の二以上を失ひ、人口も二千萬から僅に八百萬足らずになつた。ここに國民黨のケマル=パシャ(Kemal-Pasha)がアンゴラ(Angora)より奮起し、一九二二年民族

圖解ケマル＝パシャ夫妻　もとのトルコ領サロニカの生れ、世界大戰に出征して功あり、元帥の稱を授けらる

トルコ共和政の出現

英國諸屬領の動搖

⑦英帝國内の民族主義

大戰當時民族自決主義が盛となつたが、戰後その影響で英帝國内に民族獨立運動が續々起つた。先づエジプトは大戰當時、公然たるイギリスの保護國となつたが、エジプト人はザグルル＝パシャ（Zaghlul Pasha）の指揮の下に、猛烈な獨立運動を開始し、一九二二年大體に於てその目的を達することが出來た。インドも亦、志士ガンヂー（Gandhi）等の指導の下に、革命獨立の運動を續けつつある。アイルランドは大戰當時より、激烈な獨立運動を開始し、一九二二年遂にアイルランド自治領（Irish Free State）として、英國自治領と均等の地位を得た。しかし、デ＝ヴァレラ（De Valera）の一派はこれにも滿足せず、絶對分離を主張して常に不安を釀しつつある。

圖解デ＝ヴァレラ　アイルランド自由國大統領、兼地方政並保健大臣

上シレシヤ人民投票

北シュレスウィヒ人民投票

ユダヤ民族復興主義

⑧上シレシヤ・北シュレスウィヒ等の民族運動

ヴェルサイユ條約で人民投票により、所屬を決するやう定まつた上シレシヤは、ドイツ・ポーランド兩民族の居住するため、それぞれドイツ・ポーランドに歸屬せんと希ひ、投票の結果は大體希望通り、獨・波兩國間に分割された。（一九二一年）北シュレスウィヒも同樣ドイツ・デンマルク兩民族の混住するところであつたが、條約による人民投票の結果は、北半部をデンマルクに、南半部をドイツに附し、大體上兩民族の民族的希望を達することが出來た。（一九二〇年）なほ十九世紀後半以降、世界に分散せるユダヤ民族を、もとのパレスチナ（Palestine）

チナに集めて民族的國家を起さうとの論議があつたが、大戰中より英國の援助を得てその運動が盛になつた。

㊈イギリスに於ける民主的傾向　大戰後、財政困難・物價騰貴のため、中産階級以下の困窮が甚だしく、勞働運動・社會運動が盛となり、これに乘じて民主的傾向が高調され、一九二四年、マクドナルド(MacDonald)の勞働黨内閣が出現した。その後、保守黨のチェンバレン内閣の時、獨・伊兩國の復興目ざましきを恐れ、フランスと提携を固くし、一九三九年ポーランドと相互援助條約を結び、ロシヤに近づいて獨・伊兩國の包圍を策した。

圖解　マクドナルド　一八六六年、スコットランドの貧農の子に生れ、刻苦勵精して遂に首相の地位を得た

勞働黨内閣

㊉ロシヤ=ソヴィエト政府の進展　大戰中に出來たロシヤ=ソヴィエト政府は次第にその勢力を展べ、一九二二年には全露の大小諸邦を合せて、社會主義ソヴィエト共和國聯邦(Union of Socialist Soviet Republics (U. S. S. R.))を組織し、翌年憲法を出して明確にこれを規定し、いはゆる勞農階級の武斷政治で共産主義を勵行し、さらにこれを全世界に宣傳した。しかしこの間當初の共産主義に若干の資本主義が加味され、所謂新經濟政策(The New economic policy (一九二一年))が出來、これが施行について、一九二四年レニン(Lenin)死後、當局者間の内訌を生じ、トロツキー(Trotzky)等追はれてスターリン(Stalin)が全權を握り、所謂「五箇年計畫(The Five-Year Plan)」を以て農工業をすすめ、教育を盛にし、軍備を修め、更に歐米諸國との國交を復し、極東方面に進出を企てた。

獨・伊包圍策

社會主義ソヴィエト共和國聯邦

圖解　スターリンはジョルジヤ出身(Georgia)の革命者。實力を以てカメネフ(Kamenev)トロツキー等を追ひ獨裁的權力を得た

㊉イスパニヤ革命　イスパニヤではブルボン家のアルフォンソ十三世(Alfonso XIII)が、保守專制の政治を行つたが、民主的傾向も盛になり、遂に一九三一年、革命が起つて王朝が仆れ、共和政府が出來た。しかし一九三六年、國家意識に目覺めたフランコ將軍は、奮然たつて共和政府を倒し、鋭意國力の恢復を圖つた。

イスパニヤ、ブルボン朝の顚覆

フランコ政權の確立

㊂國際聯盟の組織及び發展

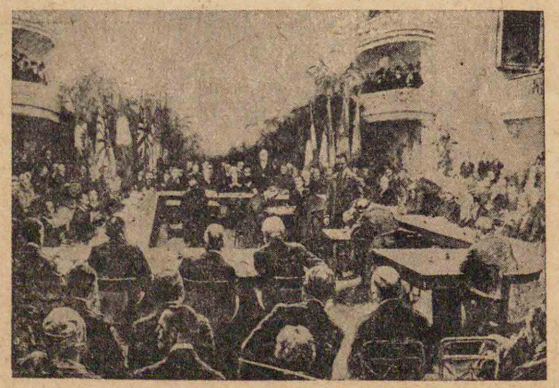
大戰の慘害は平和の欲求を增し、世界平和維持を目的とせる國際聯盟組織が、ウィルソンの提唱と列國政治家の贊同で講和條約に加へられ、後、參加國數五十七となり、殆ど世界大半を包括した。本部をスウィス、ジュネーヴに置き、國際間の紛議は聯盟理事會と仲裁裁判の審査に附し、必要あれば經濟封鎖の制裁を行ふ。オーランド諸島(Åland Is.)關係のフィンランド・スウェーデン間の紛議、上シレシヤ關係の獨・波間の紛議等、何れも聯盟の努力により、平和の解決が出來た。(一九一九年)(一九二一年)しかし聯盟が滿洲事變・滿洲獨立に對する日本の公正無私の態度を非難したので、われの聯盟脫退の通告となり、更に軍縮問題の不滿より、ドイツの脫退をひき起したのは、聯盟にとつて大打擊となつた。(一九三三年三月)(一九三三年十月)

國際聯盟規約

圖解ジュネーブ國際聯盟本部　この建物の背後はレマン湖であつて、湖畔の眺めは絶勝である

㊂軍備縮小會議と不戰條約

大戰後平和論が頻りに高調され、一九二一年米國大統領ハーディング(Harding)の主催に依り、日・英・米・佛・伊に支那を加へて、ワシントンに軍備制限會議を開き、その結果、日・英・米三國主力艦の噸數を三・五・五の比率に定め、更に日・英・米・佛の四國協約を結んで太平洋の平和を約し、日英同盟を廢棄した。また以上四國に伊・白・蘭・葡・支の五國を加へて九國條約を結び、支那の領土保全等について決定した。一九二七年第二回軍備制限會議がジュネーヴ(Genève)に開かれたが、失敗に終つたので、米國がフランスと協定して不戰條約を提議し、日・英・伊・獨等列國の贊助を得、一九二八年同條約がパリーで調印を了して、能ふ限り戰爭を中止することとなつた。やがて一九三〇年



ワシントン會議

圖解ワシントン軍備制限會議　一九二一年十月十二日開會。一九二二年二月六日署名調印、同年八月十七日批准完了

米大統領フーヴァーHoover と英首相マクドナルドの協議により、日・英・米・佛・伊五國のロンドン會議が開かれ、海軍の縮小を議し、特に日・英・米三國巡洋艦、その他補助艦艇の比率を、七・一〇・一〇と定めた。その後、日本は比率の撤廢を主張して、比率規定の兩條約を廢棄し、一九三六年末、無條約時代に入つた。

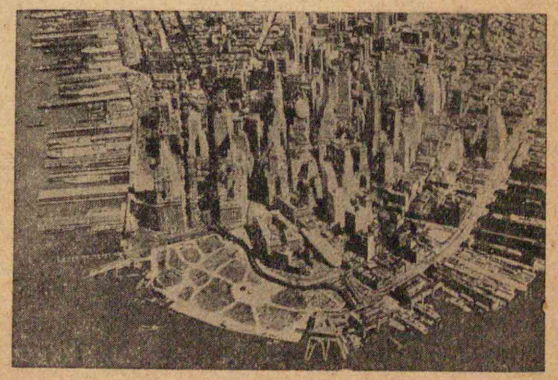
ロンドン會議

圖解近代都市
米國ニューヨーク鳥瞰圖
米國はニューヨークの如き經濟的大都市を有して、自ら對外的にも權勢を獲得した

第六章　現代の趨勢

民族自決主義

❶最近に於ける時代思潮　世界大戰は獨り歐洲のみならず、世界各國に大變革を齎らした。卽ち十九世紀以來唱へられてゐた民族主義は、戰後愈〻高調せられ、民族自決主義として、幾多の小民族國家を生じ、從つて國境線は著しく改變せられた。更に大戰に依つて民衆



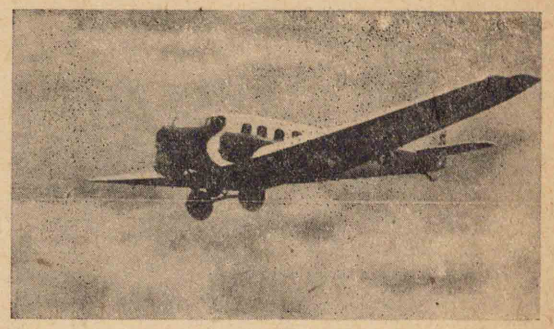
社會主義

國際協調主義

獨裁主義

の力は大に伸張せられ、戰後、民主・自由主義的傾向は急激に助長せられた。爲に英國に於ては勞働黨の活動となり、普通選擧は世界各國に實施せられ、その勢の極まる所は社會主義の隆盛となり、またロシヤ共產主義の如き過激思想も現れて、害毒を世界に流すに至つた。しかも英・米・佛等諸國は、戰後の現狀を維持して自國の利を圖らんとし、自由・平和の名の下に、大に國際協調主義を唱へた。大戰の慘害を見た各國もこれに贊し、通信・交通の發達と相俟つて、益〻各國間の和親をひき起し、國際聯盟、軍備縮小會議、各種の平和運動等が相次いで現れた。しかし戰後の現狀には幾多の不合理な點があり、爲に多くの國家に滿足を與へることが出來ず、加ふるに國力の疲弊、財界の變動、思想界の動搖等に依つて、世界情勢は漸く不安となつて來た。ここに於て獨・伊等諸國は、獨裁主義の政治を布いて、各種の改革を斷行し、强力な民族國家として、國權擁護と國力發展とを圖るに至つた。

科學文明と精神文化



圖解旅客用飛行機　十九世紀の初、英人ケーレー(Cayley)飛行機の原理を考へ出し、一九〇三年米人ライト(Wright)兄弟が飛行機での飛行に成功、次いで軍用・交通用各種の飛行機が作られるやうになつた

㊁科學の隆盛と精神文化の高調　現代文化の特色は科學の進歩とその應用にあり、特に電力・ガソリン=モーターの利用、航空機の發達等は驚異的なものがある。しかし科學文明の偏重は、社會生活の複雜化と共に、種々の弊害を招いた。かくて近來國家主義の發展に伴ひ、世界各國孰れも科學の振興と同時に、自國の精神文化を尊重し、更に他國のそれをも研究し、物質的・精神的に健全な文化を形成せんとしてゐる。

大ドイツ國建設の企圖

㊂歐洲大戰亂　最近に於ける歐洲の情勢を見るに、ドイツは新興の氣運に乘じ、英・佛等諸國の壓迫を排して、周圍のドイツ民族居住地を統合し、大ドイツ國を建設しようとした。即ち一九三八年オーストリヤを併合し、翌一九三九年チェッコ=スロヴァキヤのチェッコを併合し、スロヴァキヤを保護國となした。次いでポーランドに對して、ダンチヒ等の還附を要求したが、遂に九月同國と戰端を開き、ここに再び歐洲大戰亂が勃發した。現狀維持を圖る英・佛兩國は、直にドイツに宣戰し、ロシヤは機に乘じて、ポーランド及びバルト海沿岸諸國に侵入した。一九四〇年、ドイツは北歐の要地を占領し、同年五月、一轉してオランダ・ベルギーを席卷し、フランスを攻めたが、六月イタリヤはドイツに呼應して起ち、フランスは遂に屈服した。それよりドイツは、頻にイギリス攻略の機を窺ひ、翌一九四一年にはバルカン諸國に勢力を伸ばし、着々歐洲に新秩序を建設せんとしてゐる。しかし米國のイギリス援助は次第に強化せられ、ロシヤもドイツの勢力增大を好まず、同年六月遂にドイツと砲火を交へるに至つた。

戰亂勃發

フランスの屈服

第七章　西洋史上より觀たる我が國の使命と國民の覺悟

大戰後に於ける世界の趨勢は、一面、國際協調精神の盛なると共に、他方民族主義・國家主義の強大なものがあり、ややもすれば他國の發展を阻害して自國の興隆を圖らんとし、平和の氣運の裡に、既に爭亂の兆を藏し、遂に一九三九年歐洲大戰亂の勃發を見るに至つた。この間、我が國の急激な發展、滿洲帝國との親交、及び昭和十二年(一九三七年)に起つた支那事變等に依つて、列國いづれも東亞の動靜に注目し、或は我が東亞新秩序建設の使命を妨害せんとするものも少くない。

我が國の使命

しかし我が國は、毅然としてその使命達成に邁進し、加ふるに昭和十五年(一九四〇年)には、日・獨・伊三國同盟を締結して、更に世界の新秩序建設に寄與せんとしてゐる。

日本文化の進展と外國文化

日本の歷史を西洋史に比較すれば、尊嚴なる我が國體の發露する所、獨自無比の發展を遂げた所以を愈〻明瞭に知ることが出來る。しかも日本文化の躍進を遂げた時代は、必ず外國との交渉の盛な時代であり、その時代には常に國民の自覺を喚起し、嚴然たる自主的態度によつて、彼の長を採り、以て新日本文化を建設するに努めたのである。世界一體の今日、日本のみの日本ではあり得ない。同時に日本なき世界はあり得ない。されば日本精神・日本正義を世界精神・世界正義にまで高めることが、崇高な我が國の使命であり、現代に於て最も緊要に感ぜられる所である。

我が國民の覺悟

我が國民たるものは、今後の日本文化を正しく導くため、强固なる國民的自覺に基いて西洋史の發展を理解し、惹いては、世界の新しい歷史を創造するやう覺悟しなければならぬ。

新編中等西洋史

終

一九三三	同	同	ヒットラー、ドイツ國粹社會主義內閣をつくる	
一九三四	同	同	(八月)ドイツ大統領ヒンデンブルグ死、ヒットラー人民宰相となる。(十月)ユーゴースラヴィヤ王アレクサンドル佛國マルセイユで暗殺さる	
一九三五	同	同	(一月)人民投票の結果、ザール河流域ドイツへ歸還。(三月)ドイツ軍備制限條項を廢棄す	
一九三六	同	同	(三月)ヒットラー、ラインランド再武裝宣明。(五月)伊軍、エチオピヤに勝ち、エ都アジスアベバ陥落。この年佛ソ條約批准。(七月)イスパニヤに大內亂起る	
一九三七	同	同	(十一月)日・獨・伊防共協定成立	
一九三八	同	同	(三月)ドイツ、オーストリヤを併合す。(九月)ミュンヘン四國協定成立(ズデーテン地方のドイツ割讓)	
一九三九	同	同	(三月)ドイツ、チェッコを併合し、スロヴァキヤを保護領とす。(四月)イタリヤ、アルバニヤを併合す。(九月)ドイツ・ポーランド開戰。英・佛對獨宣戰布告	
一九四〇	同	同	(六月)イタリヤ參戰。(九月)日・獨・伊三國同盟締結	
一九四一	同	同	(六月)ドイツ・ロシヤ開戰	日本の國際聯盟脫退の通告
				(三月)滿洲帝國成立。(十二月)日本、ワシントン條約廢棄を通告
				年末、ワシントン・ロンドン兩條約失效、日本、海軍無條約時代
				(七月)支那事變勃發
				米國、日・米通商航海條約廢棄
				中華民國新國民政府成立。紀元二千六百年祝典

大事年表五、現代史

年代				事蹟		
日本	支那	世紀	西紀	西洋	東洋（日本及びその他）
明治	同治	十九世紀	一八八二	三國同盟締結	
同	同		一八八八	ウィリヤム二世卽位	
同	同		一八九一	露・佛協商、シベリヤ鐵道起工	翌年帝國憲法發布
同	同		一八九八	米・西戰役	教育勅語宣布
同	同		一八九九	南阿戰役起る（—一九〇二）	露・英・獨、清國の地を租借す
同	同		一九〇二	日・英協約締結	條約改正成る
同	同		一九〇四	英・佛協商成立	義和團の變（北清事件）
同	同		一九〇五	日・英協約改訂	日露戰役起る
同	同		一九〇七	英・露協商成立	ポーツマス條約締結
同	同		一九〇八	トルコの憲法發布。オーストリヤのボスニヤ・ヘルツェゴヴィナ二州併合	三國協商成立
同	宣統	二	一九一一	伊・土戰役起る（—一九一二）	戊申詔書宣布 清德宗崩じ宣統帝立つ 一年前、日韓併合
大正	中華民國		一九一二	バルカン戰役起る（—一九一三）	清國に革命起る
同	同		一九一四	世界大戰起る	明治大帝崩御。大正天皇踐祚。支那共和政を布き中華民國と稱す
同	同		一九一五	五月伊・墺開戰。十月ブルガリヤ、ドイツ加盟。獨軍の爲セルビヤ首府陷落	日本青島攻陷
同	同	十	一九一六	（二月—六月）ヴェルダン要塞戰。（五月）ユトランド沖大海戰。（八月）ルーマニヤ對墺宣戰。（十二月）獨墺軍ルーマニヤ首府を陷る	支那第三革命
同	同		一九一七	（一月）米國對獨斷交。（三月）ロシヤ革命ロマノフ家倒戰。（十一月）ロシヤに再び革命あり、勞農政府起る	袁世凱死す
同	同		一九一八	（三月）ブレストリトウスク條約。（九月）ブルガリヤ降服。（十月）トルコ降服。（十一月）オーストリヤ降服。（十一月十一日）ドイツ降服	
同	同		一九一九	（一月—六月）パリー講和條約。（六月二十八日）、ヴェルサイユ對獨講和調印	尼港事件
同	同		一九二〇	（一月）國際聯盟正式成立。（四月）アンゴラ假政府成立	裕仁親王攝政
同	同	世	一九二一	（五月）ドイツ賠償金額決定。（十一月）ワシントン會議開かる	
同	同		一九二二	（二月）ワシントン會議終了。エジプト獨立。（八月—九月）ケマルパシヤ、ギリシヤ軍を斥く。イタリヤ、ファシスト獨裁	

大事年表五、現代史

年代	日本	支那	世紀	西紀	事蹟		
	明治	清德宗	十九世紀	一八八二	三國同盟締結		
	同	同		一八八八	ウィリヤム二世卽位		
	同	同		一八九一	露・佛協商、シベリヤ鐵道起工		
	同	同		一八九八	米・西戰役		
	同	同		一八九九	南阿戰役起る(—一九〇二)		
	同	同		一九〇二	日・英協約締結		
	同	同		一九〇四	英・佛協商成立		
	同	同		一九〇五	日・英協約改訂		
	同	同		一九〇七	英・露協商成立		
	同	同		一九〇八	トルコの憲法發布。オーストリヤのボスニヤ・ヘルツェゴヴィナ二州併合		
	宣	統帝	二	一九一一	伊・土戰役起る(—一九一二)		
	大正	中華民國		一九一二	バルカン戰役起る(—一九一三)		
	同	同		一九一四	世界大戰起る		
	同	同		一九一五	五月伊・墺開戰。十月ブルガリヤ、ドイツ加盟。獨軍の爲セルビヤ首府陷落		
	同	同	十	一九一六	(二月—六月)ヴェルダン要塞戰。(五月)ユトランド沖大海戰。(十二月)獨墺軍ルーマニヤ首府を陷る		
	同	同		一九一七	(一月)米國對獨斷交。(三月)ロシヤ革命ロマノフ家倒戰。(十一月)ロシヤに再び革命あり、勞農政府起る		
	同	同		一九一八	(三月)ブレストリトウスク條約。(九月)ブルガリヤ降服。(十月)トルコ降服。(十一月)オーストリヤ降服。(十一月十一日)ドイツ降服		
	同	同		一九一九	(一月—六月)パリー講和條約。(六月二十八日)、ヴェルサイユ對獨講和調印		
	同	同		一九二〇	(一月)國際聯盟正式成立。(四月)アンゴラ假政府成立		
	同	同		一九二一	(五月)ドイツ賠償金額決定。(十一月)ワシントン會議開かる		
	同	同		一九二二	(二月)ワシントン會議終了。エジプト獨立。(八月—九月)ケマルパシヤ、ギリシヤ軍を斥く。イタリヤ、ファシスト獨裁		
	同	同		一九二三	(一月)ルール占領。(十月)ケマルパシヤ大統領となる		
	同	同		一九二四	(一月)英國勞働黨內閣成立。(八月)ドーズ案成立		
	同	同		一九二五	(七月)ルール撤兵。(十月)ロカルノ安全保障條約		
	同	今上		一九二六	(九月)ドイツ國際聯盟加入		
	同	同	紀	一九二七	(六月—八月)日・英・米三國海軍制限會議		
	同	同		一九二八	不戰條約成立		
	同	同		一九三〇	(一月—五月)ロンドン軍縮會議		
	同	同		一九三一	米大統領、ドイツ償金支拂延期を提議す。イスパニヤ革命		
	同	同		一九三二	(六月—七月)ローザンヌ會議		
	同	同		一九三三	ヒットラー、ドイツ國粹社會主義內閣をつくる		
	同	同		一九三四	(八月)ドイツ大統領ヒンデンブルグ死、ヒットラー人民宰相となる。(十月)ユーゴースラヴィヤ王アレクサンドル佛國マルセイユで暗殺さる		
	同	同		一九三五	(一月)人民投票の結果、ザール河流域ドイツへ歸還。(三月)ドイツ軍備制限條項を廢棄す		
	同	同		一九三六	(三月)ヒットラー、ライン蘭再武裝宣明。(五月)伊軍、エチオピヤに勝ち、エ都アジスアベバ陷落。この年佛ソ條約批准。(七月)イスパニヤに大內亂起る		
	同	同		一九三七	(十一月)日・獨・伊防共協定成立		
	同	同		一九三八	(三月)ドイツ、オーストリヤを併合す。(九月)ミュンヘン四國協定成立(ズデーテン地方のドイツ割讓)		
	同	同		一九三九	(三月)ドイツ、チェッコを併合し、スロヴァキヤを保護領とす。(四月)イタリヤ、アルバニヤを併合す。(九月)ドイツ・ポーランド開戰。英・佛對獨宣戰布告		
	同	同		一九四〇	(六月)イタリヤ參戰。(九月)日・獨・伊三國同盟締結		
	同	同		一九四一	(六月)ドイツ・ロシヤ開戰		

年代	日本	支那	世紀	西紀	事蹟		
	明治	清德宗	十九世紀	一八八二	翌年帝國憲法發布		
	同	同		一八八八	教育勅語宣布		
	同	同		一八九一	露・英・獨、清國の地を租借す		
	同	同		一八九八	條約改正成る		
	同	同		一八九九	義和團の變(北清事件)		
	同	同		一九〇二	日露戰役起る		
	同	同		一九〇四	ポーツマス條約締結		
	同	同		一九〇五	三國協商成立		
	同	同		一九〇七	戊申詔書宣布		
	同	同		一九〇八	清德宗崩じ宣統帝立つ		
	宣	統帝	二	一九一一	一年前、日韓併合		
	大正	中華民國		一九一二	清國に革命起る		
	同	同		一九一四	明治大帝崩御。大正天皇踐祚。支那共和政を布き中華民國と稱す		
	同	同		一九一五	日本青島攻陷		
	同	同	十	一九一六	支那第三革命		
	同	同		一九一七	袁世凱死す		
	同	同		一九一八			
	同	同		一九一九			
	同	同		一九二〇	尼港事件		
	同	同		一九二一	裕仁親王攝政		
	同	同		一九二二			
	同	同		一九二三	關東大震災		
	同	同		一九二四			
	同	同		一九二五	孫文死す。日露國交回復		
	同	今上		一九二六	日本、今上天皇踐祚		
	同	同	紀	一九二七			
	同	同		一九二八	日本、今上天皇卽位		
	同	同		一九三〇			
	同	同		一九三一	滿洲事變		
	同	同		一九三二	上海事變。滿洲國承認		
	同	同		一九三三	日本の國際聯盟脫退の通告		
	同	同		一九三四	(三月)滿洲帝國成立。(十二月)日本、ワシントン條約廢棄を通告		
	同	同		一九三五			
	同	同		一九三六	年末、ワシントン・ロンドン兩條約失效、日本、海軍無條約時代		
	同	同		一九三七	(七月)支那事變勃發		
	同	同		一九三八			
	同	同		一九三九			
	同	同		一九四〇	米國、日・米通商航海條約廢棄		
	同	同		一九四一	中華民國新國民政府成立。紀元二千六百年祝典		

昭和十二年六月一日印刷
昭和十二年六月十日發行
昭和十三年一月十五日修正再版印刷
昭和十三年一月十五日修正再版發行
昭和十六年十月一日修正三版印刷
昭和十六年十月十五日修正三版發行

新編中等西洋史
定價金壹圓貳拾四錢

著作者　時野谷常三郎
東京市麹町區飯田町二丁目二十番地

發行者　中等學校教科書株式會社
代表者　山本慶治
東京市蒲田區仲六郷一丁目五番地

印刷者　株式會社三省堂蒲田工場
代表者　岸本玄男

發行所　東京市麹町區飯田町二丁目二十番地
中等學校教科書株式會社
日本出版文化協會會員番號　一一七五二二

（略名）三省時野谷西史

配給元　日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二ノ九

3D NC.1 Ichiro Kaneko

三年丁組
金子

広島大学図書
2000089531